

會報

第拾貳號

培玉女子師範學校校友會
培玉女子師範學校同窓會

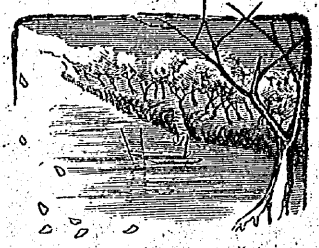


10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

平田義備氏の結婚を壽ぎてよめる	同	會長	直江先生
ほぎまつらな	同	副會長	川口先生
秋興	同	同	同
和歌四首	同	同	同
母まつごとく	同	同	同
たそがれ	同	同	同
風	同	同	同
海邊の松	同	同	同
夏の山路	同	同	同
富士登山紀行	同	同	同
富士登山	同	同	同
富士紀行より	同	同	同
その一	同	同	同
その二	同	同	同
その三	同	同	同

○消 息

學校消息
先生方の御移動
式と會
旅行
校友會消息
運動部便り
音樂部便り
寄宿舎便り
編輯便り
同窓會消息
會員消息



講 話

保己一先生傳

角 田 先 生

今日は塙保己一先生に關する講演會におまねきにあづかりまして、不肖ながら先生に關するお話をいたす事になりました事を甚だ光榮と存じます。先生に對する事は詳には存じて居りませんが、私は先生の御出生地に敎職を永らくとつて居りますので、幾分か先生の事について皆様にお話し申し上げる事が出来ると存じます。然し私の如き淺學の者が塙先生の傳記を申し上げるといふ事は、甚だ不遜の嫌ひが御座いますが、皆様にかかれましても前に申し上げました通り、先生と私の關係を御了解下さいましたならば、お話し申し上げる眞意もお解り遊ばす事だらふと存じます。

これは私の方から申し上げますと、私事にもなりますが、まだ忘れもいたしません、私は明治二十四年四月八日の日に埼玉縣尋常師範學校第一學年としてはるゝと此の學校へ參つたので御座います。そして此の壯大な講堂にはいりまして大變に驚き、はたしてこのやうな立派な學校で四年間を無事にすごし、事なく卒業が出来るかと思

不安に思ひましたが、しかし、明治廿八年に卒業いたしました今日に及びました。さうして今日又幾年振りでお伺ひいたしました見まするに、今もなほ外を見ると、青桐の木も、白根縣令の額も又、このランプのつり手なども今も尙昔のまゝなるを思へば、轉た感慨に堪えない次第で御座います。時には試験がよいと思つて元氣にこの階段をとり下りた事もありますし、わるくてすぐ下りたこともあります。皆さんもいまさうして居られるかと思ひますと、憚り乍ら丁度妹のやうに皆さんが思はれます。故に甚だ失禮のことですけれども私はこの演説をすると同時に、失禮な言葉が出ることもありませうが、それも皆妹とも思ふへだたらない心から御座いますから心意を諒として御許しの程願ひます。

それ／＼の専門的のお話は先生方及阿佐美さん、溜貝さんなどから御座いますから、私は先生の御履歴について申し上げやうと思ひます。

番町で目あき目くらにものをさし。

番町にすぎたるものが、二つあり、

住野の櫻と塙校。

かくの如き狂句、狂歌は要するに、後に至つてかくの如き偉大なる事業と、高遠な學との反映は、如何に、當時、大江戸の滿都を騒がしたことでありませう。その偉大な先生を生み出したのは、申すまでもなくこの埼玉縣の兒玉郡金谷村なのでございます。只今で申しますとこの浦和から本庄へ二時間、それから電車で凡そ二十分て兒玉へをりますと、十町許りゆきますと一本の大きなケヤキがあります、この家こそ先生の呱呱の聲をあげられた家でござります。ただいまは荻野茂十郎といふ人があとをとつて思はれます、前面田をひかへ、後は畑、近くには鎮守の森があります、至つて小村でございまして、全戸數十餘戸許りて御座います。今を去ること七十年前、三月の端午の節句の朝、世の中ではかしはもちをたべ、赤飯を祝つて居る目出度き日に先生は、御生れになったのであります、むかしは、端午の節句の日に男子の生れるのは大變よろこばれたのださうですが、斯ういふ

日に先生が生れたといふことが既に萬人と異ふ所であつたてでありませう。

先生の家は其の昔有名なる參議小野篁の子孫が武藏の守となつて居りましたが任滿ちても京に歸らず兒玉郡に遊びしといふ。爾後豪族となつて鎌倉に事へ次いで秀頼に事へて居りました大坂落城の後この兒玉の塊村に參りました者が兩刀を捨て、百姓になりました。數代をへて塙重次といふ者がありました。これが先生の父で、此人につきましましては良々話し傳へがござります。或る年村に傳染病が流行しまして村の大部分の人が之に侵されました時、親しく家を訪ねては米金を恵んだ相であります。奥さんは一里許り北に住んでゐる齋藤利左衛門といふ人の娘であります。此人は親孝行で有名な人でありましたから、その娘である故に私が察する所によりますと之又並大底な人ではなかつたらうかと思ひます故に婦女子の教育も、丁度延喜三年は寅年でありますので寅之助と名づけられました。蝶よ花よと育てました、三歳の時痢の病になりましたので、兩親の心配は一方でありません、醫師も薬もと手に手を盡しましたがどうしても直りません。遂に目までも悪くなりました。

上州の藤岡に桐淵といふ眼科の醫者がありまして、毎日連れて行きました平癒を祈つたのであります。或る時母が寅之助を後ろに背負つて他所へ出ると急に大聲を出して泣くので、驚いて下して見ますと哀れや兩眼はつぶれてゐたのです。之が丁度五歳の時であります先生は之を五歳だといふが七歳といふ者もある。が五歳が誠だと云はれて居ります、この様に不幸にして果ては目さへなくすといふ哀れな状態となりましたので寅年に生れて寅之助と改名いたしました、こゝで二年の差が傳記に残つたのであらうと言はれて居ります。

どうかして、目は止むを得ませんが體だけは丈夫にしたいといふ親の願ひで池田村、只今の青柳村に、修驗者の正覺坊といふ者がありまして、此の弟子として辰之助の多聞坊と名づけました、それからやがて體が、丈夫となり五つ六つやがては只今の學齡にも達する様になりました、盲ながらも友達とよく遊んださうてまた情もありました。

ある時腕白な子供達が「辰ちゃんお前栗を拾つて来いよ」といひました、するとその度に「ハイ、私は目は見

えませんけれど手さぐりて拾つて來ますよ」と、優しく言つて居つたさうであります。

八、九、十、十一、は別に云ふ事もなく過ぎ寶曆七年十二歳の時母様はふとした風邪がもとて終にあの世の人となりました。今まで床の中でカチ／＼山の話しをして樂しましてくれた母は逝つたのでした。

辰之助のかなしみは一方ならず、手さぐりに位牌を拜し墓ををがんだといふ事です。

目の見えぬ辰之助は箸をもたせ碗をもたせて呉れた母を失つたのでした。其の翌年十三歳の時こゝにいふ事を聞いたのでした、江戸では太平記の一節を誦んじて貴顯紳士のもとてそれを語り若干のお金をもらつて生活してゐるものがあるといふ事を。

先生の考へますには此の村で針を習つて按摩となつて此の草ぶかい保己野に朽つるよりも江戸に出る方がどんなによいか解らない、江戸には太平記の講義だけをして立派に生活をしてゐる人がある。自分もさうなりたいと思つて或る日「お父さん私は此の姿で江戸へ出て一働きたいと思ひます、決して御心配はかけませんからあゆるし下さい」といふ事をたのんだのであります、すると父は「いや／＼江戸は人情の薄いところ立派な智識と身體とを持つてゐるものでなくてはとてだめだお前の様に目の見えぬものが、これから出世しやうと思つてもだめである。お前を養ふ位の事はしてやるからどうか思ひ止つてくれ」と云つたが聞かれました。そこで詮方なくお父さんも許しになりました。

それが丁度先生の十三歳のとき、只今ならば、尋常五六學年の年輩なので御座います。

江戸へつれて出ましたのは、水野某と云ふ、生絲商人でありました。しかしかれには一寸異説がございます。一體先生の家は私の母方の遠い縁戚に當つてをるのであります。そこには私の母の父の家の家がございましてその祖先に當る土地の大官をつとめてゐた長島源之、といふ者が連れて行つたのであると母などは確く信じてをるのでございます。それは先づ一説として申し上げます。さて、八年春三月、いよいよ郷里保己野の村を出發致します。當時のことありますから、わらじに菅笠、絹商人につれられて、深谷熊ヶ谷、近くは、この邊をも通

つたこととありませう。先生は腰にうこんの巾着をかたく結びつけて中には僅許りの路金を入れて出して出たのであります。これは、かつて母親が縫つてくださったのであります。こゝにございすから後に御覽を願ひます。春にはそうめん箱へ多少の着かへを入れて、右手に杖をつき、左手を絹あきんどにひかれて、見えぬ乍らも負けぬ氣で出發したのであります。

私は多くの學生さんたちが先生の遺物を見る度に「貴君方は立派な巾着に澤山のさつや金を入れて而も汽車や電車へのつて浦和なり東京なり出かけますが果して先生の様に出世するかどうかそれは疑問であると惡口を申します(此時笑聲大いにあこる)。

かうして先生はやう／＼にして江戸に着き、當時盲人として羽振りのよかつた雨富管元一先生の門弟となられたのであります。後に色々申し上げますが此先生のえらかつた事について考へますと私も教育者の末席を汚してゐる者の身から申しますと、師匠の心は算いものでございす。さて當時盲人の仕事と致しましては琴三味線の音楽、針、揉み療治の事位なもの、そこで雨富は先生にも之を學ばせ様と致しました。一體盲目といふものはかんが強いもので音楽等には、堪能であるべき筈です、が先生はどうした事かそれ等は一向不得手であります。お琴を一曲仕上げるにも容易ではありません。師匠は時に小言も言ひますがやはり駄目であります。自分が出る時今に立派なものになると云つたのに今更申し譯もなし、草葉の蔭の母親にも申し譯ないと、思案の結果遂に死を覺悟致しました。

或る日の夜、夜道を辿り／＼、九段は石が淵、只今で申しますと、近衛師團のある附近まで參りました。雨の袂に石を入れて將に死なんとしたる時に嗚呼、天なる哉／＼。天は先生を救つたのであります。

先生はふと一つの事を思ひました。自今は、父の止めるのもさかないでかうして出て來たからには、一方に於て具らぬ所があつても直ちに失望してしまつては駄目だ、一方に不得手があつても一方には必ず發達する點があるであらう死ぬのは止めた。止めた。自分は諸記がいゝから先生にも此事を話して針などはよしにしてその方へ

志を向けやうと、こゝに、飄然として覺る所があつたのでありました。そして草葉の蔭の母、故里の父、その二人に心ひそかに詫び乍ら、師匠の家へかへり、一ぶしじうを打ち明けました。そこで先生も尤もな事と思ひ、その後には色々の學問の師匠を取つて學ばせて呉れたのでありました。その頃歌の先生でありました萩原宗古について歌を學び、その他川島高重については、小學、さしん祿、山岡年明には律令を學ぶ所があつた。品川に居りました時には醫學等を習ひ、松平織部之正よりは、わづか十二三の旨目の子が學問にたづさはるといふ事に同情して、大分いとしがつて色々な事を教へて呉れました、わけても高井山城の守の奥方が非常に可愛がりまして時々、肩をもませなどしそのもみちんとしては種々の本を讀んで呉れられ、千爺は、又これを何よりの樂しみとしてをりました。此様にして、或る時此奥さんが榮華物語といふ書物を買つてあたへられました、實に此本が、生れて以來始めて先生が自分の物として持たれたものである様であります。殊に面白い話があります。

多分十四か十五位の時のことだつたさうです。このときの記事や繪など、私のつくりました幻燈へも出て居りますが。或夏のこと、せんやは蚊帳の中で、肩を揉みましてから、奥方がさあこれから本を讀むてきかしてあげやう。

との事にせんやは蚊帳の外に出まして、奥方がすら／＼と讀むて下さるのを聞いて居りました。けれどもあまりに蚊がひどい爲、それを追ひまする際に、つひさゝもらしてしまふことが御座いますので、せんやは之れを非常に惜しがつて、出來るだけの我慢をいたしては居りましたが堪へられないうちに、つひ又しても手で追つてしまひますので、はてはこれではならないと、紐で兩の手を、しつかりと縛つてきいて居たのでありました。その勉強心のつよいこと、努力の雄々しいことなどには、ただ／＼感服の外はありませんとこそ、私は度々家の子供にこの事を話してはきかせて居りますが、兎角母親の膝などにもたれて、火鉢のそばなどにうたゝねをしてしまふのであります。さうしてあくまでもこのせんやさんの御えらかつたことにくらべまして、及ばないので御座います。

ところで、せんやさんはどうして苦しい思ひをしながら蚊帳の外などできいて居たのだらう。なぜ中へ這入らないか。……などの無作法の考をこすやうな御方は皆さんのうちにも御座いますまい。このやうにしてつとめましたからだん／＼と智慧はつきりましたが、遂にからだをそこねてしまひました。そのうちに、十五、十六とすぎ五箇年の後に、めくらの初歩の官位のしゅうぶんといふのになりました。その當時非常にかたが虚弱になつて居りましたのにもかゝらず、勉學につとめて居りましたのでその結果ます／＼からだはよくなるばかりでした。それを管元一先生は大變に憂へて、どうかして丈夫にしてやりたいものだ。どうしたらよくなるだらうと一通りの心配ではありませんでした。そこで、せんやさんの廿一歳明和三年に、先生が申されますには「自分は長い間、どうぞして伊勢參宮をしたいものだ、心がけて居りましたが、遂にいまいそをしませんでした。見ればお前も大變にかたが弱つてゐるやうだ、旅に出るといふことは、こんな紅塵の都に居るより、景色のよいところに、時には潮風などに吹かれたりして見えないながらもさうしたところに觸れて保養してくるがよい。それには自分はゆくことが出來ないが、幸ひに今こゝに、自分が若干の金を備へて居るから故郷の父を呼んで幾日か、つてもよいから、お父さんと二人して氣長に旅をしてくるがよい。」と金五兩をくれました。この情あることばにせんやの喜びはひと通りではなく、殊に、父は祖母をなくして悲しんで居るところではあるしするので、ほんとに喜んだのであります。

當時の五兩といふますと只今なら百五十圓や二百圓のものであつたのでせう。それを持つて、東海道を辿り／＼父につれられあれ松よ鳥よ海よとあちらこちらと見物し、伊勢に行きては見えぬ乍らも涙をぼしてそれより天満宮を拜し之を守り本尊とすることにきめました。一體、先生は、自分は盲目の身を以て出世しやうとするのでありますから、それには信仰心がなくてはならない。それには何を信仰し様かと思つた時、自分としては豊太公を崇拜してゐるのだけれども、然し、自分は學問をして行くべき身だから菅公を信ずるより外はない、そこで天神様を崇め様と考へたのでした。そのとき二十幾日かを二人で思ふ存分に旅をしました。そのために身體も丈夫に

なりこれより色々の先生につき非常の努力を致しました、話が一寸前後になりましたが、十八の時秋分になりその時から千歳を改めて保己一と改めたのであります。

それから三十歳の時、秋分の上の公等といふ官に上りました時其の名を保己一といふ様になつたので、ございます。保己一が眞當か保己ノ一が眞當かと尋ねる方がありますがその二つには、こゝにいふ關係があるのであります。その保己ノ一の勉強の仕方は並大抵ではありません。師匠を始め、大變之に感じ入りどうかして、上の官に進ませ様として金百兩を貢ぎましたので遂に公等の官に上る事が出来ました。しかしそれは金によつて得た官位では無いのであります。

かうしてだん／＼學問もすゝみまじた。つら／＼自分を考へますと學問は覺えなければでもそれを活用しては居ない。活用させ様として出来たものが群書類従と、和學講談所とであります。今私は之についての苦心を一寸、申し上げたいと申します。自分はこうとうに成らんとして千日の祈願をこめてそれができたのである、此後は何をするにも天神様にお願ひ申さなければならぬ。二冊三冊の本はとかく粗末にされて散り／＼になり勝ちなものであります。こゝに於て自分の知見を以て古來の小書を、本にし直して見様といふのが此の書を作るに至つた動機でありました。此書をつくるにはどうしても人の手を借らねばならぬ。故に天神様に盤若經百萬卷の願を懸けたのです。讀み始めましたのが安永八年先生が三十五歳の正月元旦でありました。毎朝寅の刻といひますと只今の午前四時から起き出して潔齋し二時間なり三時間なりを讀みますと食事をすまして直ちに群書類従を書かれたのであります。讀經を何回するか解らなくりますので側についてゐる者が、一回毎にひもを結んで箱の中入入れたのであります。そしてその箱の數を一々書きとめて置いた。それのすんだのが文政四年八月廿二日、丁度此間の年をくりますと四十二年と八ヶ月廿二日になつてをります。即ちざつと四三年であります。皆さまが平均十七としますと六十のおばあさんになる年までつづけた譯でございます。所でこれが四十三年間使つたノートブックであります。

よく今時の學生が、金のふちのついた、なめし皮表紙のブックを半年位にめちや／＼にしてしまひますがこれを見たら幾分反省して戴きたいと思ひます。讀んだのが全部で二百一萬八千九百九十卷、その他何千卷の書があります。その外書物を編む許りでなく、和學講談所て本を編みなほしたり子弟を教へたりしたのであります。其後先生の徳を永久に記念するために恩願堂といふ所をつくり、そこには何萬卷といふ書を藏して、それを土臺として、後世著書の參考と致しました。

當時の文公に事へて大日本史編纂の主腦とていふべき立原隨軒といふ人が、先生の學者であることを知り、之を考證させることに致しました。當時水戸家では、盲人にその様な事をさせるといふことを忌みましたが、非常な學者であるといふ事からそれを文公にも申し上げていよ／＼先生をしてその任に當らしめる事になりました。先生の事業群書のみの様に思ふけれど先生の群書類従は只全事業の一部分のみであります。寛政六年五十六歳の時、あげられて盲人一座の取締役となり文化二年六十歳の時には、十郎といふ役目にあげられ、ついで文政元年七十三歳の年には、天下に二人しかないじらうと言ふ役につけられました。此役になりますと京都に居るべきですが著書の關係から特に許されて江戸にをりました。

天政四年には、遂に(七十六)總檢校、文化六年四月十七日には、その時の老中上村駿河守が奉行として書附のお召し狀を下され、それによつて將軍にまみえる事が出来ました。當時百姓から身をおこして將軍に拜謁するとは無上な光榮であつたのであります。事業は成功し將軍に見え、精神は書となり和學講談書となつて後世まで功績は消えずに残つてゐるのでございます。

これが先生の傳記の大體でありますが、先生の逸話ともいふべきもの二三をあげて見ませう。始めて水戸の文公に見え共に京へ上られる時、着物が一枚ぎりありません。文公が言はれるには、一枚では仕方がない、外にないか、ありません。私は群書類従を編むために多くの金が入りましたので大阪の鴻池にも二千圓、借金があつてとても、返しきれません。それ故に着物などに餘分のものを置くことは出来ません」それでは

仕方がないといふので文公が一枚下すつた相です。又食物の如きものも、魚も食べないし酒ものもせず、それから戴いた盃で晩年にほんの二つか三つかのみました許りである相です。以上は廉潔ともいふべきもの、も一つは、丁度三十いくつかの時ですが師である、檢校が亡くなられた時先生をよばれまして「さて、私も此世を去らねばならぬ前も出世してよかつた。私は幾分の財産があるがゆづるべきものがない。これはお前にゆづる程に費用の一部分にするがよい。それに證文があるが、返す人があつたならお前の物にするがよい。」といふと先生は「私は十三の時江戸にまゐりましてこれまでに成つたのは皆先生のお蔭、それなのに尚、お金を戴くのは以ての外」と辭退されました。その中に雨富先生は此世をお去りになりましたので、此財産は後に同輩に分けてやつて自分は少しも取りませんでした。

光り見し。

先生の亡くなられた後に追悼の歌とされたものでありませう。

又、先生の奥さんはいよ子といふ方で誠に手書きな方方に對しては實に貞節な方でありました。或る名月の時に月見の宴を開かれました時、先生が、

「花ならば、さぐりでも見ん、今日の月」と物されますと、直ちに「名月は、座頭の妻の泣く夜かな」と後をつけられた相であります。此夫に對する情は婦人の模範たるに充分と存じます。けだし先生の事業のかくの如くに偉大であつたのはひとへに内助の功があつたものであり。かくの如き先生あつてかくの如き夫人ある事と私どもは崇拜してをります。

皆さんが女であります故に一寸奥さんの事を申しそへました。此學校の心得を實行した適例として先生をあげたいと思ひます。つまらない話を長々と致しましたが先生方並びに皆さまには、よく御熱心にあき、下さいましたことを感謝して此壇を下ります。

(文責在記者)

江戸時代學界の大勢

客員 鈴木 先生

題目は大分大袈裟ですが、話が果して題目に副ふかどうかは疑問です。總じて其の時の社會狀態が、偉人や豪傑を現はすもので、塙先生も其の時代に應じて大偉業をなされたものと思ひます。ですから徳川時代學界の大勢を御話する事が此の際決して無用の事ではないと思ひます。

先づ第一に江戸時代に入りまして、學問の研究が自由になりました事について御話いたします。頼朝が鎌倉に幕府を開き武家政治が始まつて以來、學問が輕蔑せられるやうになりましたので學問は時の社會と直接關係のない僧侶公卿の手にうつり從つて學問の門戸がせまくなり、學問の獨占となつた、徳川家康が太平の基を開くや學問獨占の風が一掃されたのです。僧侶や公卿などが、學問藝術を獨占していたと云ふ遺風は、維新の頃まで續いて茶道、醫道に従ふ者は皆僧侶でありました。徳川時代になつて普通一般の人に渡つて、儒者國學者と云ふ特別の階級が出来たと云ふことは、最も注意すべき事でありました。そこで學問の獨占はなくなりました。官職家柄の上下は嚴重になりましたが、學問の上にはさういふ區別はなく、何人にも開放されたのです。そこで色々の學問が勃興し、學問研究が自由となりました。唯昔から傳つた説を固く守り先生の云ふ事を墨守する事がなくなりあらゆる事を新に研究する様になりました。どこまでも學問を根本的に研究し其の真相をつかまふとしました、さういふ事は儒學のみに限らず一般學問上の偉觀であります。

第二に徳川時代に入り國家的觀念が勃興して來た事です、外國に對して自分の國我が國と云ふ觀念が強くなつたのです、それが徳川時代の學問に影響したのであります。吉野朝廷以來足利時代にかけて八幡船が支那近海に活動したそれが我が國民の上に國家的觀念を非常に強めたのです。前から朝鮮とは往來して居りましたけれども

公然とはしませんでした。足利時代の中頃戰國織田豐臣の頃には、西國の諸大名は支那朝鮮と交通しました、これが又一つ國家的觀念を強めました。南蠻人の渡來耶蘇教の傳來續いて、秀吉の朝鮮征伐皆我が國民に海外の知識を與へました。家康は又非常に海外交通を奨勵した、三代將軍家光の時より鎖國方針を採るやうになつたが、前に養はれた國家的觀念は尙つゞきいよく盛んになつた。

それから後蘭學が傳はりました、それから塙先生の時になり、露西亞が北邊を窺ふやうになつたのでそれより愈國家的觀念の勃興となりました以上第一第二は此時代學問勃興の内部的の原因であります。

これから表面に現はれた學問について云ひますが、徳川時代の學問の代表は漢學、國學の二つであります。最初に漢學を御話し致しませう、漢學で人材をとると云ふ事は昔から行はれた事でありますが、武家政治が始つて以來久しく廢されて居た。家康になりいち早くも天下がみだれると云ふのは人倫道德が亂れる爲めであり、天下の太平をはかるには人々をして人倫道德をわきまへしめねばならぬと云ふ事に氣がついたのです、其は徳川家康の最もえらい所で信玄でも謙信、信長、秀吉でも及ばぬ所でありました。ある人が云つた「足利の末世がみだれたのは當時人倫がみだれてゐた爲で當時其女を嫁するは婿を召寄せて是を殺さん爲め、其男子を養子にやるのは養父を殺して其の國を奪はん爲めであつた。明智光秀が母を人質にして其母が殺されたと云ふのは、信長を殺したのと同様であつてそれよりも尙重い罪である。光秀とても速に自殺すべきが當然なるに信長は學問に淺く人倫をわきまへず、却つて光秀の所爲をほめたそれが爲めに後世の人に笑はれるやうになつたが、家康は文教に意を用ひ學問を興して社會の秩序を保たうとした、早くも秀吉の朝鮮征伐にしたがひ肥前の名古屋に居た時、藤原惺窩を陣中に引見したと云ふ事があります。後に林羅山を登用して政治に與からしめた。

これが徳川時代の漢學勃興の基礎となつた、人々は家康が豐臣氏の天下をとるには陰險の手段を行つたと云ふて兎角の非難もあれど、政治家として又學問奨勵者としての功績より見ると少しも非難すべき點を見出すことは出來ぬ。藤原惺窩も林羅山も漢學者である。そして朱子學を研究された人であります。説く所身を修め家を齊へ國

を治め天下を平かにする云はゞ政治的倫理學で最、家康の要求にかなひまして深き信任を得ました。家康のさう云ふ態度が基礎となりて朱子學が盛んになつて來た。徳川二代三代四代は別に變つた事はないが、五代綱吉は有名な學問好きな方でありました。將軍の身を以て本を講ずるは骨も折れるだらう、病氣にでもなるといけなないと生母が憂ひて其れをとめたが、綱吉は學問の爲めに死ぬと云ふ事は自分の希望でありましたと云ふて講義を續けました。そして元祿時代の學問の盛んな有様を呈しました。それから六代になり七代となり、八代吉宗は中興の英主として有名な將軍でありましたが、其のやり方があまりに窮屈で法度も澤山出ました爲めに天下の法度、三日の法度と云ふ諺も出來た位人々は法度に對して尊敬を拂はないやうになつたしばしば儉約令も發布したので其の時の人はそれをもばかにして動物の儉約令に擬して狐と化けるにしても錦糸刺繍を着けて化けるな。尾長鳥は尾が長過ぎる、尾を短くせよ、黄金虫は名がよすぎる、眞鍮虫とせよ、とこんな馬鹿な事を云ふ人もありました。これが當時の人心の傾向を示したもので、人民が束縛を感じないそれが學問に好影響を與へ依然として進歩發達を續けたのです。

次に家重家治の世となると田沼父子が權を專にし、賄賂を貪り政治を亂した。が吉宗の時より民心に餘裕が出て學問の研究が一層盛になりました。

家齊將軍の御代朱子學ばかりでなく、陽明學あり、考古學あり古文辭學あり各々自派の説を主張して他の學派を排斥する、松平定信は心配して國民の思想の統一を破るからと云ふので、朱子學派以外のものは幕府の役人には使はないと云ひ出しました、これを寛政異學の禁と云ひます、定信の處置の是非は暫らく置いて、只吾々は當時斯程までに儒學が盛んであつたと云ふことを知ればよいのです。

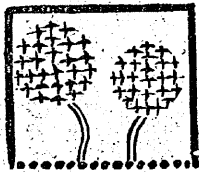
此の時代寛政二年が塙先生の四十五歳の時でありました。次に國學或和學に就いてますが、今まで申しました通り漢學が非常に盛になつたが漢學者の考へが支那に偏して居る、支那を中華と云ひ支那を聖人君子の國として非常に支那の學問におぼれた、傾向があります。

その結果卑屈にも自分の國をないがしろにし、自分を東夷と云ひ中には物徂徠紀平洲などと唐人めいた名を稱して喜んでる有様當時日本に居た儒者が品川に家を移しました、さうしたら中華の方へ一里近づいたと云つて喜んで云ひます、京都を洛邑と云ひ天皇を山城天皇と申し上げる様なわけこう云ふ事は國家的觀念の強い我が國民には、がまんが出来ません、その反動として爰に日本固有の人倫とか道德とかを研究して國粹を發揮しやうと云ふ人が、あらはれて來ました。

一體學問研究の風が盛んになると自ら比較研究も起るは當然で己に漢學が盛んであります、から、それに對して自ら國學も盛んになり出したのです、家康は漢學を獎勵しましたが學問の爲めに學問を獎勵したのではなく、目的は學問を政治に應用するにあるので即ち目的にそひさへすれば、いゝので漢學國學の何れを問はない、「我が國には我が國の道を以て治むる教も有らんか」とて其人を求めた事もあります以上三點を原因として國學の研究が始まりました、親藩である所の水戸家には大日本史の編纂があり、林羅山には神社を研究した書があります、出來た本は漢文であるが、精神は皆我が國の古い歴史をあさらかにすると云ふ、國學の目的と同じである。漢學者と云へども國學の思想が深かつた。

殊に此道を重んじたものは、特別の見識を備へ偉大な功績があります、山崎闇齋、水戸光圀後になつて頼山陽これ等は享保以降の國學の先鋒と云つてもよい、然しまだ専門家ではない、下河邊長流僧契冲はまだ固有の道德を明らかにする域には達しなかつたのです、純粹に固有の思想を發揮するに到つたのは、荷田春滿に始り加茂真淵、本居宣長、平田篤胤に傳り、遂に國學が大成されました、塙先生は眞淵を先生として半歳の間教へを受けられました、直淵の畢生の事業は萬葉集の解釋で目的は呂歌の解釋に止まらず、日本固有の思想を明かにされる點にあります「古歌によつて固有の思想を知らう」と申された通りであります、佛教漢學の爲めに痛く我が古道の眞卒剛健の風が損はれた事を憤慨し「凡儒は君を崇める様で、あまり尊きに過ぎしめ終には忝けなくも天皇を遠島へうつし奉ることになつた、これが漢學の惡影響」と慨歎されてゐるのであります、眞淵により國學の主張が明か

になりました、それをひきうけて、本居宣長平田篤胤が大成されたのであります。我が塙先生におかれてもこの國學の主張を納れてそして群書類從を編纂され國學の研究に便したのであると云ふ事は皆さんも早く氣附かれた事と思ひます。



思潮

ローマ字問題の理論と實際

霜田 靜志

雜誌部の方から私に何か書けとの事ですから、數年來の熱心なるローマ字黨の一人である私は、小表題の様な事を書かして戴かうと思ひます。尤も此の問題については、嘗て茶話會の席上でお話した事もあつて、自分の考の一端を發表したのでありますが、併し私の言葉が足らなかつた爲めに、多少の誤解をも伴ひはしなかつたかといふ懸念もありますので、(又一面には、卒業せられた方々にも、此の問題に注意して戴きたい考もあるので、)此處に再び筆探る次第で御座います。

私がローマ字問題を極力主張するのを聞いて、もう直ぐにも漢字や假名がいらなくなるかの如く思ひ、學校で

習はせられる漢字なども覚えなくても好いかの如く思ひ、間違へた字を平氣で書いて居る人があれば、それは本當に大馬鹿者である。又、私のローマ字論を聞いて、それが眞に日本語そのものの爲めである事を思はず、單に西洋の眞似をするものと早合點し、自分がローマ字文を綴るに當つても、その中に殊更に入れなくともよいのに英語を狭んで見たりして得意がつて居るものがあれば、是も又大馬鹿の骨頂と言はねばなりません。斯うした人々が萬が一にもある様では、甚だ困つた事になると思ふので、此處にローマ字問題の理論を實際に就いて十分に述べて置く事は、最も必要な事と思はれるのであります。

「ローマ字問題は、最早理論の時代ではない。今や實際の時代である。之を實際に如何に施したら好いか、といふのが目下の問題である。」とは、現今識者に唱へられて居る所でありませう。ローマ字を國字として採用する事が、國家の發展上最も必要な事は、今や識者の殆ど總てが之を承認して居ます。唯之を實際に行ふの困難に遭遇して、弱つて居るに過ぎないのであります。

併し世の中の事は、新しい一つの事を完成しやうとするには、それが假令どんな小さな事であつても、其處に必ずや多少の困難の伴ふものです。況してや、ローマ字問題の如く、數百年來行はれ來つた習慣を、一朝にして改めやうとする事は、却々容易な事ではありません。けれどもそれが國家の發展上是非共必要な重大な問題であれば、假令如何なる困難が其處にあらうとも、之を斷行せねばなりません。

それならローマ字問題は、國家の發展上果してどれだけ重要なものであるか。順序として先づ此の點から明かにして行きませう。

此の事に就いて、第一に言はるゝ事は、ローマ字は之を覺える上からも使用する上からも極めて便利で、且つ日本語を書き現すに、最も適當な文字である、といふ事である。漢字の不便は誰も知つて居る。歐米諸國の國民が、僅か二十何字かの文字を種々に組合して、それで總ての用を便じて居るに反し、何萬何千といふ程の漢字を覺えて行かねばならぬ日本や支那はどれ程不便をして居るのか知れない。日本ではそれでもまだ假名といふもの

がある爲めに、餘程漢字の不便を減ずる事が出来るのであるが、支那と來たら實際漢字の弊といふものが、豫想外にひどいものださうです。今日支那が非常に國が亂れて、いつも騒動が絶えなくて居りますが、之はつまり支那といふ國が教育が普及しなかつたからださうです。教育が普及しない原因は種々ありますが、その重なる原因は漢字の六ヶ敷い爲めださうです。

支那が漢字の爲めに文明が進まない事を今日の文明の利器である電信の事に就いて申しませう。日本には假名といふものがある爲めに、電報を打つにも便利であるが、支那ではさうは行かない。何萬といふ漢字を電信の符號に現す事は全く出来るものでない。それならどうして居るか。これには支那人も餘程困つたと見え、面白い工夫をこらして居る。それは斯うである。支那人は何萬とある漢字に對し、その一つ一つに、各々番號をつけて居る。そして其の番號によつて電報を打つのださうです。或る日本人が支那へ行つて居て、或る時電報を受け取つた。其所で急いで開いて見たが、唯數字計り並んで居て何の事だか解らない。止むを得ず、支那人の所へ行つて聞いて見ると、友人は大きな辭書を持ち出し、その番號に當る字を一つ一つ探し出して呉れました。そして凡そ小一時間位掛つて、漸くその電報の意味が分つたといふ事です。斯ういふ點から、支那では折角の文明の利器も、十分に之が效能を發揮させる事が出来ないで居ります。

これは一例に過ぎないのでありますが、とに角、漢字の爲めに文明の進歩を妨害されて居る事は如何ばかりであるか、知れませんか。日本と雖も矢張り同じ事です。假名を交へて使つて居る爲めに、多少支那よりは漢字の弊害を受ける事は少ないが、それは單に程度の差だけであつて、歐米諸國と比べてはいくら損をして居るか知れませんか。

田丸博士などの言はれる所によると、日本の小學校の一年から六年までの讀本の内容は、獨逸の小學校の一年間の讀本の内容に匹敵するさうです。あちらでは、文字は極めて易いものであるから、どしどし澤山の内容を教へて行く事が出来る。然るに我國では文字が六ヶ敷い爲めに、國語そのものの教育よりも、文字の讀み書きの

教育に殆ど大部分の勢力を奪はれてしまふので、肝心の内容の教育が十分に出来ないのである。

昔は學問といふと、もう字を覚える事であつた。文字を覚え、讀み書きするのが學問の大部分であつたのである。けれども今日の學問といふものはさういふものではない。文字によつて種々な事を知るのが學問である。楠木正成といふ人はどういふ人であつた、倫敦といふ町はどういふ所である、電氣ていふものは、どういふものである、といふ様な事を學ぶのが今日の學問である。文字によつて種々な學問をするのが目的であつて、文字そのものを覚えるのが目的ではない。勿論文字そのものを研究する學問もあるが、それは一部分の専門家であつて多くの人はさういふ爲めに文字を習ふのではない。さういふ上からは是非とも文字を出來るだけ簡單にしなければ、今日の如き世界的の實力競争に堪へて行く事が出來ないと思ひます。

其所で漢字の不便なる事は明な譯であるが、そんなら之を假名に改めたらよいではないか。日本には假名といふ便利なものがあるのに、それを捨ててしまつてローマ字に改める必要もあるまい——とさういふ風に説く人もあります。併し、之は次の二つの點から考へて、到底ローマ字に代る力はないと言はれて居ます。即ち、

一、漢字を廢して假名だけを用ゐるといふ事は、實際上非常に困難なること。

二、ローマ字ならば、日本語の世界的發展といふ事が得らるゝが、假名ではそれが出來ないこと。

今之に就いて簡單に説明して見ると、假名は如何にも便利の様であるが、元來が漢字の間に缺いて用ゐる様に發達して來たものであるから、假名丈けて言葉を表す事は中々困難である。早い話が假名では石屋と醫者の區別がつかず、又、公孫樹を「い」と書いたり十條を「じふ」と書くなどいふ面倒な使用ひ方までしなければならぬ。よし又、假名遣に改良を加へても、つと分りよく表す事が出來る様にするとしても、假名計りてするべつたりに書かれたら中々讀めるものではない。然るにローマ字の方は幾つかの文字を集めて一つの言葉を綴ると、それが一つの形になつて見え、語との間をはつきり切る事が出來るので讀み易い。若し假名で強いて此の様にしやうとすると、それは現在の假名とは全く違つたものを案出せねばならぬ事となる。さうなるともう假名を用ゐ

るといふ意味がなくなるのであるから、寧ろローマ字を使つた方がよい事になる。そして之によつて更に日本語が世界的に發展出來るを思へば尙更の事であります。

それならローマ字によつて日本語が世界的に發展する事が出來るといふのは、どういふ事であるかと言ひますと、日本語が歐米の文明國と同じ文字で書かれてあると、外國人で日本語を研究しやうといふ者が非常に多くなります。さうなつてくれば、日本の國柄が十分歐米諸國に理解せられ、従つて國と國との間の意志の疎通を缺くといふ事もなく疏る譯であります。その外、斯様に外國人で日本語を解するものが多くなると、我が國の利益は種々の點に生じて來る。それは一々擧げ立てるまでもなく、英語が世界各國に擴まつて居る爲めに、英國人がどれ程便利をして居るかと思へば、それで十分でありませう。

尤もこの事に就いては斯ういふ人もあります。それは假名でも同じでせう。日本語を學ばうといふ位な人なら、假名を覺える位少しも苦痛とは思はないであらう——と。併し、此の説が正しいとしても、ローマ字なら假名よりも更に多く外國人に理解せられる事は確であります。

斯ういふ風に述べて來ると、ローマ字問題は、外國人の爲めの事に計り心配して居る様にも思はれますが、決してさうではありません。矢張り最初に述べた如く、ローマ字は日本語自身の爲めに必要なものであります。

是は度々繰返される問題ですが、ローマ字を用ゐる事がよいとしても、今迄ある同音意義の言葉をどうするか。音文字であるローマ字では「公債」も「交際」も「街燈」も「外套」も一緒になつてしまふてはいないか。——といふ事を屢々曰はれます。これは併しローマ字が悪いのでなく矢張り漢字が悪いのです。一體言葉と文字といづれが先に出來たかと云へば、何れの國でも言葉が先であつて、文字は後である。して見れば「公債」と「交際」「街燈」と「外套」といふ様な言葉は、既に耳できいて解り悪い譯である。耳できいて解り悪い言葉は、言葉として正當な發達でないといふ事になる。即ち日本語では長らく漢字を用ゐて居た爲めに口で言うたのでは分らぬ様な言葉が澤山出來てしまつた。これは日本語そのものの爲めに宜しい事ではないのであります。

其處でローマ字を用ゐるとどうなるかといふに、ローマ字で日本語を書き表す様になれば、勢耳にきいて分り難い様な漢語はだん／＼廢される様になるから、それが爲めに日本語の正當な發達を計る事が出来るのであります。今の例で言へば「交際」を「つきあひに」「街燈」を「町の燈」にと云ふ風に分りよい言葉に改める様になるので、日本語の爲めに大變好ましい事になるのであります。

以上述べた所をまとめて見れば、ローマ字採用の理由は大凡次の諸點に歸するのであります。

一、ローマ字を採用する事によつて、漢字を學ぶ様な餘計な勞力を費さずにすむし、文字が簡單になる爲めに印刷出版が容易くなり、思想の傳達が速になるので、文明の進歩を促すに大に都合よくなること。

二、之によつて日本語の正當なる發達を促すことの出来ること。

三、日本語の世界的發展を促すことの出来ること。

現今のローマ字論者は、大體に於て以上の理由から主張せらるるのであります。所で、次に進んでローマ字の實行方法を述べて見ませう。私はローマ字問題の根據が以上の様な根強い地盤の上に立つて居る事を思ひ、又ローマ字運動の今までの經過から判斷しての將來ローマ字が一般に行はれる様になるのもさう遠い事ではあるまいと確く信じて居る一人であります。其所で、さうなるまでの間、吾々はどうして行つたらよいであらうか。之には、非常な大英斷を下す政治家でも出て來て、國字をローマ字に改革する様強制的にやる様なのが、最も効果ある様に考へられ、又現に多くの人は、政府がローマ字採用を法令かなんぞで國民に強ひるのてなければ駄目だなどいふのであるが、これは到底今の所では望まざるべくもない。政府は民間で騒ぎ出して、どうでもさうしなければ仕方がない、といふ時までは兎角從來のまゝにして置き勝ちである。であるからそれまでの間は、民間の人々の力によつてだん／＼ローマ字を弘めて行くより外仕方がないのであります。

所でローマ字になるまでの間どうするかといふに、其の間は矢張り今の漢字交り文も使ふし、又ローマ字も使ふといふ事になる。そして長い間の中に、便利なものが残つて不便なものはだん／＼廢れてしまふといふ事になる

であらうと思ひます。だから此の際の吾々の努めとしては、出來得る丈多くローマ字の読み書きをする仲間を多くする、そしてだん／＼にローマ字黨の勢力を大きくして、遂に輿論を動かし、吾々の理想を實現するのであります。これは實に國家的の大事業である。此の爲めに盡す人は、眞に國を憂ふるの志士の氣慨あるものでなければならぬのであります。

さういふ點から考へて、私は此の問題の爲めに一生を捧げ、或は自分の財産を傾け盡して之に力を盡して居るローマ字黨の人々に心から敬意を表し、此の運動の成功の一日も早からん事を祈つて居る次第であります。

終に、尙言ひ残した一二の問題について言つて見ませう。ローマ字問題は以上述べた様に、實に前途遼遠の問題であります。だから吾々が今ローマ字の読み書きを奨励したからとて、直に漢字を廢す譯には行かない。目下的方法としては、從來の漢字交り文をも十分に學び、その上にローマ字も習ふべきである。それが爲めに、漢字を學ぶ事をなまけてもよいといふことにはならないのであります。

それから更に將來に至つて、ローマ字文が一般に行はれる様になつても、從來の漢文や國文を學ぶ事は廢せられまいと思ふ。即ちそれ等のものは、趣味的に或は専門的に研究せらるゝ様にならうと思ふ。つまり、ローマ字文は一般に通用する便利な文として用ゐられ、從來の國漢文は、高尚な趣味的古典的教科として、中等學校あたり取扱ふものとなるであらうと思はれます。

更に今一つローマ字問題に就いて言ふべき事は、此の問題を熱心に主張する人が、國文學者に少くして、却つて理學者等に多いと言ふ事です。これはどういふ譯であるかといふに、國漢文を研究する學者は、漢字なり假名なりを長く用ゐ、その味ひとか趣とかいふ様なものを十分に知つて居るので、文字に對する愛着が非常に深い。そして、又その研究の範圍は主として日本語そのもの日本文そのものに就いて丈けて、外國のものと比較する事が極めて少いので、日本の文字の不便を左程痛切に感じてないのであります。然るに理學者などは、國際的な學者だけに、常に日本と外國とを比較する場合が多く、さういふ點から現在の日本の文字に不満を感じ、國家發展

の爲めに是非共それを改革すべき必要を感じる様になるのであります。實際外國を見て來た人でローマ字採用に反對する人は殆どありません。これはローマ字を用ゐて居る國が、如何に教育が樂に行くか、いかに社會の總てに便利であるかを實地に見て來て居るからであります。例へば外國では文字が易い爲めに僅な年限の中に非常に高い程度の教育をして居る。又、印刷術について行つても、歐米諸國の様なローマ字を用ふる國が、日本の様に何千何萬といふ種類の活字を用意せねばならぬのに比して、利益を得て居る事は如何ばかりであるか知れませんが、それ等を實地に見て來た人の目には、實際ローマ字採用はもう議論の餘地はない。今は唯實行の方法を講ずる丈けであると思ふのも、尤もな事でありませう。

以上秩序もなく長々と書き連ねてしまひましたが、これ等の議論は、決して私一箇の考てはない。從來ローマ字論者によつて幾度も研究討議せられた結果をたゞ私が自分自身の言葉によつて述べたに過ぎないのであります。さうして、是等の主張は、主として田九理學博士の説に従つて述べたものである事を斷つて置きます。

私は田九博士の「日本式ローマ字」に最も賛成するもので、自らも常に此の式のローマ字の讀み書きを實行して居る。世の中にはローマ字に賛成する人は多い。併し、これを實行する人は少い。しかも此の實行者が多くならなければ、眞に此の問題をものにする事は出來ないと私は思ふのであります。此の文をよんだ人が、一人でも二人でも餘計に實行者になつて呉れば、私はそれを此の上もなく嬉しく思ひます。

こどもの綴方帳から

零 餘 子

見ると直ぐ價值を附けたがる、それが大人の癖です。價值を附けたことが何れ丈其の人に利益が有りませう。

其の物の持つ價值はそれに取つての絶對の價值です。點數とか價值とかさういふ心を去つて、この綴り方を見て頂きたいのです。子供達が命として書いた其の文章を冷かに評價することは、手馴れた道具を見極めて居る破産者の前で、價を定める高利貸の所爲です。命で書き涙で書き喜で書いたこの綴り方、其の生活の心からの聲として讀んで頂きたいのです。學年は高二。

春の日(四月中旬)

顔を上げて本から障子の方へ目をうつした。春の日ざしは障子は閉つて居るが明るく流れ込んで居る。縁側にぼくしものをして居る母の影が大きくうつつて居る。鳥影がその間を突抜けるやうにして、ツツと二つ通つて消えた。鳥影は人の來る前兆。こんな事を考へて居る中に、ガラ／＼と格子が開いた。

後を振向くと、汗ばんだ赤い顔をした妹が、息をはづませて立て居た。

「母ちゃん」早速母を呼んだ。「なに」縁側で答へた母の影は動きもしない。妹はそれでも「お煎餅頂戴、お飯事するのだから。」母は「悪くないよ、先き持つて行つたばかりぢや無いか」と叱つた。妹は失望して立て居る。

けれども其處が母、影は直にスツと立つた。そして膝の絲屑でも拂つたのだらう、チラ／＼手が動いた。入つて來た母は二三枚妹に出してやつた。そして嬉しさうに出て行く妹を呼びとめて、袷衣に着替へさせた。妹はまたトットツと出てゆく。母は元の場所へ戻つて座る。私は再び讀書を始めた。

暫らく過つた。と何時の間に飯事を止したのだらう、節面白く妹達の春の歌がさこえる。雲雀は上がる天までも、櫻は散るよ春風に。その清い聲は春の暖い風に包まれるやうに朗かに響いて來る。自分は何時讀書を止めたかしら、うつとり其の聲をさいて居た。

店先の花(五月)

花屋の爺さんが眠つたやうな草花にザア／＼氣持よく冷めたい水を振りかけた。彼處からも此處からもコンコ

ン花共が頭を持上げた。香の高い白百合も、びらうどのやうなダリヤも。次第に頭は上つて、桶のぬるい水に挿された有る限りの草花が、生々として薄暗い店先を飾つた。

人通りの疎な表通に足音がした。

と思ふと三十位の奥さんが静かに店へ入つて來た。「少し下さい」。奥さんが言ふ。今度は内から婆さんが出て來て言つた。「ハイ今日は暑い暑さで」。奥さんは無言のまま草花を見廻した。「コレは」ダリヤを指先で動かす。

「ハイ一枝三錢です。」「ちや三本貰ひませう。」「お婆さんは」お爺さん、新聞紙を一枚。「しはがれ聲で言ふ。」「オー」奥に居た爺さんが紙を持て出て來る。婆さんは手早く草花を紙に包んだ。真紅のダリヤと絞りと黄色のとは窮屈な紙に包まれて、表通りを僅かの穴から眺めなければならぬ。

奥さんは店を出た。

故里(六月)

高い黒塀によりかゝつて子守をしながら何か考て居る其の瞳、故郷が戀しいのだ。「戀しや故里、懐かし父母」この考は子守に來て居る身には、殊に感ずる事であらう。時々太息を洩らしては脊中の子を氣遣つたり遠い空を眺めて涙に眼をうるませて居る。あゝ可愛さうに。あの子守の身の上を聞いて、幾分でも心配を遠けてやりたい。折柄響く汽笛に背の赤子は泣出した。この赤子も母が戀しいのだ。子守は悲しさに赤子の泣くのをだまして居る。此の赤子は幸である、泣けばだます人があるが、子守には味方になる人が無いのだ。同情して呉れる人が無いのだ。可愛相に。

暮の淋しさはひし／＼とせまる。しかし子守は矢張塀によりかゝつて、戀しい故里の様々の様子を思へ浮べて居るらしい。

初夏の原(六月中旬)

「オーイ秋山確り。」東に武徳殿の建物を控へ西は櫻や梅の若葉に包まれた草原で、小さい少年の群が十二三人野

球に餘念ない。

手の首を手拭で結だのも居れば、後鉢巻や白い夏帽のものあり、けれども何れも白の運動シャツ。猿股から出て居る小さい脛は、午後の日に當つて赤銅色に光つて見える。赤銅色と言つて少し大げさか知らないが。ピュツと空をかすつて飛んで來るボールを、細い腕にはめたミットでバツと受取る手練の早業、中々うまい。

「岡たけ君、もつと前へ出て。」「ホラ鈴木確かり。」などと建物の焼付くやうな土臺石に上つて、五六人が盛に應援して居る。ボールを見詰めて居る他の子は見返りもしない、大分面白さうだ。

「バラ／＼、バツトを放りだして駈けて行く後鉢巻の小さい子に躑まれた青草は、頭を下げてはコシ／＼上げてゆく。

「岡たけ君、もつと前へ出て。夏帽子を被つた一番なりの小さい子が黄色い聲で叫ぶ。

「ピヨイと何の氣も無く西の梅の木の下を見ると、エプロンを掛けて居る女の子が草を摘んで居る。特別茂つた草の中に其の子の姿が見え隠れする。そばには母衣をつけた姥車が一臺、ボツンと淋しく立て居る。からで。

思出したやうに其の子が立て「兄ちゃん萬歳。」手を上げた。兄ちゃんは何れだか知らぬが、活氣立た少年達の耳には聞えぬらしい。見向きもしない。女の子は又草を摘みはじめ。枯葉がその上を二つ三つ戯れて飛ぶ。少年等の群からはドツと聲が上つた。

しやぼん玉(十月中旬)

静に晴れた日の午後、仲好の千枝ちゃん利ちゃんとは石鹼玉を吹いて遊んで居た。

「ホラ、こんなに大きい」千枝ちゃん細い竹の管をくはえたまゝ利ちゃんを振返つてニコリした。そして遠い彼方を惜しさうに眺めて居る。

千枝ちゃん得意になつて幾度も幾度も吹續ける。その度に藍色の太空に、真丸く透通つた石鹼玉が幾も幾も浮いて行く。高く、低く、葉を避け、枝をくぐつて、廣い宙へ。張切つた透明の面に、緑がうつる、太空がうつ

る、土の色、白い雲が。刻々に色を變へてはて無く飛んでゆく。

「奇麗ね。」手をかざしてデツと見て居る利ちやんの腫が燃え立ちさうに。フワリ。フワリ。追ひすがり寄り添ふやうにさまよつて行く二つの玉が、瞬間ふと打つかつた。細かい霧がバツと散る。「アラ」二人は氣拔けのしたやうにボンヤリした面持で限りの無い大空を怨めし相に見た。

「今度私よ。」利ちやんは始めて氣が付て千枝ちやんから竹の管を受取つた。また丸い玉が細い管からバツと出る。「ホラ。」誇らしく利ちやんの呼ぶ聲がさこえて、間も無く二人は初めの喜びに歸つて、何時までも續けて居た。

銀杏の葉(十一月)

銀杏の葉が黄色く萎れて、夜目にホロリと散つた。自分は筆を置いて淡く霞んだ空を仰いだ。そして可愛い、星を見付けようとしたが、矢張私の胸のやうな淋しい雲の漲つた情無い空だつた。

自分は箱の中から見付出した遺身の眼鏡を持つたまゝ、微かに其の手の顫えるのを覺えた。掛けて見たけれど矢張曇つてあたりが見えなかつた。自分はその眼鏡を懷にして、兩手で確と胸に押付てうつむいた。銀杏の葉が淋しく散つた。

店の方で可笑相な母の笑聲がきこえた。

自分は始めて我に返つて面を上げた。そして筆をとつたが書く事も無く、再び胸は過し世の思を辿つて行くのみだつた。

蕨の町(一月下旬)

黒く色のあせた暖簾に湯屋といふ字を眼當てに、はてしなく歩いてゆく三人連の少女。こゝは淋しい蕨の町、傾いた日は今はトッブリ暮れて居る。見られないその町を、田舎のやうな氣分で眺めながら歩いて行くのだ。中の一人は自分である。

「來過ぎたかしら。」友の一人が心配相に後を振向くと、「嫌だ貴女は。」と後の一人が驚いて始めの友を睨む風をし

て見せる。「大丈夫」黙つて居た自分はチラと目についた暖簾を指さして先に進んだ。果してそれは豫想通りの「湯」と白く染出された此の蕨の町らしい湯屋であつた。「こゝよ、こゝよ。」と自分が呼ぶ。後から來た二人は始めて安心したらしく「あゝ此處だわ。」

三人は湯屋の暖簾をくぐつた。

「いらつしやい。」番臺に座つて居た女の人、薄暗い中に小説から眼を放して愛想よく呼ぶ。湯の中には一人の客も居なかつた。矢張田舎らしい。「何て暗いんだらう。」自分は第一に家の構造を見て嫌な感じがした。家は狭いをして薄暗い。其の上鏡なんか小さな古ぼけた、湯の故か曇つて錆びて居る所が嫌に目立つ。こんな鏡、浦和の湯屋なら美しく磨き立てられた大きな鏡が横にツツと並んで居るのに。千分の一にも萬分の一にも近附く所て無いのに驚かされた。二三人入つたら如何なるかと思ふやうな小さな湯槽の中で、ザラ／＼した底に薬臭い香がプ／＼して、白く濁つた湯の面には垢らしい物が浮いて居る。何だか／＼氣持悪くなつた。陸湯が温るい。いら／＼した氣持でる／＼に洗はず上つてしまつた。

自分は浦和の湯屋が蕨の人に見せたかつた。しかし私の行く湯屋は浦和一番だと言つて居る。造り直した今の美しさは都にも有るまい。矢張浦和の方が開けて居る。

浦和に歸つてから母に言ふと、平氣で「さうだらう」と笑つて居る。悪口も言はない。矢張生れ故郷に近いから。自分は今もその事を思出して、浦和の町が、住んで居る浦和の町が好いと思つた。

日曜日(二月中旬)

朝の掃除の役目が終つて間も無く店の時計が十時を報らせた。早くから日が上つて、今日は珍しく好い空模様である。春日和。さう思ふと遠足に行く様な氣がして急いで支度に取り掛つた。「田舎だから」と思つた木綿の着物と羽織とを纏つて、二人の友達に連れられながら細い道を辿り歩いた。

田舎らしい四方の景色が別世界の様に晴々しく、遠くに聳える緑の山が三國一の富士のやうに美しい。田舎の

人の遊ぶ日か道も豫想外に賑はしく、今日と着飾つた若い人達の姿が三つ四つと見受けられる。

三人の中の仲間はづれの私は却つて一人て歩ぐのが好きなので。二人同志の話を外にして清い小川の流を眺めながら来る人走る車を避けて居た。

もう全くの田舎だ。遊ぶ日らしい中にも頼かむりをした男の人が、てんごを肩にして畑に行く姿も眼に着く。口さがない田舎人の間をのがれ、此處は家も割合に並んだ所だと思ひながら見て行くと「此處よ」と友の聲が聴えて。一間位離れて後から来る友は私より年上でありながら重さうに足を動かして居る。

着いた年上の友の家は、庭一面に麥藁の敷かれた大きい百姓家だ。豚の叫びに驚いて異様の聲を立てたり釣瓶井戸を見て戦へたりする事も、もう私には今は何でも無い。百姓家に親類を持つ自分には田舎の生活も倦きて居る。豚を面白がつて虐めたり、釣瓶井戸にも幾度か経験がある。

それから観音様に遊んで、ヴァイオリンの道上の歌を聴いたり、五月蠅い人の中を抜けて、漸く静かに心の中が息する様な静かな處へ戻つて來た。こんな卑い所、嫌な事だと思つたが、作文の種にもと諦めて見て歩いた。重い草履の足を引ずりながら歩を運ぶ。

随分歩いたと思つたら、嬉しい事に遠く町の燈が見えた。其の瞬間、脚の疲れが消えたやうに、懐しい嬉しい感じが起らずには居られなかつた。薄暗い途上の淋しい中にも明るい町の家々を思ひやつて、急いで汽車道を通り越した。



文苑

春を迎へて

講 一石井しづ

ゴロン……。除夜の鐘は永く……。餘韻を引いて、暮の名残を傳へて居る様。

大正六年も平穩に目出度くすみ、かくして暮れて行くのかと思ふと、何となくうら淋しい。此の折セカンドを刻む音が静かな空氣に響いて一層悲しくなる。けれど新しい年を迎へるのかと思ふと、悲しみの裏にはいひしれぬ喜びが、ひそんで居る様に覺える。

明けて大正七年。初春の柔い光は自然の恵みをくまなく與へて居る。あゝ私は十七の春を迎へたのか？夢からさめた様にハットする。そして八ツ九ツ時代の事が、まじりと胸に浮ぶ。秋の日のとんぼつり、夏の夕の螢狩り、且つは木枯しに吹落された紅葉拾ひなど

過去を追憶するに一つとして懐かしくない物は無い。一度此等の思ひ出に耽る時は、其當時ののんびりした氣分になる。

最早十七となれば、慈愛深い父母の膝下に在る様な幼ない夢をいつ迄も……。味はつては居られない。教育者？ 今迄はよそ事の様聞いて居たが、早自分分は遠からぬ將來に於て、女教師となり、其中の一人とは、なるのである。

自己の本分に對しては、堅い決心を以て奮闘せねばならぬ。努力せねばならぬ。どんな荒波もあしきつて。

窓外の眺め

本 一辻村みどり

私は一號教室の窓に立つことが、入學の始から樂しみてあつた。

多くの人家の屋根は私の足の下よりも低く、廣い畠には麥が二三寸のびて、向の小高い丘や、見すかされた林から吹いて來る風に、眉の様な畦は幽かに動いて居た。

晴春には、霞の内より若々しい森が油繪より浮き出た様に、夏はこんもりと見るからに涼しげに心よく、其の森の中には、何か冷やかな幽邃な物でもひそんで居るかの様、秋風立ちて窓下の木犀の匂ひ出す頃はもう淡い樺色の姿の林となり、はては北風寒きに、死人の如く立ちて、また来る春をば待遠さうにして居る。文の窓四季ありありの景色かな

寒 稽 古

本 一 九 山 八 重 穂

仰ぎ見れば一點の雲もない大空には、月の光のみ。冷たく青白い光をなげてゐる。遠ざかるに従つて星数は次第に多く、あとなしく僅かに光を放つてゐるのが可愛らしい。身を切るやうな風は月の世界から吹き下すかと思はれるばかりしらず／＼の間に全身がすくむ。折からひびき渡る號令「集れ」の聲、思はずキリッとした。つと立ち上つた寮長さん「皆さん今朝は郊外運動を致しますから、下駄の人は足袋が靴にはきかへて

来て下さい。」

下駄ばきの人はかけだした「先頭進め」の號令に四年の人は駆け出した。今までひつそりとして人の囁きの外には、何物も聞えなかつた校庭には、最早大活動が始つた。ああ今はさかへに行つた人々は間に合ふてあらうか。人のことながら氣にかゝる。

夜の静寂は全く破られた。吹く風は愈々冷たい。

町家はまた多くは起きぬらしい。家より漏るゝ燈の光は此處彼處に點々としてゐるばかり、しかし流石は縣廳の所在地だ、すぐに故郷の電燈のないさびしさが思はれる。

一時／＼に移り行く美しい景色は恰も墨繪の様に、一際高く抜け出した森の上に月の光はなげられて、眞玉の様にピカ／＼と光る。

いつ見た時よりも優れて見える中にも、野中になて一本の枯木にかゝつた月は、心の中の中まで見すかされる様だ。讀本で習つた武藏野の景が、まさ／＼と念頭に浮ぶ。

目に映ずる所の萬物は悉く月に輝かれ、霜に蔽はれ一足毎にざく／＼と霜柱が崩れる。我等の影は風車

のやうに……あゝやはり武藏野でなくては、月でなくてはと、しみ／＼と感じた。

冷たかつた時は何時の間にか忘れて、その氣持のよさ、稽古して居るものでなくては分らない。

折しも通りかゝつた夜行列車、煙突よりはき出される黄紫色の濃煙は見る／＼横にはつて、汽車の屋根をのみ、一室毎に強光を放つてゐる電燈にてらされて、その偉觀その美觀、形容することも出来ない。

雞鳴曉を報ずるや、東空に活動を起した曉靄は世の暗黒を破つた。

愛らしい光を放つてゐた星も何時となく消えて、獨り大空に残された素月は、さびしさうに森の彼方に、沈まうとしてゐる。

あゝかゝる勇しい愉快な元氣に充ちた、しかも武藏野といふことを念頭に於て寒稽古をしたことが生れてこれまでにあつたであらうか、今は町の家も大抵は起きた。柏の木に戯れて居た雀は、人の足音の急なるに驚いてか一度にばつと飛び立つた。

寒稽古素月残れる武藏野を

たどる朝こそたのしかりけれ

冬の武藏野

本 一 鈴 木 錦 子

冬枯れに遠く續いた。武藏野に月は冷たい光をなげ、七つ八つの星が、キラ／＼と輝いて居る。身を切る様な朝風の吹き渡る中を私は東へ／＼とあてもなく歩ゆんだ。行きつまつた様な、常盤木のこんもりと繁つた中から、だら／＼とありに畑道の方へ出た。

向ふには枯林が奥まで見すかされ、寒月は凍つて梢にかゝつて居る。霜に掩はれた畔道は池の周圍に沿うてゐる。水はすつかり絶え處々に枯草が残つてゐるばかり、踏切りを越えたと間もなく、汽車は勢よく白い煙を後に行き過ぎた。霜枯の桑の葉は、時々思ひ出むたやうに、ガサリ／＼と……いかにも淋しく感じさせる。田と道の間を流れる小川は、厚い氷に閉されてゐる。

輝いて居た星は消えた。寒月も淡く……東の空は赤紫色に湛と染まつた。夜は西の空に流れて、曙の光は四邊に満ちて居る。道は農家の家先へ導いた。静な朝の空氣を破つて、眠むさうな人が、雨戸を繰つて居

る。向ふの道から鐵を肩にした人がふところ手をして寒そうに來た。裏の竹藪の方から勇ましい鶏の鳴く聲がしきりに聞える。道はなほ古びた稻荷様の鳥居の前へ導いた。枯れきつた芝生の中を行くと丘の様な處へ出た。低い四邊一面の曉景を見渡しながら、ありと雑木の枯林は右手に續いて、其の下は低い田となつて居る。中程にある古い墓地に四つ五つの墓が枯草にうづもれて居る。道はいつか往來へ續いた。

朝日は深紅の波を輝かせながら彼方の森を離れた。見る間に段々と空高く……武藏野は日に照らされた。全く夜は明け放れた、有明の月は西の空へと消え、弱い冬の日はまばゆいばかりに身を照した。

雪の朝

講 二 小島 由江

遠い——ところからかすかに鐘の音が聞えたかと思ふと、パツと明るくなつたやうに感じた。電氣を誰かがつけたのである。こうして暖い夢を破られてしまつた。今朝の寒稽古には、一番早く出やうと思つて、早速

起きた。理髪室に行かうと思つて渡り廊下の所にくと、水でぬれてゐたので、誰かバケツの水をこぼしたのであらうかと思ひながら行きかけると、目の前に白い物が飛んできた。ちやと思つて外を見ると一面の銀世界何んだが氣が勇みたつた。

昨夜あまり寒いと思つてをらなかつたのに、今朝のこの雪。何んとか意外だ。

集れの鐘がなつたので、屋内體操場に集つた。皆さんが雪のお話で大そうにぎやかである。今朝は駄足がでないの、元氣よく體操をやつて寒稽古はすんだ。お室にかへると、皆さんが「雪を見てから急に寒くなつたやうな氣がする」と話してをつた。雪は相變らず降つてゐる。

枯木は時ならぬ花に笑み、屋根も地面も一樣にこの美しい花の色にうづめられてをる。

冬ながら空より花のちりくるは

雲のあたりは春にやあるらん

といふ歌が今更思ひ出されて、なんとなくうれしい。

あゝこのうれしき静な雪の日に、炬燵をかこんで楽しい物語にふける人も、嬉々として雪つりをする子供

も、雪を愛で、詩趣をねる詩人もあらう。雪合戦をせんとて勇み立つてをる勇士もあらう。

雪はいつやむとも知れず、紛々として降つてゐる。階下の窓より雪景色を見てゐる友の顔が、いつもよりまばゆいほど白く見える。雪はどうしても美しいものである。

教育者の樂しみ

講 二 三 上 とし

天真爛漫で無邪氣で可憐なのは、小學兒童に若くものはありません。未だ世上の汚濁にも染まず、風波にも接せず、恰も白蓮の池上に開いたやうなものであります。

其の姿は清楚、其の香馥郁、これと談笑を交へ居れば、春のどかなる樂園の中にあるの思があります。「愛して之を導けば慕ふこと慈母に對するが如く、一度信すれば教師を見ること父母に超え、其の一言一行すべて之を善意に解し、憧憬の眼を以て之を見る」と先輩は言うて居ります。

某博士が尋常小學二年なる其の子に「お父さんと先生とどちらが偉いか」と問うたに「それはきまつてゐますよ」と言ふにぞ、博士は得意になつて「知つてゐる——利巧だネどちら？」と再び問ふ。

「きまつてゐますよ。先生の方が偉い。」博士果然としていふ所を知らなかつたとある雑誌の記事に見た事があります。

人を信頼すること斯の如く厚いものが他にありませんか。「人生意義に感ずる」とか。世の良教育者が兒童の信頼の厚さに感激して、これと別るゝに忍びず。身の僻村に老ゆるも顧みず、諄々として倦まないといふも、決して故なき事ではありません。

世の中の職業は數々あります。そしてそれ、皆樂しみがありません。歸死回生は醫師の快とする所。黄金の波漂ふ秋の田は農夫の樂しむ所であります。されど人の知能を啓發し、品性を陶冶して、國家有用の人物を養成するの快事は、教育の事業を除いて他にございませうか。

病者傷者を癒すも、唯健康の缺陷を補ふにすぎません。兒童の身體知能の發育は、稻麥の成長結實に比し

て、雲泥の差があるではありませんか。

己が教育せる兒童が他日社會に立つて有爲の人とならば、樂しみこれより大なるはありませんまい。

父母は子女を愛して、其の知能の進み品性の向上するを見ては、我が身其等にも超えて喜ぶのであります。されば子女の身長の日々に伸び、知識技能の日々に進むを見、禮儀作法の年と共に正しくなり善良となり行くを知らば、雷に己の誇とするばかりでなく、主として教師の賜なりと之を感謝し、益々信頼の念の厚くなるのが常であります。

殊に永年勤続して功勞あるものがあれば、或は祝賀の會を開き、或は金品を贈りなどして其の功勞を謝するてはありませんか。是教育者に信頼し、之を尊敬し感謝するの心の顯れてあります。

入つては無邪氣なる兒童の敬愛を受け、出ては誠意限りなき郷黨の尊信を受ける。教育者の生涯は誠に幸福といはねばなりません。兒童の敬愛と郷黨の尊信これ教育者の大なる樂しみであります。

過去二年

講 二 山口しげ

咲きはこる故郷の櫻を後に入舎してから已に一年有十ヶ月。ざつと二年だ。夢の様な新しい希望を抱いて入舎してから二年。ばかに早い様な、又遠い昔の様な氣がする。年取つた父に連れられて二人とも初めて見た寄宿舎。自分のお室をさがすのに一骨折したのが、未だ忘れられぬ。住みなれて見れば、「どうしてあんなにまごついたかしら」と考へる様だ。嗚呼あの當時は故郷の空のみなつかしくて、寮の窓に身をよせては考へ込んで居つた。新入時代の日誌を開いて見ると、中にこんな事が書きつけてある。

南に走するなつかしき 戀しき夢をもたらし
夜毎さくやくそよ風よ 哀れと思へ寮の子を
夜もすがら眠りもやらず 故郷の空なつかしく
思ひあかせる夜もあるを

あの頃は未だお室の前の夾竹桃の蕾もなかつたのが其の花も散つて、學生の最も恐ろしい最も楽しい試験も終つて、第一回の歸省をしたのは、朝顔の咲き初め

る頃だつた。四十日の夏休みも過ぎ、優しい自萩に送られて歸舎した二學期の終頃、十一月九日の事である。前の夜は、例によつて、室中して蒲團の中で色々のお話を聴き、それにも飽いてやすらかに眠つてゐる午前三時。朝に夕に我が心を去つた事のない故郷からの電報。「チキキトクコイ」此の時の私は驚く事も出来なかつた。只ボンヤリと先生の前につゝたつてゐた。此の朝は舎監の先生のお手厚いお世話を戴いて、午前四時といふに浦和を後にしたのである。毎日一期待してゐる歸省。果して此の時、私は嬉しがつたらうか。歸つて見れば父はもう此の世の人ではなかつた。残された三人の兄妹。皆相抱いて泣いた。しかしなげいたとてどうしたとてせんなき業。十六日といふに野邊の送を済ませ、私は又物淋しい一家を後に歸舎したのであつた。それから二學期の學期試験も終へて、再び歸省した。家の人達は何時もの通り暖かく私を迎へて呉れた。しかし「お、歸つたか」との父の一言が聞かれなかつたのは、どんなに淋しく感じたらう。佛壇には新しい位牌が一つ殖えた。こうして淋しい中にも楽しい正月は迎へられた。十七の一月七日、只三人の

姉と兄とを残して歸舎したのであつた。初春の寄宿舎はかなりに賑はしいものであつた。先學期の末から見ると急に活氣づいて見える。何時も楽しい笑聲がもれてゐる。こうして楽しい一氣分にとらはれて居る内に、いつか彼岸櫻も咲いて、姉様方は野邊の八千草と共に我が學び屋を咲き出でられた。さぞや望多い事でせう。一ケ年間共に學び共に遊んだ人達が此の寄宿舎を去られるのは、さすがに氣持よい事ではなかつた。そりやあ一方には嬉しいといふ感じもあるけれど……四月八日、三度目に歸舎した時は、もう前の講習一年ではなかつた。急に姉様になつた様な氣がしてならない。九十幾人の新入の方を迎へて、お室も變り、人も變つた時は急に改まつて、何とも云へぬ快感が心の何處かに潜んでゐた。

月日は遠慮もなく過ぎて、又夾竹桃の咲く頃となつた。夾竹桃花は好きぢやあないけれど、其の葉と其の名とが大好きだ。花は去年と同じやうに咲いてゐる。しかし之を眺める人の一部は已に變つてゐた。夏休みになつた「あれもして來やう」「これもして來やう」と大きな柳行季に一ぱい詰めこんで歸省した。所が歸つ

て二三日たつと、もう私は病床の人となつてしまつたのである。醫師の云ふ所によれば心臓とか。一寸三十日ばかり、何もせずにぶらぶらと日を送つて、八月の末日には大分よくなつたので、大急ぎに急いで宿題やら日誌の整理やら。九月一日又寄宿の人となつて規則正しい生活することとなつた。

入舎してから二度目の秋は見舞ふた。秋も過ぎて冬の初め、私達は毎朝霜柱を踏んで程遠からぬ附屬小學校へ教生として通ふ様になつた。生れて初めて先生と呼ばれあなた方と呼んだ時は、さすがに恥かしくて「人が居はしないか」とあたりを見まはしてホッとした。

黄金時代と聞いて居た教生の時代も過ぎて、十八の春を迎へべく歸省した。二週間は夢の間。最後の歸舎をした。

嗚呼最後の學期。我級の人達はもうすつかり卒業気分にとらはれて居るらしい。一寸よつても奉職地……地方の小學校……といふ様な言葉を耳にする様になつた。昨日まで赤子の様に騒いで居た人達が、何時の間にかこんなに大人げて來たのだらうと深く感ぜられる。無論私も其の内の一人である。大部分の人の肩揚げは

(三六)

取り去られた。袴も長くなつた。こうして私達は、一歩々々、大人になつて行くのでせう。

嗚呼中庭の白蓮がもう筆のほの様な芽を出してゐる私の大好きな夾竹桃よ。白蓮よ。もうお前達と別れなければならぬ。

どうぞ何時までも……此の庭に咲いて寄宿の人の友となつて呉れよ。さらば……

或る夕

本 二 小室 ゆき

終りの鈴と共に、多くの生徒は各教室からながれ出た。今日は久しぶりの風もない上天氣で、いつもより寒さも薄いほうだ。けれども時々吹いて來る夕方の風はいたゞしく感ぜられる。寄宿生は部屋へと急ぐ通學生は荷物をかへて、襟巻深く顔をうづめて、何か楽しさうに語らひ乍ら門を出ていつた。あゝあの人たちは、是から家に歸つて楽しい團樂のうちに夕飯をすまして、お母様お姉様と頭をならべて暖い夢を結ぶのであらうに……あゝ私も通學ならばと、又して

も故郷の空がなつかしくなつた。

こんな寒い時には、一日の學科の終るのを待つて我家に歸れば、母上は門のところ迄出むかへにこられて、「オ、寒いだらう」と赤く冷をきつた私の手を温かいお手握つて下された。そしてあつたかいおこたに這入り、母子相むかつて楽しい物語にふけり、又或る時は友達と喧嘩をして悲しくて、その母の暖い胸にすがり、胸のすく迄泣いた事もあつたが、今はそれもかなはぬ。雪がふる。朝夕の風は一日一日と身にしみて行く。かうした淋さを一人胸に包んで日を送つてゆく身には、何事も凡て故郷を偲ぶ種となるばかり、あゝ老いた母上には今頃何をなさつてゐてあらう。オ、いつの間にか夜のとりも下りた。監獄の汽笛が夕方の空に高くひびいてゐる。やがては御飯の鐘もなるであらう。どこからか「故郷の空」が静かに――流れて來る。

或る夜

本 二 大島 永子

會報第十二號……文 苑

上野の鐘の音寢覺めの窓にしぐまを破りて微かにひびく。そとにもびゆる月影寒し。遠く……誰かが唱つて居る。外には雪、静かな……時が今あたりを包んで居る。明るい燈火、無言の人、いつ迄かうした沈黙が續くのであらう。俯いて書物に目を注ぐ人は何を居つて思ふのであらう。何かを言つて見たい様な氣持もするが、此の寂寞を破るのも物憂い。自分の頭には色々なことが走馬燈の様に過ぎて行くふとベンを取上げて思ひのまゝを紙に染めて見た。餘りの物なつかしさ、佗びしさ、堪へかねて一人海へ出た。昨日に變らず洋々たる青海原には、白帆の蔭が四つ五つ。あたりに散らばつて居る磯石の中から、綺麗なものばかりをよつて、掌の上にのせて見た。あゝ真白い可愛い石。かうして拾つて居る間だけは拾ふ人の心も此の様に清いのだ。そんなことを思ひながら、その七つを數へた時、自分の行爲の餘りに幼稚なのに氣付いて、

(三七)

石を捨て、渚を去つた。

大きな鳥居、石疊の傍、手洗石の蔭に二人の女乞食が居た。坐つた膝の上に兩手の指を組んで、神詣でする人の足音を聞きもらずまいと、じつと俯いて居る一人は盲であつた。

「ヤ、い、そらこつちだ。」突然子供が突貫して來て拜殿の後へと駆けぬける。先から額づいて居た美しい人がやつと立上つた。足音をぬすむ様に、石疊をよけて俯き勝ちに去つて行く。

哀れな女は未だ寒さにふるへて居た。

「それじゃどんなにか御淋しいでせうねえ。」

「はい、それは。」云ひかけて眼を伏せてしまつた。艶やかな桃割れ、赤い帯、おとなしやかに、しめくと語つたなつかしい人。

「秋になりました、見物の御方が澤山見えますと、御父さんに連れられた御子達を羨しくも思ひましたが、なれてしまつては唯忙しさに追はれて、此頃は圓かな夢を結ぶ」と云つた。若草山の麓の茶店で知合になつた彼女。今年もあの優しいものとして、雅びた帳場格子の蔭に坐つて居るであらうか。

雪に埋れる東北の或る港が、彼女を育てた土地であると語つた彼女。こんな夜、さぞや古里戀しの情にかられて居もしやう。

知らぬ間にこんなことを考へて居る。白い紙の上に鮮に表れ出たブドウブドウの跡にはこんなことが辿られた。

雪は止んだらしい。あゝ静かだ。雪明り吉良の邸へ討入りした義士の肩に散りかゝつた雪も同じものであつたらうに。あゝまた何かを考へ様として居る。早く誰か此の淋びしさを破つてくれればよい。

俯いて居る人の髪が一條々々に光つて見える。手は冷い。熱した血は頭の中を駆け廻つて居る。手が冷い。あゝまた。

上野の鐘の音寢覺めの窓に
しつとを破りてかすかに響く。

黄昏の海

本 三 杉 山 和 香

美しい夕映が消えて、日は全く西に沈んでしまつた。

新 島 守

本 三 山 口 智 恵

孤島の上、一痕の残月ほのめきて、海鳥しきりに鳴き、欸乃の響かすかななり。二千里外の故人の心思ひ續けらるゝ折しも朝けの風に波たちさわぐ。

我こそは新島守よあきの海の

あらき波風こゝろして吹け

同じ世にまたすみの江の月や見む

けふこそよそにあきのしま守

海面が明るくなつた、月が出るのだ、あれ〜といふ間もなく海面を離れてしまつた。水は皎々として銀色の鱗の様に輝き、沖を通ふ白帆が繪の様に目前に描き出された。優しい守歌が聞えて、草履を引摺つてせなの泣く子をゆすり乍ら、小さい女の子が現はれた。顔見合はせた利那、莞爾として早足にスタ〜と行き過ぎる。影法師が少女の後を追つて行く。私は微笑まらずには居られなかつた。美しい聲はまだ残つて居る。裾に袂に潮風をはらんで心地よい。月は益々さえて冷やかな空氣に覺えず袂をかき合せた。

寄宿舎の娛樂室

本 三 山 口 キ ヨ

思召し給ひしに、北條義時幼主を擁して、朝命を奉ぜざりしかば、御憤りを發し給ひ、承久の亂となり、遂に隱岐の島守とならせ給ふ。融々たる彌生の春、朶雲天に漲るの候は櫻狩に日を暮らせ給ひ、仲秋月明らかなる夕べには觀月の宴を催し給ひし榮華は、昨日の夢と過ぎぬ。悲しき哉。昔日の管絃の調べは松訪ふ風と變り、氷無瀬殿の妙なりし御住居は柴ひき結ぶ苦屋となりぬ。北面と西面とは武士共を運ねて、御親ら鍛へさせられし刀劍を下賜せられ武事を講習せさせ給ひて、ひそかに朝權の回復を計り給ひしも、寄せては碎くる荒磯の白波と消えけるこそ、いたましの極みなれ。況して九重の奥深く渡らせ給ひし御身を新島守と咏じ給ひしに至りては、悲哀の情、胸にせまり、熱き涙の頬を下るを覺えず。思へば、後鳥羽院の謫居の御身とならせ給ひしも、これ皆民を愛て慈しみ給ふ御心より出でしにはあらずや。ましてや謫居の御身とならせ給ふことなど御夢にだに思召されざりしならん。嗚呼果もなく限りもなき日本海の水は涸るゝ時ありとも、院の大御心は永久に大和島根の榮えを護らせ給ふなるべし。

我寄宿舎の中で最も詩趣に富んでゐる所を問へば、蓋し、誰しも娛樂室を指示するてありませう。娛樂室は寄宿舎に附屬して居るものであつて、實に精神上には心を、身體上には體を慰むるのに最も適切な所でありませう。娛樂室としては設備完全で、いさゝかの遺憾を感ずることはありません。娛樂室として此の如く完全なものには他には少くありませう。私はここに設備について一寸簡單に説きませう。

さて其娛樂室といふのは西洋式の娛樂室と、日本式の娛樂室と二つございます。何れも北寮の二階にございます。日本式の娛樂室は西端に、西洋式の娛樂室は東端に位して居ります。先づ日本式の娛樂室から説明致します。

此の室は前にものべた通り、二階の西端でございますから、何のさへざるものはなく見はらしの良い場所でございます。下を見ますと二面の田です。秋も末の方となりまうと、田一面黄金のむしりを取いた様にみえます。

り分つて居ります。本棚の下には色々雑誌の入つて居る戸棚がございます。中々見るべき雑誌もございます。西洋式の娛樂室は北寮の東端に位して居りますから食堂の爲にさへぎられて、見ゆるものは唯薨の波ばかりでございます。其の間から僅かばかり朱塗りの玉藏院の屋根が見えます。室の中は真中にテーブルが一つ椅子が四つ置いてあります。片隅には三角棚がありまして色々の本がのせてあります。安樂椅子もあります。又ピンポン臺も一つ備へてあります。

大體こんなものでございます。多くの人の好むのは日本式の娛樂室でございます。日曜の日にはずるぶん多くの人が集まつて、色々な遊びをしたり、本を讀んだりして、精神上身體上の慰安を計つて居ります。

娛樂室は實に寄宿舎の樂園で有ります。此設備のあるのは私等にとつては何よりの幸福だらうと思ひます。

圖書室

本 三 林 た け

我校の圖書室は南向なる本校の階下にありて、西の

僅か二十疊の室ではありますが色々な物が置かれてございます。鏡は二つも備へてあります。一つは柱に一つは座敷の片隅にちやんと立かけてあります。丸い低い机が室の真中を占めて居ります。片隅には本の入つて居る戸棚があります。種々な本がございます。教育上の事の書いてある本や、歴史上の事の記してある本や、家庭小説その外多くの叢書等が氣持よい程順序よく並んであります。其の中にも明治功臣録とか、ソクラテースとか、フアウストとかベニスの商人等の本は目立つて太い文字で書いてあります。一番よく人に讀まれると思ふ本は、頁をくぐつたりした跡がはつき

端より第二の室なり。南に窓ありて、運動場を控へ、梧桐、紅梅等の立樹あり。春の花、夏の緑、冬の雪四季折々の目を樂ませつゝ、讀書するに十分なり。室内常に整頓せられ、二部に分る。右なる室に入り、仰けば即ち前校長大久保介壽先生の揮毫になれる。「讀書志彌高」の大なる額を掲げ右方の壁には代々の校長の肖像を掲ぐ。中央には机二脚、長椅子四五脚、南の窓際には机二脚、小椅子二三脚を備ふ。書棚には百科辭典を始めあらゆる辭典を並べ隨時閱覽するを許さる。

圖書室規程及圖書室當番規程詳細に掲示せられあり之に次て生徒本籍及卒業生配布地圖を掛けられ、一見卒業生の頒布を明瞭せらる。一箇の小黑板ありて、これには當番の姓名又は室に關する注意の時々揭示せらるなり。

左なる室に入れば、南の一方を除く外書棚を以て圍まれ、中央に三個の卓と三脚の小椅子とあり、是本四、二部本三の圖書室當番の定座なり。當番常に此にありて閱覽者の便宜をはかり且圖書を整頓す。窓に沿ふて圖書係先生の常に居らるゝ所ありて、机、棚、椅子を備ふ。

書棚を左より一巡して見るに第一に理科の部にて、

博物物理化學等の諸參考書あり、次に歴史地理の部、日本史、東洋史、西洋史及内外地理歴史に關する書其數を知らず、漢文國語に至りては、我等已に耳に觸れたるものも少からず、小學時代より聞ける、平家物語、源平盛衰記、枕の草紙より古今和歌集等數ふるに違なきなり、次は修身教育の重要書類、習字、圖畫、體操、數學より、家事音楽に至る迄科毎々に順序よく常に一定せられ各書には何れも號數を記されあるなり。

是等多くの重要な書、如何なる書と雖も我等の要求に應じ、當番の手を経て借り得る便を與へらる。

閱覽者用圖書目錄及び生徒圖書閱覽あり。圖書目錄を通見せば、室内のあらゆる書を知悉することを得るなり。かゝる豊富なる内容と閱覽に不自由なき圖書室を持てる我等は「いとまなし」とて文よまぬ哉」てすむべきや。

公開せられたる主義に對しても、いかてか圖書室と疎遠になりて宜しかるべきか。否、奮つて足繁く圖書室に出入し一冊も多く讀書せんことを力むべきなり。

戦争第五年の春を迎へて

本 三 井 上 茂 能

霜枯の冬に暮はしき春。奔命に疲れたるもの、憧憬する長閑な春。今や人生多事にして安立の地を得難き此の現代に於て、營々として日夜生存場裡の巷に、たたかひし一年を除夜の鐘と共に送り、續きて來れる喜悅の光り平和の輝き満ちたる數日のち正月は個人生存上に將た社會上實に貴き時なり。

盡日尋ねて得られざる春は先づ軒頭の松に庭前の梅に屠蘇の祝ひに來る。松は常磐の色深く、節操いと高き呉竹の又高士になぞらへらるゝ梅の香の初日の光りに響れる、門松の古へ偲はるゝ様したる實に初春のみの風情なり。

平素の疎遠を謝して賀禮の往復、又新春の會合など春の悦深く、又「昨夜の鬼の禮に來る」など異様に物あらたまりるもめでたし。幼童少女の新らしき衣着て、紙鳶に羽子に遊ぶも嬉し。門松を縫ふ萬歳の鼓の音に春の壽き祝ふもめでたき極なり。

希望に満てる大正七年を迎へて只々萬歳の鼓に春の

晴着に喜びて、年賀を捧ぐるは如何。是に於て眞に一新すべきは人の心なり。人の活動なり、かゝる上に眞實の春の悦びあり、人々洋々たる春の光り流れ充實せる春の喜びを得るなり。

現に世界は莫々たる戰雲に閉され、兵馬倥傯の間にあり。そのうちに舊年を送りて新年を迎へたるなり。而して我が國のみかゝる平和のち正月を過すことを得たるは何故か。これ皆 天皇陛下の御稜威のいたす所なり。これを思ひて誰か忠君愛國の至情燃えざる者あらん。日本臣民たるものは宜しく時局の大勢を三思すべし。海山萬里、歐洲の地には戰死傷病の慘衣食缺乏の歎に苦む者數を知らず、我が國といへども又聯合國の一なり。戦争の間に、獨り熙々として皮相の快樂に安ずべきにあらず。シベリヤの寒き配所にわびしく住み給ふ、前露帝を思ひ偲ぶも、又兎獨の壓虐に苦しむ白耳義を思ひ遣るも皆涙なきはなし。

幸にして一時講和休戰の成立を見るに至るも、これ必らず永久の平和にあらざるべし。この戰亂の播きし種には、何時の日か更に大なる爭因となるべき事は、早晚免るべからざるを覺悟せざるべからず。はたして

その機至らんか、近き將來に於ける我が日本たるや實に多事たるべし。

是に於てか日本國民たる者、宜しく振起して此の機に當るべき大なる覺悟を有せざるべからず。國民共力して工業に商業にあらゆる方面に大活動をなして、國力の充實に勉めざるべからず。これ戦争第五年の春を迎へし國民の大に覺悟すべき所なるべし。

あ る 頃

本 四 島 田 菊 野

繪も描けないだらうし、歌も詠めないだらうが、とにかく寫生帳を抱へて彼れは暗つたい寄宿を出た。多分寫生の側へ歌でも入れる氣だつたのだらう。その淋しい顔を見たりしても、才もない、想もないと嘆いてゐる彼女の心を知るには充分だつた。

それは一月の半。武蔵し野には風が吹いて、大方の日は煙の様な塵がまひ上つて、丁度狂人の様な姿をしてゐる。それでも時たま芥が地にをさまつて、日が照つて春の様な静かな日が来る。彼の女が出かけたのは、

さうした静かな日の午後だつた。

さける様に街をぬけて、平な野道に出ても、うつむき勝ちに静かな足取りを續けて、時折空を仰いては深い吐息をついてゐる。

野を包んだ青い重い様なその空と地面の堺は冬ながらに穩やかな秩父の嶺續きと、疎らにある村の爲に廣からぬ地に限られてゐる。その村を越えたらば、またさうした區域が展開するのだらう。林の方から小雀の群が飛んで來た。

彼の女はその様子をジツト見つめてゐたが、急に歩みを早めて芥にうづもれて枯れかゝつた麥畑の小徑を通つて、雜木林の側に出た。其の時彼れの目には涙が一ぱい浮んでゐた。

檜の葉がコソコソと散つた。小鳥のけたたましい鳴聲がすると、そのあとは寂然たる野。人の足音によつてこの平和を破るのは淋しい様にも思はれた。

道はその雜木林を眞直に下り坂。その左右には乾いた畑の土が一面につゞいてゐて、前の空地には枯すゝきが立つてゐる。

彼女が寫生帳をひろげたのはそのかやの中の日だま

りだつた。

二三本たつた松の間に藍色の山がすつきりあらはれてうす黒く光る雲がその背後に引いてゐる姿。遠い林、前の堤、森、世の中のあらゆる美醜をあげて畫題にしたいと願ふ彼女の爲には、なぜか今日の自然には深い意味がある様に考へられた。手は幾分を経ても動かない。彼女には自分自らの心が理解出來なくなつて、體までも捨てゝ了ひたい様な氣になつた。別にまゝとまつた考へにふけるのでもなく、だと云つて悲しむてのもなく。

こうしてジレッタイ様な氣分に襲はれて、其日くの學科にまで不忠實にしてゐた事が彼れにとつては非常に不快に思はれた。なぜか。その理由は彼女自身にすらわからないと、たまたまなく現在がいやになる。

人一倍にまけじ魂のあるくせに、進んで物をしやうの學友と競争しやうのといふ心は寸分もない。只心のまゝにならば不相應な勉強もして見たい。人にぬき出た名譽もほしい。じみな生活をして、かすかな生涯を過ぎうとする心の半面には、美しい人にもなつて見たい。あんな楽しみもして見たいといふ様な考へもある。

平生はあらはれもすまい、知られもせまいと思ひながら、時に限らない名譽と快樂をといふ衝動の爲に強烈な惱みをする事もある。彼の女には自分の心が解らなかつた。

平穩にと願ひながら、刺戟を求めてゐるらしい自分の心がわからなかつた。彼の女の友が普通の人間ならば、彼の女自身は心に於ける一種の畸形兒だつたのだらう。物堅い家に生れながら、違ふ兄弟を持つたといふ一つの苦しみに幼い心を亂された彼女は楽しく生くるといふ事を知らなかつた。そればかりか彼女は物事を暗く解する鋭い情を持つてゐた。十六の春こゝへ來てからといふもの、その情がひどく發達して樂しかるべき日は彼にとつて最も苦痛だつた。比較的單純な級友に圍まれて、さうなりゆくかと思ひの外、今までと違つた事を聞くにつけ、知るにつけまた日數を経る程、人といふ事が強く頭にひびいて、神經は益々過敏に人から見るといふやゝ畸形、彼女は人に解されなかつた。愛されなかつた。

世の中といふ意味も解せぬうちにさうした心を持つ様になつた不幸の彼女はどんなに苦しんだらう。

花が咲いても泣いた、雨がふれば猶更の事。風にも雲の行き来にも泣いた。己が生活の楽しさを得る事の出来ぬ間に、それ等を入れられぬ程、彼女の小さな心は淋しいものに變つて了つた。

それから四年……彼女の心の爲には随分波瀾の多い月日だつた。少ないながら世の味も知る事が出来たし人の情もわかつた。それだけに彼女の心と境遇の間にははげしい衝突が出来て、變つた苦しみを、しなければならぬ。其の上彼れには彼自身が感じてゐる様に自らを慰め得られる方はなかつた。

すべて矛盾と衝突から出来上つた心、物事に斷念の出来ない人一倍に欲ある心をもつた身にはどうしても現在の生活に満足してゆく事が出来ず。人と離れない様な氣持で、今日とても、こうして獨りて出かけたのだつた。

彼女は人並に生きて行かうとするには、あまりに神經がするどすぎた。理智の女としては涙がもろ過ぎた。あゝして彼女の自分といふ謎が判然せぬうちに、不徹底と矛盾とに終る生命を持つたのではなからうか。かやの中の體はまだ動きもしない。

日が西に傾きかけて林の木が明るくなつた。遠くまで見る事を望まじ、たゞ行手の一步を示し給はう足りなん。

彼は急に此の言葉を心に浮べて空を見上げた。木も草も山も林も雜然と展開されてゐる彼女の周圍は明るく楽しいものに見えた。

生きねばならない。過さねばならない世の中と云ふものを大前提に置きながら、なにかにと悶えるのは愚の極だ。凡ての人は馴染んだ所をあとにして、未知の世界へ足をふみ入れやうとする場合、一種の不安や頼りなさを感じるものであると誰か教へた。

まよつてゐたらうと今までの生活がさ程に無意味とは、まして悪いなどは思ひもせぬ變つた生き方をし、てゆくとならば悲しくもあらう、けれど「木を割りて見よわれそこにあるべし」といふ神の言葉がある。よしやそこに神がなくとも、強い清い自信は神あるのと一致する。

彼女は口ばしつた。

あゝ自分もある頃といふ形式にとらはれてゐたのだつたか。或るところまでは人とも妥協してゆかう。開いても悔いがない生の頁を加へてゆかう。

彼女は立ち上つた、一つの繪一つの歌も出来なかつたが、彼れの胸には永遠の悦びが刻まれてゐた。夕の光が野一面に差て静かな空を鳥が飛び去つた。

ほぎまつらな

會副長 川口 葬雄



詞 藻

高等師範學校卒業滿二十五年

記念會の折によめる

會長 直江 俊三

國民の教への道につくしつゝ、

はたちいつゝの年は往にけり、

來し方をかへりみかへり行く末の

業はげまなんけふのかたみに

平田義雄氏の結婚を壽ぎてよめる

同

幸多きけふのよろこびいつまでも

君なわすれそいつの世までも

~~~~~

巖きかも 富士の神山 清きかも 琵琶の湖 その山のたかきさは心 その湖の 清きは姿 皇國に 仕へまつれや。

我皇國は 遠き神代の 御依のまにま 萬代に 榮えゆく 皇國ぞ あなたふとしや。

我が君の 御惠の露は 葦原や 民の草葉に あまねくかゝれり。

いざ諸人ともに ほぎまつらな 我が國を 我が皇國を。

秋 興 同 同

千草はささ 蟲はなきて 風もにほふ ゆかしの野邊や ぞちの松蔭 こちの芝生 心あへる友の ひつれ遊ぶ。

つとには何せむ 萩女郎花。

「秋の香たかさきのをへて。

しぐれの雨 間なくふりて よものこずる 錦かけぬいざ見にゆかむ山の紅葉おはれしれる友よ うちつど

ひて。

たをりてかざさな やしほの色、  
夜の間のあらしに 散らぬさきに。

和歌四首 同

大正七年一月二十一日校命により學事視察の爲め兒  
玉郡に出張す本庄町のあたりより眺めし淺間山の景  
色いと雄々し。

東の國のむら山座に敷き

天そり立つ淺間雄々しも

同じき二十三日金屋村小學校を參觀す。この日雪降  
る。夕べ歸る。同學校よりの歸り路に  
沫雪の晴れゆく野路を夕ぐれに

たどりゆく我おぞのみやびを

同じき二十五日、丹莊村小學校參觀の折、故本科三  
年川野よく子の奥津城に詣づ。時に夜ぐらし。

今宵我が御弊の前に額づくを

苔の下にもあはれと思ふ

陣見山のあたり炭竈の煙たちのぼる

影うすき夕日になびく炭がまの

煙の末や明日のゆき雲

母まつごとく

本 三 太田かをる

冬がれのさびしき家路とめくれば

母待つごとく思はるゝかな

幾千度家かへるとも笑顔して

迎へしはゝはゝまざりけり

母のなき弟と思へばいにし日の

争ひ事もせずなりにけり

安らけく夢路たどれる弟の

淋しき寝顔見れば悲しき

たそがれ

本 三 山口智恵

ほのかなる雲の夕映え

刻々にうつろひゆきて

家々の窓にあかるき

燈火はまたいさ初めぬ

暮れて行く村の静けさ

うす青き煙の匂ひ

奥深く胸にぞ沁みぬ

寂しくも又なつかしく

風 同

なればしも何をか學ぶ

雷のくだくる音か

あほかみのうそぶく聲か

矢さけびの名残のひびき

歌うたふ神代のしらべ

野山越えはた里越えて

蒼空に山彦かへす

風はたがため

### 海邊松

本二部 飯田さよ

あら波の岩に碎けて玉と飛ぶ

會報第十二號……詞

澤

海邊の松の影黒くして

同 濱野松枝

潮なか／＼砂いや白うあけてゆく

あしたのながめ松うつくしき

沖邊こゝ船よりみれば浪の色も

一つなりけり磯のまつ原

同 萩原孝子

あら波のよせてはかへす磯の邊に

げだかくたてりまつ一本

同 加藤さん

浪青く眞砂は白き鎌倉の

濱松が枝に鳥のむれかふ

同 立野たけ

君が代を千代に八千代に祈るらし

みどり色をふしら濱の松

同 高柳ちよ

かりこもの亂るゝ國の音信を

いかに聞さつや海の邊の松

同 田中よし

榮えゆく御代の恵みを身にうけて

同 海邊の松もみどりこそませ

同 田中小千代

濱まつ千代萬代もかはりなき

同 同 高き操を習ひてしかな

同 溜貝ゆき

西の海浪たちさわぐこの頃も

同 同 ゆたかにたてり濱の老松

同 田島梅子

鵜戸濱の岸うちよする浪の音に

同 同 神代の松もわかへるらむ

同 塚本みや

白濱の沖より出づる朝日子に

同 同 かげやく松のうつくしきかな

同 梅澤より

浪風の吹きすさぶとも永久に

同 同 色はかはらじ濱の老松

同 野口つや

たえ／＼に千鳥はなきて風寒み

同 同 海の濱松月ぞこぼれる

同 風吹けど波はさわげどとしへに

同 同 みどりいろこき海の邊の松

同 山田とも代

世の中はうつりゆけども神代より

同 同 色もかはらぬ海の邊の松

同 松原ふく

潮風にみどりの色のいやまして

同 同 心もたけき海の邊の松

同 松尾曾能

濱千鳥むれとぶ磯の松風の

同 同 しらへはゆかし君が代の曲

同 小沼愛子

一つ二つ漁火の影さえゆきて

同 同 波間にしらむ三保の松原

同 江森すみ

年ごとに高き操ぞいちじるさ

同 同 みどりいやます濱の老松

同 阿部 榮

君が代は千代に八千代に榮ゆれと

みどり色そふ海の邊の松

同 同 赤羽とき

千年ふる海邊の松や年の波に

同 同 みどりの色のいやまするらむ

同 新井たぬ

曙やみし世の夢の跡あはく

同 同 波間にうかぶ三保の松原

同 齋藤八重

まねかねど日本島根の松風の

同 同 音をばしたひ來四方の國々

同 水谷たか

美しき濱の真砂に色はえて

同 同 氣高くあるか海の邊の松

同 島山より

さしのぼる初日に緑いやまして

同 同 よはひかさぬる海の邊の松

同 諸人不知

緑色の磯の松山しら波の

同 同 よするけしきの面白きかも

### 夏の山路

本二部 溜貝ゆき

深き緑の山路をば

馬の嘶いさましく

傍へ流るゝ真清水の

岩に碎けて玉と散り

朝日に輝く白金の

三伏の夏もいづくへか。

思へば遠く來つる哉

長き山路に勞れ果て

我は木蔭に下り立ちて

暫し憩ひてくむ清水

老鶯の聲もなつかしく

岸邊に近く白百合の

水に姿をうつすなり

勞は何時か真清水と

流れていにし山路をば

口笛かろく馬子のゆく

都離れて山里の

浮世の塵をよそにして  
自然の愛のふところに  
とこしなへに抱かるゝ  
賤かをの子の身の上を  
羨やましくも思ひつゝ  
せめてしばしの旅ながら  
惠の露にうるほひて  
自然と心一つにと  
再び馬に鞭うちて  
涼しき山路たどりゆく。



紀行

富士登山

齋藤 文

大正六年七月休暇の前、有志と糾合して富士登山を試みんと議が起り、全校及卒業生中にこれを募る。幸に二十六人の有志を得て、二十一日早朝出發と定められた。

第一學期の試験も終へ暑中休暇となつての第一日を登山隊は附添職員を合せて一行二十九名早朝旅装を整ひ校庭に集合し、意氣衝天の勢もて出發した。さて此日一行のいてたちはと見れば身は常の袴姿なれど、足は白足袋草履穿き、各さゝやかなる荷物携ひ、つば廣の麥稈帽は携ひたれど頭にのせたものはない、帽子あるを見れば海水浴行の如くなれど足拵は不似合なり、遠足にしては荷物携ふる筈なく、事情を知らぬものは奇異の感を懷くに違ひないと思はれる仕度であつた。列車は豫定の時刻に浦和驛を發した、川口過ぎて荒

川を打渡り赤羽にて電車に乗りかへ池袋を経て新宿につく、この驛此日の混雑は實に一通りではないさしに廣きプラットホームも溢るゝ許り、老たるも若きも互に打ち興じつゝあるは高雄詣での人らし、白衣の人の集ひるは我等と同じ富士登山の人である、かほどに多き人々がよく乗ることが出来るかと不安の念にかられつゝ一行も亦これ等の人の間に打交るゝやがて汽車はついた、何れも乗りは乗つたがまるで船をつめた有様、身動きさへも自由にはならぬ、中には立て居るものもある、辛いことではあるが列車の動搖によるめく心配は少しもない、私は油紙を取り出しドッカと尻を下してうづくまる、まことに落付きはよいが風は頭の上を素通りして暑きこと甚しい、これでも汽車賃一人前を拂つてあるものと愚痴をこぼさぬ譯にはゆかなかつた、ますますなつては立上る、外は一面の平野で埼玉のそれと變りはない唯草草又は煙草の如き珍しきものがあるのが違ふのみであつた、八王子を過ぐる頃より景色は次第に變り汽車は次第に山に近づく、高雄山に至れば約半數は下車し辛ふじて一人前の旅客となることを得た。

これより汽車は甲州街道に沿ひ、或は遠く或は近く桂川の流れを望みつゝ小佛の時にかゝる隧道を過ぐることも十數回猿橋の景を眺めんと待つて居た時に乗客の一人によくこの地の話をするものがある「この次は猿橋です」と「さうば」と許り隧道を出づるや否や眞先に窓を開けば橋らしきものは一つもない、かゝる失敗も汽車旅行の興なるも二三回も之を繰返されては興もさめた、又も「猿橋猿橋」との聲に首さしのべて外を見れば、岩角突出して自然の橋をなし峽流其下を走る、こは富士熔岩によりて作られたる甲州の奇景なりと聞けど、汽車中の眺なれば賞翫の暇も研究の餘裕もなし。やがて大月に着く、白衣の行者一隊又一隊相連なり、混雑名狀すべからず、時正に正午なればと誘はるゝ儘富士見館にて小憩し午食をしたるが、其間に鐵道馬車の交渉をなす、乗る人多くして馬車少く、會社の事務員頗る鼻息があらゐ、拜むが如くにして漸く三時出發と話まとまる。

しばらくの暇あればと再び登山の仕度にかゝる袴は短くはかれたり、携ひたる帽子は頭の上に戴かれ中には脚絆をつけるもあり漸く登山氣分となる。

三時大月を發し、馬はよく坂路を走り途中一回乗換へて六時過ぐる頃吉田に着き大外河旅館に泊す。

あくれば二十二日五時頃より起き出て、登山の装をなすこれ眞の登山仕度なり、袴携帶品の大部は從者に送り、各着物を端短かに着なし足は脚絆草鞋かけ、帽子眼深かに被りて金剛杖をつきたる登山姿、足取りしつかりと強力三人に導かれて六時宿を出づ。富士嶽神社に詣て、社の後に出てこゝより馬車にのり、馬車は荷馬車に幌をかけたる如きものにて乗り悪きこと甚し加ふるに道は岩角の凹凸の甚しき裾野が原、車は常に右に傾き左に倒れんとし、からだを打ちつけ尻を痛め寧ろ歩むに如かずとまで思はれた、路の兩側は茫々たる富士の裾野、尾花などの生ひ茂れる間にホテルブクロッルッデバカマなどの咲きほこれるは亦捨てがたき眺であつた。

九時馬道につく、こゝより先は馬のみ通ふ、小憩してしたくを調ひ山路に入り先づ第一に身體の穢を清むべく祓を受く、前途に望める身に幸あれと祈りくる、神官の詞がいつになく有難く聞えた。

これより先なる路は山路には珍しき平なる者にて、

上りに苦しむことなく、時は正に盛夏なれど雲つく許りに簀を立ちたる老樹の日を遮りてさまで宜しと思はず、進むは易けれと前途の氣遣ひあれば一行互に相誠しめ悠々せまらず静に上る。

四合目の茶屋につきたる頃恰も正午なればと草鞋穿きの儘尻を据え食事をなす。

五合五勾より四邊は倭林となり日光は會釋なく照りつく、帽子を日よけにしてしづ／＼上る、六合五勾よりは木は絶え焼石の散亂せる間に草木の散點せるあるのみ、右方遙に見渡せば下り道の砂走りあり豆の如く見ゆるはこゝを下る人にやあらん、凝視すれば身も共に轉落するかと思はれ足すくむ、山登りするには他見は禁物なり唯足許を見よと強力はいふ。

七合目に至る頃は身體漸く疲れ足強の行者連に一行の足の調子は亂れ勝なり、疲れ多からざるは金剛杖を力に稍早く進むも、疲れ甚しきは杖をつき鎖にもたれ一步一喘の有様である、先登と殿相離なれては相呼應し、七合の茶屋に達して小憩携ひたる菓子に元氣を呼び起し、再び急坂を上る、足は重し汗は流れる、休めば冷氣身に徹す、疲れたるは後を支へ前より引き、漸

くにして八合目に達す、大外河の特別の心配にて富士ホテルに泊することゝなつた。

早速に強力の背負ひ上げた見るからに穢き綿入の襦袍を着込み女連れは折箱形の二段の寢所に陣取り、男連は他の平たき幅一間許の座敷に陣取る、行囊は廣けられ種々の物を口にも今日の疲れを談しつゝある間にはや外套被りて寢たるもあり、やがて六時頃強力の運びくる、半煮え飯と味噌汁を口にし、翌日の出立早ければと各布團にくるまる、宿の者多ければ布團の數足らず、一萬尺以上の高地さらでも寒氣甚しきに布團も敷かずにはねられるものにあらず、されど疲れの甚しければにやいつの間にかまどろむ。

七時頃にやあらむ隣の方さわがし女連れの數人の登山客の來れるなり、目覺めたれど起きもせて其さわざを聞く、再びまどろむと思ふ間に又々隣の方騒がしくなつた、何事ぞと見れば隣にありし鈴木平田兩氏の頭上に差出したる窓によりて寢ね居たる一人の強力寢返して兩氏の上に落ちたるなりと、大石の崩れ落ちたるならば小屋も人も微塵になりし者と後で大笑した。やがて東の白け初めた、前日のつかれと前夜寝られ

ず、且寒かりし爲め頭痛むこと甚し、仕度する間に強力は焼きたる餅を出す、食はんとすれど味なくして咽を下らず、携ひたるパンなど食し荷物を此處に託して頂上に向ふ御來迎を拜まんと一同心勇む。

九合目に近き頃、金輪が見え初めた、見渡せば眼下は層雲閉ぢこめて恰も蒼海を見るが如く、怒濤逆巻くが如く見ゆるもの或は連立てるが如きもの或は龍卷にても起りたらむ如く高く伸上るものあり、赤き光に照されて白く赤く或は黒く彩られたる雲の景色と雲間を分けて上り來る日の出の景、此山ならては見られぬと必々思つた。

九合目に至る頃ははや疲れを覺えて來た、一角曲つては停まり又進んでは腰を下す、足強の者は或は押され或は引かれ辛して頂上に至る、二錢拂つて金剛杖に烙印をぬす。

これより御鉢廻りなり、まづ御殿場上り口を経て銀明水に至り駒が嶽を経て、萬年雪の上をすべり、金明水に下り、更に上りて噴火口を一周した、それ即ち御鉢廻り、御鉢とは噴火口のことである。

ど買ひ調へて山を下る、上りに比すれば極めて早し、九時頃八合目につき各荷物を携へて須走に向ふた。これよりは砂走りと稱する道にて、焼石の上を走るのが如く降るなり、男は元氣にまかせて走り下るも女は能はず、途中學生の負傷したるを見て一行は一層警戒した様に見えた、ザッリザッリと急がずに下る、忽ちにして草鞋の踵に孔を生じ拾ひたる草鞋の切れを纏ふ纏ひたる草鞋の足首に危き付きて殊更歩みにくくなりたるものもあり、六合五勺の茶屋にて草鞋をかへ、下りて太郎坊に至る頃、ヤマハンノキなどの林あり、茶店に憩ひ再び出て、坂路を下る松樅等の喬木多し、枕下一面に雜草生ひ茂り、姫百合などの美しく咲けるをも見た。

馬返に至る頃は一行疲れ果て、歩む勇氣なし、馬車を備ふて再裾野の原を進む、構造吉田に於けるものに等しく尻痛けれど苦痛をいふ者は一人もなかつた。須走につき袴を穿きてやうやく女學生らしくなり晝食を済して、直ちに鐵道馬車にて御殿場に向ふ、滑稽なる御者あり一行を笑はす。

三時乗車して御殿場驛を發す、富士登山に成功せる

一行は、この時に至りて元氣尙盛である、出てはくいる隧道の歌に知られたる小山を過ぎて汽車は函嶺の隧道を通る岩を噛む流れに逢ふては離れ、離れては又近づき、いつ見てもよい景である。山北よりは景色も平凡、甲府驛の海岸の景は一寸見た許りて通りこし夕刻にははや東京驛につく。電車にて上野に至り再び汽車にて浦和につく、時に午後九時。

此行我々最初の試なりしも、何等の支障なく登山することを得、平素鍛練の足なみを試み、壯大なる景色に接して浩然の氣を養ひ、身體の上に精神の上に益することの大なるを喜ぶのである、殊に一滴の雨にも逢はなかつたのは天のたすけのあつたことと感謝する。

## 富士登山

本二部 溜 貝 ゆ き

起床の鐘はけた、ましくなりひひく。快なるかな、一點の浮雲なき晴天。友の顔には言ひ知れぬ喜びほめく。午前七時三十分と云ふに恩愛深き師や懐かしき

友だちに送られて、我等一行は、いよいよ登山の途にのぼる。我等はさながら大なる希望に包まれて、戦地に向ふ兵士の如く、嬉しき血潮燃ゆる如きなり。

一行は新宿より、亦も長蛇の如き列車に身を托しぬ幾つかの驛を過ぎて、尙止まらざる列車は、初對面なる地を見せて、程なく八王子驛。こゝを出れば、隧道又隧道。人も我も蒸暑さに身のおき處なきほどなり。さる内にも山々の緑のひまよりやさしの白百合、撫子の香ひ出づるがごとしほらし。

名にしあふ猿橋も瞬間に我等の目に映せしのみ。やがて大月の停車場に着す。時正に十二時三十分なり。プラットホームよりはさ出されしは、多く登山者と覺しく、白衣を身にまとへり。

我等一行は近くの茶屋に憩ひて、晝餉をものす。此の家の庭の趣いと心地よく、涼風はゝをかすめて軒の風鈴靜かに動くやがて馬車に打乗りて緑色こき山路をぬひゆく。

時ならぬ鶯のかなづるを聞き、傍流るゝ水の岩に碎けて玉と散るを見、水車の遠近に見ゆる或は老婆の糸くる様なんと眺めやりては唯々繪の境にさまよふ心地

す。

吉田に着せし時は早や日は西山に沈めり。

黄昏の吉田の町をゆく時には、そゝろに旅の衰身にしみたり。此宵の宿。芙蓉館につけば、宿の人々心地よき待遇をなす。

入浴後狭からぬ室に、二十八人夕餉の膳に向ひし時の嬉しさは、言ひつくし難し。

明日の用意ども何くれとして、早く臥床に入る、蚊帳つらざるをあやぶみつゝ。

一度寝につきたれども、蚊の大軍に攻められてはねむられず、如何に難攻不落の我等の心も忍びかねてや一聲に叫びて遂に防禦の策は講ぜらる。それより後は高きいびきの外聞ゆる音もなく、皆安き眠に入る。

明くれば二時起床す。草鞋、脚絆に麥稈帽かむりし出立のいともかひくしきに名もいかめしき金剛杖とやらを持ちたる更にあかし。

いよいよ四時に宿を立つ。仰げばみ空には無數の星晨輝き渡り、東の空漸く白みゆきて、彼方に富士の英姿墨繪の如く望まる。

大さやかなる荷物背負ひたる五人の強力、何かと既

こりかに、語るも興深し。鬱蒼たる森をぬけて行くほどに、がたくり馬車の用意ある所に至る。此處より馬車にて裾野の悪しき道を、ゆられ行く。此のあたり一帯の花野にて、珍らかなる草ども多かりければ、悪しき道もさ程にも覺えず。彼方は緑深き松原つゞきに、此處よりの富士の眺望我には筆も舌も及ばじ。狩の遊の古の如何に雄壯なりけむと思ひつゞくる程に、馬返しに着く。暫し憩ひて、是よりいよく歩み始む。

登山する者多く、道は非常に賑ふ。道の左右には蒼々たる木々繁茂す。其の間を静々と歩みゆく。さながら西の都をぬり行きけむ、みやび車のその如く。歩み勞れては度々路傍の木に腰打ちあらず。時折馬子と出會ふ。チャラン／＼の勇ましき鈴音を殘して木蔭に消えゆく。さるほどに、やがて五合目に着く。あやしき、わらやに旅の畫餠をすましたるがいと興深し見渡せば、あたり一面に霞に包まれて、遙か彼方に三ヶ月湖を望めるのみわらやに名残を惜しみ、行先遠き旅なれば再び歩み出す。次第に歩むほどに苦しくなりゆく。

繁茂せる木々の中には、古木の風に吹き倒されしに

や、横たはりて猿おがせに、おぼはれたるあり、或は埋没して岩の如くなりたるあり。

此のあたり植物は次第に小さくなりゆきて、六合半あたりに至れば、榛のきの脊低きが繁茂せると、やさしき苔類が花咲けるとあるのみ。次第に涼しくなりゆきて七合目の邊に至れば、下に一面に淡き雲を見る。焼石の上をザクリ／＼行く亦趣有り。

雲は時折涼しき、風をもたらし来る。道は次第に歩みにくくなりゆきて、友だちの内には非常に勞れ強力の世話になるものも見ゆ。

苔桃とやら云ふ苔類の植物點々と岩間に見えいとしほらしかりき。二三歩ゆきては休み、五六歩行きては憩ふ。この時に於てこの可憐なる花こそげに我等のエンゼルなりけれ。

八合目は目近に見ゆれども、中々にたどりつくべくも覺えず。かひ／＼しき我等の出立を見て、賞めゆく同じ登山者あり。かゝる言葉に、わづかに激まされていさみゆく。

遂に八合目に達す。我等の嬉しさ言はん方なし、腰

打下せし最後、とみには立つこと能はず。冷氣はいとゞ身にしみて、十二月頃の心地す。おかしき夜着を引被ぎて寒さを防ぐ。此のホテル富士山中第一なりとの由なれど、天井低く一方にのみ窓有りて、ベットは戸棚の如し。一つのベットに三人入りたるも此處ならてはとおかし。

富士山上の夕食何も／＼後の思出にと食す。明朝は亦早き事なれば旅寢の夢を結ぶ午後五時。

目醒むればピカリ／＼と硝子戸に光るものあり「はて不思議」と夢ならぬ事を疑ひ居たりしに、折からゴロ／＼／＼なりはためくに、此處山中の宿なりしよと獨あかしと思ひつゝ再び夢路をたどる。

人の囁く聲に目醒むれば午前二時なり。一滴な水も千金の價するほどなるが故に顔洗へらるればこそ。強力のもち來りし、力餅に力をつけて、夜着まとひしまゝホテルを立つ。六根清淨を唱ふる聲いとにぎはし。

東空次第に明るくなりゆきて、雲の海の眺めさながら大海に似たり。舟の如き島の如き、人の如き雲あり。み空には皎々と星ひるめく。次第に登り行く程に寒さいとゞ身にしみ呼吸忙し。

四時三十分頃にもやあらむ。灰色なりし雲の海も輝く星も、われとうすれ、ゆきて紅の日輪は靜かに／＼登り來りて、照り映えたるあたり、一面は一層の輝きをなせしと見る間に、雲海を離るるより早く、五光の光を四方に放つ。喜びの聲は富士の高嶺もゆるがむばかりとなへらる。更に歩みを續くる程に、右方には、獅子岩の奇巖を望む。其の形狀さながら、猛りにたけりたる程獅子の吹き下す怒風に吼えつゝ、頂かけて奔りよる如しはるかに過ぎし麓の方を顧みつゝ、屏風の鼻を越え名に高き胸突八丁の險にさしかかる。今は早やあぼろげながらの道も絶えて、削り下したる如き岩角を辛うじてよちのぼる。仰げば天の戸のひらけたるやうに左右に高き巖の門は、早く頂上の入口なりと苦しさことも打忘れて、心と共に足もすゝみ、遂に頂に達す。

金剛杖に記念の印を捺す。

白衣の人のいく組か淺間の社に出入する様の何となく勇まし。

我等は尙も御鉢廻りとやらをすべく歩む。

噴火口を望みし時には、唯驚くの外なく噴火時代の

恐ろしく雄大なる様を思はしむ。

劍ヶ峯は彼方に高く聳え、上りゆく人、蟲の動くに似たり。見渡せば、遠近の山は緑の霞に沈みて、何とやら云ふ湖は瑠璃の鏡とばかり深空を仰ぐ。寶永山は眞近に美しく望まれたり。諸々水蒸氣立上るを見る。銀明水、金明水の所に至れば、こは如何に小さき井戸の如きありて、其の中にある水が世にたゞへらるゝ銀、明水金明水なりとは。瓶に入れて、賣りぬたり。それより噴火口内に少し入れれば、千古の雪は火口一面を埋めたり強力に取らしめて、口にせし時のおかしかりし事。亦其の上をすべりし時には言ひ知れぬ愉快に満たされたり。

噴火口内の廻りも目度度すみて、一杯の甘酒に元氣百倍し、何やら偉大なる力を身に得たる心地して歸路につく。

御殿場への降り口に至れば、此のあたり奇岩怪石もて成り、崩れんとして自ら支ふるかとおやする。杖を力にからくして降る。かくゆくゆに道を漸く石妙く此處にもすこし雲を見る。七合にも近くなりし時俄にのぼる雲のあし、疾く眼下見えし寶永山も、みる／＼

うちにかくれ、下界はたゞ白き霧の海。上る時とは違ひて割合に勞少なし。先の程の霧漸く晴れて、右手に高く、寶永山の此方一條の道の帯のやうに、見えるが名にしふ砂走。草鞋を用意して降る。其の面白さはかりがたし、遙かに望めば細き砂路は糸筋の如くなりて遠く太郎坊のこんもりとした森までつゞき居るゆくほどに霧は名残りなく晴れ、麗かなる日影に箱根足柄の山々の影、幻の如く浮べり。やがて須走につき、其處より馬車にて、亦も花野をすき御殿場の宿に着きしは午後二時過ぎる頃なり。山海の珍味に腹づゝみを打ちて家路につく。

### 富士紀行より (其の一)

井上茂能

此處は八合目のホテルの前、あゝ今日は登山もこれで終りと思つたら、急に疲れが出て、一步運ぶのもいやな心地がする。兩側に丸石を積み重ねたホテルの小さい入口をくぐる。此の旅館が山中一等と云ふのである。少し内部の様子を書いて見ると、座敷が左右に別れて

ゐて入口から向つて右側は疊を横にして六七疊も敷かれると思ふ。所謂うなぎの寝床と云ふのであらうと、うなづかれた。左側は押入の唐紙はつした様な所が六つあつて、三つづつ向き合ひに造つてある。そしてこの左右の間は巾一尺位と思はれる土間。今まで廣大無限の宇宙を仰いで來た目には、地獄の底にはうり出された様な氣分がする。土間を歩くにも學校の廊下に行く様に大道闊歩的は到底不可能なので、止むなく靜かに歩く。此の様であつたら「女らしく」との含監の先生の御小言を頂かなくもすむものを暗くて誰がどこにいらつしやるやら、一向わからない。私の一番奥の押入の二階に席をとる。少し脊のびでもすると屋根に頭がつかさう。これでも上にまだ上等の方。下の方々は立つ事も出來ないとして大騒ぎ。出來得るだけ座つたまゝで用事をするので、無精者には誠に都合な所である。

夕方になると、うす暗いランプが一つともされた。寂しい感じが起らずには居られなかつた。そのうちに寒さはだんだんつよくなる。風の音ははげしく聞ゆる。單衣の重ね着に、その上に又どてらを着てしのぐ。こ

の夏の最中にも、所變れば冬をも迎へる事の出来る世の中。常ならぬ世など、徒らに厭世悲觀するには當らぬ事ではなかいしらと思ふ。時間の事は一切、時計御持參の方におまかせして終ひ、何時頃か少しもわからぬ。別段用事もないので、寢につく。目がさめたので隣りを見るとそこにも誰か起きていらつしやる。早速、「もう起きる時間ですか」と伺ふと、大きな黒い影が動いて、續いて、また今八時ですと云ふ聲だけ暗い中から聞えた。あやまた三十二日は漸く夜になつたばかり又眠らうと思ふと、あちらの影もまだ横になつた。外は雷が鳴り出して、いなづまの光りはつよくすきもれてくる。急に淋しく床の中に小さくなつた。今着いた客は食事中らしい。とぎれとぎれに話聲が耳に入る。雲の上に夢を結ぶのは、私はこれが最初の又最後であらうと思ふた時は、異様な感にうたれた。

### 富士紀行より (其の二)

本三 藪田テイ

「富士の山登りて見れば何もなし、よきも悪しきも我

心なり。」と古人の歌へる如く、實に登りて見れば何もなし。只噴出岩のごろくと散在して居るの外更に何もなし。然しこれは有形的方面から見たる話にして、他の無形的方面から見れば、必ず何物かあるのである。

それてなければ人々がわざ／＼艱難辛苦をして此山に登る理はない。私はたしかに何物かあることを感じた。ちがひなく偉大なるものがあることを知つた。而して亦これは他物の如何にしても學ぶ能はず、模す能はず倣ふ能はず欲すること能はざる特色を有することをも知つた。これ即異彩を放つ神州正氣の山靈なのである。

此地實に海を抜くこと一萬二千尺。下界を見れば山川都市は幾重かの雲の下……如何にかしてこれを一望に集めたしと欲すれども能はず。只碧色は海翠色は山赭色は平地と見わくるの外先方なし。

しかし亦翻つて下界を見れば、これ等を認むることさへ出来ぬ。山の崇高なること實に言語に絶し、問ふ講社の説立の勢實に盛なり。此所に於てか感ぜざるを得ないのである。

廣い此社會の如何なるものの中、甲乙を認むることなくして、此甲を崇高すると言ふものあらう……異彩

を放つ山靈には此點に於て感ぜしめられたのである。亦これによつて苦心を苦心ともせず登山せしむる信仰の偉大なることを知つたのである。

### 富士紀行より (其の三)

本 三 福田 貞子

寒さのために目をさまし、がた／＼ふるふる身體を強力よりかりたかいまきにかため、手拭を頸にまきつけて寒さをふせいた。そばにやすんでゐた丁さんと、吾と同じいてたちに構へてふるふるゐる。

ほそいらんぶの光にむかうをすかしてみると、平田先生や、齋藤先生、鈴木先生などは手拭て頬かぶりをして、吾々と同じかいまきに身をかため、しきりと寒い事やめづらしい事を話してゐらつしやる。

昨日まであの様に暑い／＼と大汗を流してゐたが、その暑さはどこへやら。その汗はどこへやら。

高山はかほど寒暑の差の夥しきかとどろいた。

足のつかれも一夜のかりねにいさゝか快復してゐる屋外にいてみれば、無數の量は爛々としてかゝや

き、寒氣一入である。一步々と足をすゝめて行く中、呼吸の艱難なるを覺えた。

杖に身を托して人のあとをたどり／＼して頂上へと進んだ。

時はだん／＼と經つて星の数もへつてくる。東の空も明るく、鶏鳴曉を報ずる頃となつた。

やゝしばらく行く中に、東方の昏黒の中に紫氣がたゞ／＼と漸くにして變じて微紅となり、五彩の龍文を現し、熔銅となり、白熱の鐵となり、遂に眞紅の朝霞ゆ

ら／＼と浮び出づれば、やがて百千の金箭迸り、紅天地に充ち忽にして燦爛凝視すべからず。太陽は躍如として昇る。所謂御來迎にして、人間此の雄大なる光景に打たれて屏息跪拜するに至る。

下界全く雲に包まれ盡くし、嶽外臺も見るに由なく、たゞ見るは御嶽、乗鞍、淺間、日光等の山嶺がさながら島の如く鯨の如く横はるのみ。

吾はこの宇宙の大觀を見るに、あたり天地の闊さを覺ゆ。仰いで上峰を望めば雲あり、俯して下界を瞰れば雲あり、雲間にたゞ一人吾身あるを感ず。

神尊く氣靜かに、愴然として涙のおつるを知らず。



### 消 息

#### 學校消息

##### 先生方の御移動

平田先生

大正四年の春、本校に赴任せられて以來、専ら物理化學を擔當せられ、御熱心に私共を御教へ下さいました先生には、今回南滿洲鐵道株式會社の召聘に應ぜられて、同社の經營にかゝる實業學堂に榮轉せられました。先生の御去りになりました事は本校に取つて誠に不幸なことでございますが、一面に先生の様な手腕の御有りになる方を内地にお留めするよりは、活動の自由な新開地にお送りする事がすべての方面に幸福なるを思つて、前途を御祝ひ申し上げて潔よく御送り申したのでございます。

黒須先生

今まで附屬の爲にお盡し下さいました先生には、此度岩槻小學校へ御轉任になりました。あくまでも着實な先生の御態度は必ず地方人の歡迎する所と存じます。益々御健全で此道の爲にお盡し下さいます様に御願ひ申し上げます。

中里先生

先生には黒須先生の御後任として秩父郡下吉田小學校から御出て下さいました。

小高先生

永らくお教へ頂きました先生には、御病氣の故を以てお退きになりました。唯一重に一日も早く御全快遊ばす様に祈つて居ります。

辻村先生

小高先生のお代りにお見えになりました、なほ寄宿舎の方も世話下さいます。

政所先生

平田先生のお代りに講師としてお教へ下さることにになりました。

猪野先生

御都合上事務の方をお退きになりました。

岡田先生  
猪野先生のお代りにお見えになりました。

### 式と會

大正六年九月一日 午前九時より第二學期始業式を體操教室にて舉行せられた。

九月二十九日 第四時の授業を休み辻村教諭の新任式を體操教室に於て舉行せられた。同日午後一時より校友會講演部大會を體操教室に於て開く。講師は東京府立第三中學校長八田三喜先生であつた。

十月十三日 第一時講堂に於て戊申詔書捧讀式を行はれた。

十月二十日 午後一時より體操教室に於て音樂會を開かれた。

十月三十日 第一時講堂に於て勅語下賜紀念式を舉行せられた。

十月三十一日 天長節祝日の式を午前七時より體操教室に於て舉行せられた。

十一月二日 本校校庭に於て秋季大運動會を行つた。

十一月二十七日 午後二時三十分より體操教室に於て平田先生の告別式が舉行せられた。

十二月二十五日 午前七時より第二學期終業式が體操教室に於て舉行せられた。

大正七年一月一日 新年祝賀式を午前九時より體操教室に於て舉行せられた。

一月八日 午前九時より第三學期始業式を體操教室に於て舉行せられた。

一月八日 放課後黒須先生告別式並に中里先生の新任式を體操教室に於て舉行せられた。

二月九日 第二時よりの授業を休み講堂に於て嚮先生講演會を開かれた。

二月十一日 午前八時半より體操教室に於て紀元節祝賀式を開かれた。同日午前十一時より寄宿舎食堂に於て祝賀會を開かれた。

### 旅行

大正六年七月二十一日より二十三日まで三日間、夏季休暇を利用して四年二部三年生中より有志者をつの

り、齋藤鈴木平田三先生の引率の下に富士登山をなす。實に開校以來のレコード破りの大旅行なり。  
同六年十月二十六日 比企郡岩殿山に全校生徒遠足をなす。

### 運動部便り

大正六年十二月二日、例年の通り大運動會を舉行す。折悪しく曇天、されど空高く響き渡る煙火に勇氣百倍し、運動本部は直に準備に取掛りぬ。煙火は上る。見物人は増す、空は刻々危険に近づく。競技は益々進行し、今や本校の花をして運動場裏に振はんとせし時、かなしくも雨は落ち始めぬ。然れども元氣依然として旺盛……せめて午前中の競技のみはと皆々一層意氣込みしも、偉大なる自然の力、如何ともなし得ず、遂に休憩の已むなきに至り。今や今やと空模様伺ひしものと變化なし。又もや一同銷沈せし元氣を一新し、以つて雨中の大活動となりぬ。雨にかすめるファウスト、

負けじ劣らじと争ふ、各クラスの選手競争。勇まじき  
樂隊、傘の見物人、我等が深き印象として永久に  
忘るゝ事能はず。

遊戯に於ては例年の通りの物のみにて、これぞと云  
ひて新らしきはなかりしも、競技にありてはなかく  
に新發明のものありき。最後に勢よくも全校生徒の綱  
引をなし、どろまみれとなりて終りを告げぬ。にくゝ  
もあり、又なつかしくもあるは、此の日の雨なりき。

# プログラム

## 第一 開會の辭 會長

## 第二 運動

|   |        |      |    |
|---|--------|------|----|
| 一 | 體操     | 生徒全部 | 一回 |
| 二 | 二百米競争  | 講一   | 三回 |
| 三 | 二百米競争  | 尋三男  | 四回 |
| 四 | デットボール | 尋四女  | 一回 |
| 五 | 二百米競争  | 尋一男女 | 八回 |
| 六 | 毬入     | 尋二男  | 一回 |

|    |         |        |    |
|----|---------|--------|----|
| 七  | 珠算競争    | (講本習科) | 三回 |
| 八  | 旗取競争    | 同      | 三回 |
| 九  | 百五十米競争  | 尋三女    | 三回 |
| 一〇 | 百五十米競争  | 尋四男    | 五回 |
| 一一 | 二百米競争   | 尋二女    | 四回 |
| 一二 | 二百五十米競争 | 本四     | 二回 |
| 一三 | 二百米競争   | 尋六女    | 三回 |
| 一四 | 二百米競争   | 尋二部    | 三回 |
| 一五 | 二百米競争   | 高二女    | 三回 |
| 一六 | 陸鈴木環つなぎ | 高一女    | 三回 |
| 一七 | 旗千鳥     | 尋三女    | 一回 |
| 一八 | 二百米競争   | 本三     | 四回 |
| 一九 | 二百米競争   | 尋五男    | 四回 |
| 二〇 | 二百米競争   | 高二     | 三回 |
| 二一 | 體操      | 尋二ノ二   | 一回 |
| 二二 | 毬拾      | (講本習科) | 三回 |
| 二三 | 二人三脚    | (講本習科) | 四回 |
| 二四 | 旗拾      | 尋一男女   | 八回 |
| 二五 | 登校競争    | 尋二女    | 四回 |
| 二六 | 棍棒釣     | (講本習科) | 三回 |

|    |          |        |    |
|----|----------|--------|----|
| 二七 | 二百米競争    | 尋二男    | 四回 |
| 二八 | ヴァレーボール  | 末三講二   | 一回 |
| 二九 | 糸捲き      | 尋三女    | 四回 |
| 三〇 | 二百米競争    | 尋六男    | 三回 |
| 三一 | 二百米競争    | 講二     | 三回 |
| 三二 | 造花競争     | 本三     | 一回 |
| 三三 | 毬入       | 尋二女    | 一回 |
| 三四 | 百五十米競争   | 尋四女    | 五回 |
| 三五 | 廻旋フットボール | 本二     | 一回 |
| 三六 | 登校競争     | 尋二男    | 四回 |
| 三七 | 播き付と取り入  | 尋六女    | 一回 |
| 三八 | 跳躍歩      | 本一講一   | 一回 |
| 三九 | メデイシンボール | 本二     | 一回 |
| 四〇 | 帽子取り     | 尋五男    | 一回 |
| 四一 | 動作遊戯     | 尋一男女   | 二回 |
| 四二 | キャプテンボール | 本一     | 一回 |
| 四三 | 俵運競争     | 尋三男    | 一回 |
| 四四 | 障硯物競争    | (講本習科) | 四回 |
| 四五 | 十字形旗送り   | 尋五女    | 一回 |
| 四六 | 支度競争     | 尋四女    | 五回 |

|    |          |        |    |
|----|----------|--------|----|
| 四七 | 騎馬擬戰     | 尋四男    | 一回 |
| 四八 | バスケットボール | 本四二部   | 一回 |
| 四九 | 帽子取り     | 尋五男    | 一回 |
| 五〇 | 二人三脚     | (講本習科) | 三回 |
| 五一 | 二人三脚     | 尋四男    | 三回 |
| 五二 | メデイシンボール | 講一     | 一回 |
| 五三 | 陸鈴木環つなぎ  | 高二女    | 一回 |
| 五四 | 二百米競争    | 本一     | 四回 |
| 五五 | 旗取       | 尋三男    | 四回 |
| 五六 | 毬縛       | (講本習科) | 五回 |
| 五七 | 交趾ダンス    | 本二講二   | 一回 |
| 五八 | 薙刀操      | 本三     | 一回 |
| 五九 | 綱引       | 生徒全部   | 一回 |
| 六〇 | 合同體操     | 尋三以上   | 一回 |
| 六一 | ●休憩畫食    |        |    |
| 六二 | 戲臺競争     | (講本習科) | 四回 |
| 六三 | 提灯競争     | 尋六女    | 三回 |
| 六四 | ハードルレース  | (講本習科) | 九回 |
| 六五 | メデイシンボール | 高一女    | 一回 |
| 六六 | 棍棒釣      | (講本習科) | 二回 |

|    |          |           |     |
|----|----------|-----------|-----|
| 六六 | 二百米競爭    | 本 二       | 四 回 |
| 六七 | 廻旋フットボール | 職 員       | 一 回 |
| 六八 | 各級選手競爭   | 各級選手      | 一 回 |
| 六九 | 二人三脚     | 尋五女       | 三 回 |
| 七〇 | 毬拾ひ      | (講習科) 尋五男 | 二 回 |
| 七一 | 單脚競爭     | 本三四二部     | 四 回 |
| 七二 | フアウスト    | (講習科) 講 二 | 一 回 |
| 七三 | 障礙物競爭    | 本四對二部     | 一 回 |
| 七四 | 毬の集配     | 尋六男       | 三 回 |
| 七五 | バスケットボール | (講習科) 來賓  | 一 回 |
| 七六 | 片脚旗取り    | 尋五女       | 一 回 |
| 七七 | 棍棒釣り     | (講習科) 尋五男 | 四 回 |
| 七八 | 應急手當     | 尋五女       | 一 回 |
| 七九 | 長距離競爭    | 尋五男       | 一 回 |
| 八〇 | キャプテンボール | 高ニ女       | 一 回 |
| 八一 | ヴァレポール   | 本三對講二     | 一 回 |
| 八二 | 提灯競爭     | 卒業生       | 一 回 |
| 八三 | 體操       | 生徒全部      | 一 回 |
| 八四 | 綱引       | 尋三以上男     | 一 回 |
| 八五 | クワドリール   | 生徒全部      | 一 回 |

第三 君が代 全部  
第四 閉會の辭 會長

音樂部便り

我が音樂部に於きましては、園部先生の御熱心なる御指導により益々發展しつつあることは誠に喜ばしう御座います。

毎年一回づゝの音樂會に會員一同の非常な努力と熱心とを以て常に練習してあつた技術を発表いたします。大正六年度に於ては十月二十日に此會が催されました其プログラムは左の通りで御座います。

プログラム

|        |         |
|--------|---------|
| 一 開會の辭 | 直江 會長   |
| 二 合 唱  | 生徒 全體   |
| 三 合 唱  | 川口教諭作歌  |
| 月下懷郷   | 講習科一年全體 |
| 湖上の月   | 下村次代作歌  |
|        | 吉岡紅甫氏作歌 |

|    |                   |            |     |          |             |
|----|-------------------|------------|-----|----------|-------------|
| 四  | ピアノ獨彈             | ロッシニイ作曲    | 一 二 | オルガン獨奏   | グロトバニ作曲     |
|    | プレゼント、ジャニイリヒナリ作曲  | 本科三年 林 タケ  |     | アヴェマリア   | 本科四年 横山 ハツ  |
| 五  | 合 唱               | 有 志        | 一 二 | 合 唱      | シウベルト作曲     |
|    | ウツドマン、スベリア、ザト、トレイ |            |     | 舟 子      | 本科二年 講 習 科  |
| 六  | 合 唱               | 講習科二年全體    | 一 三 | 獨 唱      | 塚本樂山氏作歌     |
|    | 深夜の都會             | 佐々木信綱氏作歌   |     | 深林 趙遙    | 本科四年 島田 キクノ |
|    | 湖上夜景              | 谷勤氏作歌      | 一 四 | 合 唱      | 乙骨三郎氏作歌     |
|    |                   | ツエルテル作曲    |     | 三つの舟     | マルシユネル作曲    |
| 七  | オルガン獨奏            | 本科三年 保坂 タカ | 一 五 | ピアノ獨彈    | 佐々木信綱氏作歌    |
| 八  | 獨 唱               | 本科二年 關根 彌生 | 一 六 | 合 唱      | 本科三年 堀江 むめ  |
|    | バイ、ザ、サッド、シー、ウエーヴス | 本科二年全體     |     | メイ、ハズ、カム | 本科四年全體      |
| 九  | 合 唱               | 坂正臣氏作歌     |     | 秋のあはれ    | 鳥居枕氏作歌      |
|    | 愛らしき花             | シヨイブリン     |     | 夜の御社     | マラン 作曲      |
|    | 作曲夜の歌             | 坂正臣氏作歌     |     | 春の草秋の草   | クロイツァ氏作曲    |
| 一〇 | 合 唱               | ハウプトマン作曲   | 一 七 | 合 唱      | 本科一年全體      |
|    | 秋の夕暮              | 武島又次郎氏作歌   |     |          | 吉九一昌氏作歌     |
|    | 秋 興               | 川口教諭作歌     |     |          | 中島かね子氏作曲    |

達磨さん

吉九一昌氏作歌

人八 獨 唱

本居長世氏作曲

一九

カスリン、メーヴアーニーン

本科三年 池田ヤス

二〇 合 唱

本科二年 立野タケ

二一 校 歌

直江 會 長

二二 閉 會 の 辭

生 徒 全 體

信 仰

ジイ、ロシニイ作曲

此プログラムによりまして、大體批評しながら皆様に御報告申し上げ度いと存じます。

三年生林タケさん、堀江むめさん、二部生立野タケ

さんのピアノ獨彈、保坂タカさん、横山ハツさんのオルガン獨奏は何れも立派な出来で御座いました、二年生關根彌生さんの獨唱は英語であつたのですが其唱ひ方も發音も二年生としては上出来で御座いました、唯

練習の際よりは少し音量が少なかつたのは惜しいことでした、三年生池田ヤスさんの獨唱は曲も非常に面白いものでしたからあの美しい御聲で御唱ひになつたら聴衆がどんなに感動なさるだらうと期待して居りましたところ生憎御病氣で園部先生が代理になさいましたのは誠に残念で御座いました、四年生島田キノさんの獨唱は其唱へ振りがなかく上手でしたが少々音量が足りないやうでした、合唱の主なものには講習二年本科二年全體の舟子、本科二年本科三年本科四年全體の信仰で御座いました何れも可成に出来ました、殊に信仰の方は女聲三部の大きい曲で其練習には非常に骨を折りました、其他澤山の合唱の内には比較的よく出来たのも悪く出来たものもありましたが一般的に批評しますと常に練習した時のやうな元氣が無くて形式だけが整つたのが多いやうで御座いました、一體唱歌の上手下手といふのは調子が狂はないとか聲の出し方がよいとか、喉がよく動くとかいふだけではありませんので其上に唱手の精神が籠つて居るか居らないかによつて別れるので御座います、此事は唱歌のみならず一般音樂廣く申しますと藝術は總べて左様で御座います我々

校友會員は絶えざる努力に依り發聲や調子等は可成上達しましたから此上は其曲なり歌なりの精神を充分理解して聴者に遺憾なく發表することが出来るやうになりたいと存じて居ります。

## 寄宿舎便り

第二學期は愈々開始せられ、舍生一同は懐しき我が家を後に歸す。四十日の夏季休業中、心身共に修養せられし方々の互に相見て嬉び、来る新學期をば楽しく遊び、又よく學ばむと望みに満ちたる御顔も拜せられたり。

九月十五日、午後七時より食堂に於て島田氏の衛生幻燈會あり。九時閉會す。

九月二十二日、今までの例として室換へも行はれたれど、今年は只室の變りしのみにて、人々は元の儘なりき。所變れば品かはるとか、一種の新らしい氣分は失はれざりき。第一室は新聞雜誌等の閱覽所とせらる。

九月二十九日、觀月會を開き、兼ねて富士登山者の歡迎會をなす。面白き旅行談などに時の過ぐるも知ら

ず。永らくの間、朝夕色々御世話下されし小高先生の御退職遊ばされし御代りとして、新たに辻村先生を御迎へいたし、竹内先生淺尾先生との御三人の先生の御指導を受ける事とはなりぬ。

十二月二十二日、今學期も殘る所僅かに三四日の今日忘年會は開かれたり。逝く年を送りて、目出度き新年を各々我が家に迎へ、新年の七日には再び舍に入りぬ。

一月十四日、寄宿舎の一部の規則を改められたり。起床五時半にて室順にならびて七時の朝禮を行ふ。入浴は食前の部は午後四時半より五時半まで、食後の部は五時半より六時半までとす。本四、本二、講一を一組となし、本三、本二、本一を二組となし、毎週交互に入浴す。二部生は教生なれば隨時とす。六時半より八時半まで黙讀し九時に御休みなさいを行ひ九時半の消燈なり。

一月十八日、静寂を破る鐘の亂打に、すは火事ならんと、一同驚き、急ぎ起き出で支度を整へ校庭に集合す。時將に午後十一時半、やがて川口先生よりの御教

訓、竹内先生の御話しありて解散し、一同安堵の胸な  
どつゝ寢に就きぬ。

一月十九日、朝早くより嬉しさ杵の音も聞かれ、正  
午には舍生一同食堂に集ひ、先生方と御一所に樂しき  
新年の會を開きぬ。

一月二十一日、例年の如く本日より塞稽占を開始せ  
り。

朝まだきより起き出て、霜柱ふみしだきつゝ、かけ  
足、雑刀、バスケットボールなどを練習し、時に淡き星  
影仰ぎつゝ調神社へ参拜し、或は別所沼に女學校附近  
或は中學方面に向ひ、郊外散歩をなすこともありさか  
くして二月三日鍛錬も無事に終りを告げぬ。

此の一大家庭は舍監先生を父母と仰ぎ、慈愛の中に  
一同孜々として身心の修養につとめ、益々共同生活の  
美風を發揮し、舍生の親善日に加はり、理想郷の出現  
を喜べる時、一大悲報は傳へられぬ。そは本四寺崎春  
子、池上せき子、本三川野とく子の三人の逝去せられ  
しことなり。天は無情にも有爲の此の人々を此の和樂  
の郷より奪ひ去れり。此の報の傳はるや、舍生寂とし  
て只夢かとのみ疑へり。されど逝きし人々は再び歸ら

ず。徒らになげかんよりは、益々此の寄宿舎の爲めに  
とて一同はげみつゝあり。

現今在舍生郡別表次の如し。(大正七年一月調べ)

| 學 年 | 郡 別 |    |    |    |    |    |    |    |    |        |
|-----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|--------|
|     | 北足  | 北玉 | 北葛 | 南葛 | 入間 | 比企 | 大里 | 児玉 | 秩父 | 縣他府合 計 |
| 本 部 | 二   | 二  | 二  | 二  | 二  | 二  | 二  | 二  | 二  | 二      |
| 二 部 | 二   | 二  | 二  | 二  | 二  | 二  | 二  | 二  | 二  | 二      |
| 本 部 | 三   | 三  | 三  | 三  | 三  | 三  | 三  | 三  | 三  | 三      |
| 本 部 | 二   | 二  | 二  | 二  | 二  | 二  | 二  | 二  | 二  | 二      |
| 講 義 | 二   | 二  | 二  | 二  | 二  | 二  | 二  | 二  | 二  | 二      |
| 本 部 | 一   | 一  | 一  | 一  | 一  | 一  | 一  | 一  | 一  | 一      |
| 講 義 | 一   | 一  | 一  | 一  | 一  | 一  | 一  | 一  | 一  | 一      |
| 合 計 | 10  | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10     |

編輯便り

漸くまとまつた今、稿を繰り返して見ますと、物足  
りない氣がされます。編輯した負頼目からてさへそう  
ですから、會員諸子は尙更の事と恐縮に存じあげます。  
口繪のないこと、頁数の少いこと、カットのないこ

と、紙質を落したと、校正の行渡らぬこと等は、皆  
原稿聚集が延び／＼になりました爲めに印刷期限が短  
かくなつたのと、物價騰貴の爲め前號通りには行かな  
かつた爲めでございます。御承知の通り伊藤先生が永  
らくお休みであつた爲、及ばずながら私が編輯しまし  
たので、何時も伊藤先生や長先生にして頂いて傍觀し  
てゐた罰が當つて今更當惑した結果でございます。ど  
うぞ右の次第御承知の上お諒察の程を願ひます。この  
號を編むに當つて、川口先生の御力添と幹事の方々の  
一通りならぬお骨折りと感謝致します。また卒業生  
の各回に消息をお願ひ致しました所が、お心よく御承  
知下さいまして、一回と三回と二部の一組とを除く外、  
悉く御寄稿下さいましたことは、これまた感謝に堪え  
ません。

同窓會の會計報告も印刷の都合上次號に廻す様にな  
りました、これも御承知を願ひます(石井)

四年二部雜誌部幹事を送る

三 年 雜誌部幹事

軒のつら／＼も漸く消えて、床しい梅馨る春となりま  
した。思へば私共が雜誌部幹事の末席に連りましてか  
ら、花は青葉に、やがて桐の一葉に秋も過ぎて、今や  
み山の雪も名残り少なく、うら／＼かな櫻咲く日を待つ  
時、早くもこゝに一年を過ぎました、幹事とは名のみ  
何もわきまへず只々優しき御指導に皆様の御仕事に煩  
ひを多くいたしましたにすぎません、其の間姉君達に  
は、御勉學にお忙しい中を雜誌のために朝に夕にお盡  
し下さいまして、お蔭を以て毎號美しい雜誌を發行い  
た事が出来ました、その御恩の程は只心に思ふのみ  
で感謝の言葉もございません。

此度この花咲き鳥歌ふ近き日に目出度學びの業卒へ  
て希望輝く世に、船出遊ばさるゝ事になりました。喜  
ばしき事ながら雜誌部にとりましては、誠に名残り  
惜しい事でございます。さりながら何とする術もござ  
いません。姉君達の榮ある前途を謹んでお祝ひ申しま  
す。私共もこれから及ばぬ身ながら雜誌部のためその  
發展に出来るだけ盡します、どうぞ御卒業の後はい  
よくこの部のため御力添下さいまして、澤山床しい  
美しい御詞藻など御寄せ下さいます様お別れに臨んで

お願い申上ます。

## 本科第二回卒業生便り

伊井さん子様(中島)

先日御良人様が見えられたので、東京府下の立川に御住居の事を知りました。御良人様は中學校に御奉職です。御子様は御三人御ありだつたのを御一人御なくしになりましたとか。あの方の事でですから、さぞ御子様方の御上にも御手の届く事でせう。

北郷さん子様

御両親様は御揃ひですし、御養子様は眞面目な御やさしさうな方、御妹様方はよく御出来になり、御子様方も御二人にあまり遊して、本當に御幸福な方です。二番目の御子様の御産れ少し前に、腎臓炎で御なやみでも、よく御通勤の機でした。今はまた御肥りて、元氣もよく昔ながらの北郷さんです。喧嘩した仲ほどこひしいのですつてね。昨年九月御目にかゝつた時は、いつくまでも御話がして居たう御座いました。菅沼鶴生様

御婚約の方が御あり遊すのですつて、弟妹の方に御やさしいとの御噂のある鶴生様は、定めし學校の生徒をも御慈しみて入らつしやいませう。浦和時代とは違つてなりふりあまり御かまひにならぬ様など御見上げしたは、私のひが目かしら。

大谷とめ子様(峯岸)

旦那様は銀行へ御勤め、随分御氣樂の様ですけれど御子様のないのは疵です。いくら子供相手に一日御暮してもやはりほしく入らつしやいませう。でもあの瘦きすな御淋しさうな御肩付では。

徳澤ひろ子様(石井)

旦那様は不動岡中學校に、御自分は御子様御養育がてら遂御近所に御つとめとか。これは又聞えをそのまゝ。

萩原こう子様(吉田)

氣にわだかまりのない元氣な方として知られたこう子様は、家をもたれても、母君になられても、少しも御變りはなく毎月ひらかるゝ本庄の講習會を只一人で賑されたさうです。今は東京の御住居で、御子様方御三人を御祖母様に任せての御勤めは、なかゝ御たいいてはなないでせう。いつぞや「薪割をする時は、テ

ニスをして遊ぶのだと思ふと、誠によい氣持になる」と仰つた御言葉は忘れられませんか。私にとりまして何よりの寶です。

狩野はる子様(牧野)

兵庫縣篠山町に御住居ですが、御子様御三人でしたかしら、御二人でしたかしら、御無沙汰許りしたので一寸分りかねます。「一昨年當地へ参りてより身心共に重荷を負ひ」など年賀狀にかきそへて下さいました。氣の勝つた方ですから、押して働いて入らつしやる御容子がありゝと浮びます。

高木長子様(須永)

腹部切開を遊ばしてから、出来るも出来る、御三人の御母様になられました。先日の御便りに「この頃は子供のために忙しくオキナガラシヒメの異名はどなた様にか御返し、たくなりしました」など御座いました。旦那様は北滿製粉會社の重役で、御住居は哈爾濱。なかゝハイカラな御家庭です。近い中に御歸國なさる御豫定らしい御座います。

齋藤美禾子様(根岸)

御良人様の御病氣で一旦内地へ御歸りになりました

た。でも例の御氣象として少しも愚痴らしい事を仰いせん。樺太で御持ちになつた御子様をねんねこあんぶして湘南の地方までも御出かけの御容子は、どうしても皇后陛下の御前講演に御えらばれになつた才媛とはうけとれません。

細木りや子様(浅井)

御實家の御母様が萬事に世話をやいて入らつしやるのですもの、御家附の方と少しも變りはありません。御子様は御坊様御二人、御嬢様御一人、近く御四人になられる様な御話です。御しとやかな奥様ぶりに學生時代の風は少しも御見えになりません。

島田艶子様(松村)

御實家から程近い島田様へ御嫁ぎになり、御二人の御子持になられました。御良人様はよく那須山麓の地所の御見廻りに御出かけになるので、姑御はなし、御無人です。なかゝ御出かけになられぬさうです。「相變らずの威勢もので」とは御父から直に伺ひました。樗牛全集やヅワイオリンはどうなさいまして。御子様方の御召物を御仕立になりました。

黒須千代子様(中村)

「私は黒須です」と仰つて尋ねて下すつた時、随分ハイカラすきで入らした千代子様とはどうしても思へませんでした。御卒業後女子大學に御入學と伺つたものですから、御容子を偲んで居りましたのに、御子様は御坊様御一人ですが、もうぢきに御にいちやまと御呼ばれになるでせう。以前の千代子様とは御風俗から御心入れまで御變りになつて、家事に御盡しになる御容子は本當に感心いたしました。昨年の暮まで浦和に御住居でしたが、今度は岩槻の方へ御引越になりました。志村いつ子様(中川)

十七を頭に六人の大子持です。御祖母様と呼ばれるのも遠い未來ではありますまい。朝から晩まで子供を吐つて計り居るのですもの。修養も何もあつたものではありません。夜は裁縫を出しても、本を出しても、十分いたしますといつもいびきになつてしまふ仕末御耻しい様です幸ひ浦和に参りましてから食も進み、大分また肥りました。

#### 第四回卒業生消息

のも知らないでゐることがございます。

栗原様 時折停車場で目にかゝります。お互様に時をきつた仕事を持つ身には、お會ひしながらも、ゆつくりとお話する事も出来ないのを、不本意に思ひます。併し御元氣をうなのは何よりと存じ上します。

鹽原様 にも講習にお出かけの時、お目にかゝりました。お變りもない事と存じます。

馬場様 お三人のお子様のお養育の傍、あつとめは容易ではない事とお察し致します。昔に變つた御元氣さてあればこそ、よくあつゞきになるのだらうと存じます。

遠藤様 其後は如何お暮してございませう。やがてお子様も、お母様のお若い時のお活潑さをお眞似になることとございませう。何時もながら、テニスにメヌエットに聯想が馳せます。

大越様 お子様はお幾人におなりになりましたか。フットボールを頭に戴いての長廣告は、今なほ記憶に鮮やかでございます。當時の才媛今將た如何と申し上げ度うございます。お暇の折には御消息なりとも、ちとお筆に遊ばせ。

又しても、題目に相應しない記事を書くのを、申譯ないと思ひます。かねて御無沙汰勝ちの私は、皆様の御動靜をよく存じ上げる事が出来ません。各級の方々に願ひをした消息が、今、私の机の上に堆高く積まれて居るのを見るにつけても、自分の怠りが今更うらめしくなります。仕方がない筆の走るにまかせて何か書させよう。

竹内様 母校の寄宿舎のお世話を一手に引受けて、毎日閑な様な忙しい……會務を執つた方が、何誰も感じて居らる……生活をしてゐるらつしやいます。そうかと思ふと、一方には園藝やら割烹やら、畑に出たり、お勝手入りをしたり、といふ風です。併し御健やかですから、御自身は無論、生徒や何か周囲の人々は幸でございします。我學校の爲めにも、どうぞますます多幸ならんことを祈ります。

成澤様 やがてお三人のお母様とおなりでせう。元氣なお顔を、本校にある高等科の御授業の折々に、拜見します。昔からそうでしたか知ら、非常に座談のお上手な方ですね。何時も面白いお話を、次から次へとお話し下さいますので興に乗つて、火鉢の火の消える

平林様 今年の雪をみすゝかる信濃に、何と御覽じましたか。お馴れになつてはさほどにも思召しますまい。在學中交渉の多かつた丈け、床しく存じ上げます。最早雪も解けてお便りも届きませう、梅花訪づるゝ風にもよせて、お洩らし下さいませ。

兩角様 大阪へと丈けて、ソヨとお便りだにも、承りません。音楽家と承ります御良人様との合奏に、お暇も御ありになりませんか？

糸雅様 まだ宇都宮にいて、せう。最うお子様もお殖えになりましたでせう、否御相續人がお出来になりましたでせう。お奥様振りなり、お母様振りなり少しは浦和にもお見えなさいませ。

針谷様 去年の夏休みに、御良人お子様御携帶でお尋ね下さいました。非常な速力でお話になりますので休課中の晝寝になれた私の眼と耳は、お相手する敏捷さを持ち合せませんでした、お歸りになつた後は、烈風に吹きまぐられて呼吸も出来なかつた後の様に、ホッと致しました。其後御病氣の様に承りましたが、もうおよろしいことと存じます。

本橋様 未だに愛媛にゐらつしやいませうか。お子

息様が、もうお十一にもおなりになる事を思ふと、轉  
た同級生諸姉のお皺の数も想像が出来ます、エッ毎日  
鏡を見てたら大抵わかれそうなのだとすつて、成程  
そう承れば、そうでございますね………

笠原様 よくお子様をお連れになつて町をお歩きに  
なるのに會ひします。お元氣は昔しの通り。併し姿  
にはあまりあかまひにならない様です。

新様 大里でお醫者様の奥様としてお忙しくお暮し  
でせう、數學は昔からお得意、お藥りの目盛りを若し  
遊ばす様でしたら、それは確かなものでせう。呵々  
松浦様 慷慨家!! 今は何をお慨みますか、それと  
も御幸福な生活にすつかり感謝しきつてゐらつしいや  
ますか、ちと御消息おきかせ下さい。

鈴木様 圓滿なお母様振りが想像致されます。お姪  
御様を経て、御動靜承り度いものです。

松浦様 粕壁でやはりおつとめ、元老株として振ひ  
てせう、どうぞ斯道の爲め益々御健康ならん事を祈り  
ます。

天粕様 去年大宮の水川神社の大祭の折、計らもず  
お目にかゝりました。昔お思ひ出しになりましたか、

つくつくと生徒等の様子に視線をむけていらつしい  
ました。

萩原様 昔ながらの端正な御容姿は、今なほ羽生學  
校の内外にお見うける事が出来ませう。學課生とし  
ての御活動振りは忘れられせん事の一つ。

金子様 時局で御良人様のお仕事は、大したものて  
おありになりませう、奥様として、お母様としてお振  
ひになるのは眞にこれからでございます。教生室高  
等科の教室での生活は時折はお思ひ出になりますわ。

若守様 御不幸の様に承りましたが、詳しくは存じ  
あげません、どうぞ時には氣晴しに浦和へでもお出か  
け遊ばせ、昔覺えて學校でも一巡なさると、すつかり  
お氣がかはります。學科生室の一隅に哲學者然と控  
えておいてになるあなたが、一番似つかはしいのかも  
知れないと存じあげます。

中村様 おしとやかな、物靜かなお言葉つきなり、  
益々奥様、お母様としてお似合ひの事と存じ上ます。  
東京のお暮しにも、お別れになつて、すつかり江戸つ  
子でゐらつしいませう。

木村様 東京の本所におつとめ、御熱心なのは、

誠に感じ入る外ございません。學校での會合に大抵の  
場合あかゝしにならない頼母しい方です。

佐竹様 御熱心にかけては木村様以上でせう。また  
江戸馴れておしまひなのもお劣りにはなりません。

御經驗に磨かれた御意見を時には御寄せ下さい。

石井 半生を用ゐなれた中村の姓を捨て、改姓致  
しました。そうお驚きになりますな、やつぱり女の子  
だと幼い時分から思ひ込むものですから、男の子に  
まけない様に、男の子のつもりで、など言はれた事  
は、半面に女だけれども、といふ感を強められたとも  
存じます。そのくせあんなにお轉婆だつたではないか  
と、昔の茶目仲間の方は仰しやるでせう。然り今でも  
お轉婆丈けはやめられず、瘦世帯持ちには似ぬ暢氣さ  
で暮して居ります、以後お見捨なく更に御最負の程お  
願致します。

## 第五回卒業生消息

今井よし子様 只今東京下谷根岸六十六の洒落など  
ころにお住てあらせられます金曾木小學校に御つとめ  
て御良人様の御やさしいと申し上げるだけでも御うら

やましい様ですふさ子様と今年三つのそれは、御可  
愛らしい御嬢様御父様をつくりすから御主人様が下  
にもおかぬ御愛し方です昨年八月御うかゝりました  
ら御留守で失望いたしました。

松本つね子様 只今神戸に御住居御子様のない御氣  
樂さに學校に御つとめのその暇はいつも御良人様と京  
見物明石見物活動見物それからビヤノは益々天才を發  
輝されて御見事のもの御姿もいよ、御美しくなられ  
ました昨年一月一寸御尋ね下さいまして八月には是非  
と約してやつぱり御寄り下さいませんの。

勝田くま子様 只今漸止に御出で、御つとめてす相  
變らぬ御やさしい方ですが病身になられた様で御氣持  
のいゝ事が少ないとか御健康を祈つて居ります。たし  
か御令嬢様六つか七つ御一人様どんなに御可愛いてせ  
うそしてゆつくり御育ちの事と御よろこび申し上げま  
す中々御出ましも六づかしげです。

木島ひさ子様 浦和に御住んですが少しもその後御  
目にかゝりません、御令息様御二人御令嬢様と御三方  
のお母上様でゐらせられます。

鈴木とく子様 當町に御住居て三つに御なりの御令

息様を未來天晴の御方に遊ばさうとそれは、御注意をとく間なく御育てゐらつしやいますまるく、太つた方て叱られる事も泣かせらる事もなくゆつくりお育ちてすそしていつても御家内がきちんとしてゐられます流石は田島様です。

倉持さよ子様 只今の御尊名忘れて失禮いたしました大宮に御つとめて昨年五月御目にかゝりましたら御子様なくて御淋しいなど仰せでした。

町田つる子様 矢張り只今の御名を失念いたしました。昨年五月母校で御目にかゝりました昔のまゝ御子様はと御伺いたしましたら男と女など仰せで大笑いたしました御住居の近所は中瀬の菜とて有名なさうです味がそれは、いゝのださう一度是非菜の御馳走に上る約束でしたが何の事です。

杉浦りん子様 いつも、御元氣で結構で御座います森本妙子様東京に御つとめの様です御かたづかれて御一人子様を残して御主人様御なくなりなさうです御氣の毒の事であります。

野坂はま子様 東京の柳北小學校に御つとめとかその後二三年ちつとも御目にかゝりません。

とと察し致します。相變ず熊谷女學校に敏腕を振はれ管視學殿をお驚かし申せしとか女教師會の折に伺ひました。お家には可愛い、お嬢さん二人で御歸へりを待て入らつしやるのにお母様時々男の子が欲しいなんて御不足を申すの夫れが非常の日連様御信仰。御利益あつていつぞや御目にかゝつた折あめでたい御子様私早速きつと坊ちゃんですと申ましたの。これをお手にする頃は一人御利益をお感になつての御信仰と察します。◎田島たま様、所澤にお住居此程お子様御生の由承りました。◎加藤すゞ子様、東京芝區の學校にお務御勉勵の由お家にあつて御兩親に事ふるに痒き所に手の届くやう身も心も捧げての孝養と承はり敬服致して居ます。◎栗原とく子様、卒業以來去年始めてお目にかゝりました。此頃は御兩親のお側からお通て其爲か御身が大そう御ゆつくりと大きくなられたように御見受申ました。◎篠崎ちい子様、御良人が東京の方へ御務め遊ばすやうにおなりとか只今は御實家に入らつしやるそうに伺ひました。◎福田さよ子様、此方にはいつも敬服して居ります一里以上の道を與野校に通はれ雨の日も雪の日も一度も遅れた事なくお休みも二三日に

黒澤さち子様、群馬から本縣兒玉長幡の學校に御つとめて眞面目に熱心なのは有名であります御令息様たしか五つでゐらつしやいます。

そのほかの方は少しも御様子存じません。

私は例により子供二人かゝへてごたゝくらくらして居ります二人共女だけに賑やかで御座います。(田代松)

## 第六回卒業生消息

皆様御機嫌よう。秋庭が書きますのびつくりなすつてはいけませんよ實は突然幹事の方からの御手紙で皆様をお驚かし申すの在學中からの不能者。筆も走らず御交際もありませんので少々困りました。夫かといふて御ことわり申すのも如何と清水様を力にお受をしてここに、廻らぬ筆をとりました。私の至らぬ爲にお洩した方も澤山御座ますがどうぞお許下さい。順は卒業生名簿によりまして舊イロハ順に致しました。

田村米子様 米子。不思議に思召方も御座います。さゆうかきやうかつて在學中から問題のお名前。さゆうをお厭になつてのいと、あやさしいお名にお改め

過ぎぬとかこれによつて萬事推しはかられますが君が熱心努力の効果は果して大にして比較考査の結果は常に上位を占む由我クラス否斯道の爲大に喜ぶべき事と日々お噂致して居ります。◎藤野とら子様、女教師會の折お姿を拜してアツと思はず聲を立てましたのよ所謂女教員のタイプから抜け出たお姿。去年十月の御婚禮の御様子さこそと忍ばれます。島村様と仰しやいます。東京淺草材木町にお住居なさうですが何故か詳しい御様子お知らせ下さいませんの。◎黒澤はる子様、當校でお別れしてからとんとお便りありませんの只風の覺束なき便りと御良人の變りありませんの御言葉で兎に角御無事の事はわかりました。岩槻に移られてから大分子福者にお成りのやう伺ひました。學校はおひきになつて専らお子様の御愛育にお骨を折らるゝ由學校をお退になつてよう御座いましたのね今年のやうな風では人間郡の二の舞で幾度か風にお身を弄さる事でしたらうといらぬ心配まで致しました。◎福田花子様、いつもながらの御様子なるもなつかしく存じます。あ二人のお子様を御養育遊ばされつゝ出でゝは御立派にお職務をお取になり主義ある御研究を積せられ専心

兒童教育にお盡し遊ばさるゝに視學殿も御感歎遊ばされしとさもあるべき事と存じます。◎木原クマ子様、學校をおやめになり家事に御心を注せらるゝ由。昨年十月當校に品評會展覽會の開かれた折御揃で御出になりましたたつて私御目にかゝれなくて残念なこと致しましたの、其の折の御様子今も噂に上ります、スラツトしたお身におみ帯の結びも奥様らしゆう。昔の筒袖に裾短かなお袴荷物かゝえて大跨に附屬へ通はれしお姿はいづこへ行いたやらと。◎岸野様、オ、違ひました池上様とお仰しやるのですつて今朝ほど伺ひました。二十頃に御結婚遊ばされたのださうです。さぞお可愛らしいお嫁様になれた事でせう。御主人は郡役所へお勤めださうです。◎瀬山やい子様、卒業後七年振で目にかけましたの。在學中から圓満な瀬山様、少しのお變りもなく益々御圓満にお五つになる坊ちやんお一人を愛てつゝ秩父嵐を物ともせず教への庭にいそしんで居られます。◎關梅子様、御様子よくわかりました。が東京で土屋様の程近くの學校にお務めと伺ひました。◎清水ふさ子様、まあ皆様よろこんで上げて下さい、お子様も二人までなくされた後にお生になつた赤

ちゃん日に御成人。御誕生も來月に近づいたのであけしの髪ものびたも女のお子らしい下ぶくれの愛らしいお顔を毎日御見せになりますの、お母様は御眼の中へ入れても痛くはなさようにお見受申す、秋庭は相變らずです然し二人の母となつたのが變て居ます。不能者は學校に家庭に手も足も出ず只日一日と徒らに送るのみで體だけは昔ながらのガツスリと重みはありますが心は更に重心を保たず二兎を追ふ者の諺に洩れません。とうぞあはれと思召すお方は御同清下さい。では皆様之れて筆を擱きます。づいぶんお體を御大切に。

### 第七回卒業生消息

卒業前から引きつゞき彼のために色々とお盡力下さいました方々が今度皆東京の方へ御出になりましたので私が同級のお消息を母校へ御知らせ致すことになりました。常々御無沙汰勝である上卒業後八年にもなりますので皆様の御様子も精しくわかりません。その上御轉任御退職の方々も多く御座いますのでこゝに記しま

したのところがた方も御有りと存じますが何卒御許し下さいませ。(水谷祥)

◎廣瀬奈様 昨年東京府下瀧川へ御轉居遊ばされて只今では御子供の御世話瀧川小學校へ御勤めの由。  
◎曰倉はな様 引きつゞき大門小學校へ勤めてす。いつも理想的のお母様と存じます。  
◎高橋信様(舊新井) 新倉にお勤めてすいづや御目にかゝつたときよいお母様と御見受け申しました。  
◎齋藤いな様 小室にお勤めてすいつも眞面目な先生と存じます。  
◎島田千嘉様 いつも元氣のよい事同級中一番お若く思はれます近頃は東京通ひは如何で御座いますか。  
◎山田あや様 卒業後川越にお勤めなかく振つてお出ですいつぞや御目にかゝつた時今年も卒業生ですとの事音楽には相變らず御熱心のやうです。  
◎渡邊英様(舊木村) 元狹山にお勤めてす。相變らずの御元氣と存じます。  
◎宮崎とよ様 近頃は如何なさいましたか。  
◎北郷りう様 荒木にあつとめのやうですいつも御元氣に活動されていらつしやるやうです。

◎坂部かつ様 長野にお勤めのやうです相變らず樂觀主義で音楽生花に御熱心のやうで。

◎古橋みす様(舊瀧) 昨年お母様になられたとか其の後如何でいらつしやいますか定めしおやさしいお母様と御想像申し上げます。  
◎横田かめ様(舊稻村) 中條におつとめの由いつも御熱心との事です。◎大橋きくろ様 お母様の御膝元に御出ていせうと存じます。  
◎鹽田すま様(舊品田) 熊谷女學校にお勤の由お母様となられたとか定めしあいそがしいでせう。  
◎田宮なみ様 妻沼にお住居のやうです。◎本原みね様(舊原) 只今ではどちらにお住居ですか。御子様も御成人の事と存じます。  
◎山崎ふさ様 本庄にお勤のやうな在校時代から御想像申上げて眞面目の先生と存じます同級の方が御近所で羨しう存じます。  
◎榎田いふ様 本庄にお勤めてす山崎様と御近所で御羨しう存じます御二人の御活動振御さつし申す。  
◎染野みさ様(舊清水) 秩父へ御出とか其の後御家庭の御仕事に御多忙と存じますが折々御様子御知らせ下

さい。○飯野八重穂様 長若にも勤めてすいつもニコニコの元氣のよい先生と思はれます。

○齋藤ふて様 御子供衆さだめし御成人の事と存ます

○小川のお様(舊加藤) 豊野にも勤めのやうです御子様は如何定めしやさしいお母様と存じます。

○戸張さく様 八木郷にお勤です其の後御身は如何でせう充分御大切に ○中島喜見様 大澤に御住居のやうです。○細田よし様(舊加藤)退職後御家で御弟子をお取りになつて裁縫等を御教とか定めし御發展遊ばしたてせう。

○松井ぬい様(舊吉川) 東京府下澁谷へ御出との事其の後お母様になられたとの事ですが只今では如何遊ばしていらつしやいますか。

○中村常様 福島女子師範の先生相變らず斯道の爲めに盡しの様お休みには大低お母様のところへ御歸への御子様です。

○小出さき様 九州のはてでお勤めてす山の中の埼玉縣へ海の風時にももらし下さい。

○大森里様 金澤高等女學校にお勤のやうです。

○國分君様 御出産の時から引つゝいてお休職只今て

は家政の事と御子様のお世話にあつとめの由大きな可愛い坊様です立派なお母様です。

○逸見義江様 尾田蒔にお勤のやうです相變らず圓滿な將軍的な先生と存じます。

○中川文英子様 愛知の方の御子様時に皆様におもらし遊しては如何餘程變られたと存じます。

○淺井たか様 昨年御退職になられて東京へ御嫁との事御良人様が洋航なさるので御一所に御出かけとの事で只今は盛に英語御研究との事です。

○小池かつ様(舊本橋) 東京府下由井村に御住居のやうです。

○松山第一にお勤めてゐます。御蔭様で無事に暮してゐます長女は本年四月に一年に入學致すやうになりましたいつも若い氣でゐますが子供の入學すると思ふところ年老いた氣が致しますしかし當校には女師卒業生が三名ゐますからいつも昔語り致してゐますので其の時だけは學生の様な氣が致します。同級の方が一人でもいらしやればなほ更と存じます、校務はいつも多く御座います來二月には郡女教師會があるとの事です、然し高柳先生の努力主義をいつも守つて大につと

めてゐますから御安心下さいませ。

### 第八回卒業生消息

鳥兎匆匆歲月は流るゝが如しか申しますが、私等も大正の御代の七年の春をむかへて、卒業後七年目の春をむかへたので御座いますね、皆様にもいつも御無沙汰のみいたしまして申しわけ御座いますね。いつもこの消息をかくやうにと母校の先生から仰せられますと身のいたらぬ爲か、甚だ寡聞で全部の方否半ばの方の御近況すら存じませんの何とも申わけなく赤面いたすのみで御座います。今回も其例にもれませんでした極めて少數の方の御近況のみ存じません。甚だ勝手がましうは御座いますが、今後何ぞお變りの事でも御座いました折にはどうぞ御知らせ下さいますやう切にお願ひ申す次第で御座います。

○右野けん様 先日御便りを頂きまして、今度「東京府下大井町倉田三二四二」へ御家族皆々様が御轉居の由で御座います、其後御すこやかに御いての事と存じます。

○中島美枝様 昨年中は大分御病氣でゐなやみてしたが本年は是非御丈夫におなり遊ばして、例の健實な御意見のもとに、斯道の爲御盡力の程念じ上げます。

○諸市子様 秩父大宮小學校にあつとめ遊ばれます

○發發智たつ様 「香川縣高松市天神前」に御住ひ遊ば

されます。其後無事でいらつしやいますか、ほんとに昨年の夏は是非お目にかゝり度いと思つて、高松港につきました時にはどんなにか思ひなやみましたが、御住居を存じませぬ爲とらゝお目にかゝれませんでした。栗林公園を見物して、天神前あたりは通りましたものを、くやんでも仕方がありません。今度歸りました時にはきつと伺ひいたします。

○小林益代様 矢張り昔の通りの益代様でよくおいて下さいます。お近いうちにお芽出度き事のおありの御様子。これは益代ちゃんには内所々々。だまつていらしやいと云はれたのですから。

○熊谷静様 お母様となられおせわしくいらせらるゝ事と存じます。

○元田花様 昨年中御病氣でいらつしやいましたとの事を田村先生からお伺いしてびつくりいたしました。

お見舞も申しまして失禮いたしました。

◎石井てい様 新家庭の御様子御もらしの程を。

◎境野保志様 昨年御退職遊ばされました。其後どこに遊ばしますや。

◎加藤みね様 御忙しく御家庭にて、良妻たり、賢母たるの道においそしみの由御喜び申上ます。近いうちに詳しく御近況をおもらし下さる由楽しみにいたして居ります。御住居は、入間郡金子村で御座います。

◎富田しげ子様 「満州長春東十八區」におすまひです。展子様の御様子なりちと御もらし下さいませ。

◎今淵正武様 御すこやかに栃木足利高等女學校におつとめ遊ばれます。

◎小森谷春中子様 春中子様といふ名前前で、あゝ中島さんの御事よなと御うなづき遊ばれますやう。

昨年の春「東京府下上目黒九〇六」におすまひの御方とお結婚遊ばされました、文金の島田高うさしうつむきたる春中さんの御様子は是非お目にかゝり度う御座いました。旦那様は、まだ學校に御通ひ御勉學の由。春中さんが晩の御献立は何に致さうやらと御心くだかれでの御馳走つくり。濃やかな御家庭の御様子をまたお

きかせ下さい。そしてこの欄をいよくにぎやかにして下さいませ。

其他の方の御様子はさつぱり存じません御丈夫でいらつしやるかしらと時々心にかけては居ります。おひまの節には是非一筆なりとも頂きたく重ねて申し上げます。

終りに私は無事に附屬につとめて居ります。昨年の夏は主人と同道して主人の郷里の香川縣までいつて参りました。途中京都、奈良、桃山等見物して参りました、佐藤先生に是非御目にかゝる積りで居りましたが、時局の關係上止むなく御目にかゝりませんで、これが一番残念で御座いました。

次に母校の伊藤先生は、昨年の秋から御病氣でいらつしやいました。一時は大分御わるくいらつしやいましたのです。それで實は皆様御名々に其事を御通知いたし度く思つて居りましたが、つい其事もしませんで申わけ御座いせんでした。今淵様など大分御心配せられて、同級生にどうかして傳へたいと仰せられておいて下さいました。

幸先生の御病氣も日増しに御快方に向はれて居らせ

られますから御安心下さいませ。

次に佐藤先生は昨年夏「京都市上京區塔の段毘沙門町四三六」に御轉居遊ばされ皆々様御すこやかにいらせられます。

次に藤巻先生は、昨年御良婿を御むかへ遊ばされ、「東京麹町區三番町七一」に御住居遊ばされます。御上京の折は御尋ねなされてはいかゞ。

### 第九回卒業生消息

◎大川よし氏 其の後御變りありませんか。浦和の實家へも時々御歸りてせうが御目にかゝつた事が御座いせん。義務が明けました來四月頃は御主人様の方へでも御越しになりますか。

◎高柳ふみ氏 度々の講習に御出なされての御研究振には誠に感心いたしました。いやが上にも御研究を積まれて田舎の隅々に散つて居る同級人を御指導下さい◎竹内不器氏 近頃は太層御丈夫で二部教授とやら申して午後おそくまで御精勤で御座います。おそくも次號までには御めてたい知らせを致すことが出来るだら

うと思つて居ります。

◎西原錦子氏 可愛い、坊ちゃんの御母様となられてからは御留守をばあやさんにまかせてやはり大宮校に御つとめて御座います。去る展覽會當日には御目にかかりましたが相變らず御若くていらつしやいました。「坊やはいつもお隣のをば様にお湯に入れていたかくのよ」と若お母様が浮べれますね。

◎高山まさ氏 其の後はやつぱり御様子がわかりません。來四月頃は又御出浦なさい。今度は何もいたしませんから。

◎多田嘉津氏 眞赤なほこりが遠慮なく吹くので折角の……も形なしと御こぼしの様拜しました。歐洲戦争で飛行機研究の方が忙しくてなど粹なことを申越されましたが學生時代の熱は御變りありませんか島崎様どひまな放課後はしんみりと打解けたお話をなさるとか羨しう御座います。お話しの一節なりと伺ひたいものです。

◎斯波嘉子氏 先日休職になりなして只今では可愛い、憲一さんをお相手に所澤の御宅に御主人の御世話をなすつて御出で、御座います。嘉津子の御話に大部よ

く御成りてはありますがゆつくりと御静養なすつていらして來四月頃暖くなつたら海岸の方へても轉地なさるとか。嘉子様にかうした憂き目を見せるのは何と云ふ事でせうけれどもさすがはクラスの一人堅い決心を持つて前途に光明をみとめながら何もかもさとして御暮しなさうです。皆様級友の爲に、その事を御願下さい。

◎島崎さよ氏 汽車で通ふので時間の利用がうまく御成りですつて、内に外に中々御働きの様です。お正月には奥様振を發揮されて御忙しかつたさうです。近頃はすつかり土地になれて飾らぬ乍ら興味ある質樸な人の心ときあひそれが又なく面白くなりましたと。お芽出たいお知らせの一日も早いことを願つて居ます。

◎山本とよ氏 いつぞや爲替拂込用紙に添へた三行半ばかりの御手紙に接しただけで一向に御様子が変わりません。多分坊ちゃんのお守に呑氣な日を送つて御出の事と思つて居ります。

◎須田まさ氏 額田様からの知らせに依つて御住所が漸くわかりました。尙或人から次の消息を承りました正月三日入間川の停車場で拜見した赤てがらの大丸ま

げお召の半コートを召した若奥様のスタイルはすつかり見ちがへてしまひましたと。

◎大木雪子氏 相變らず元氣であつとめてせう近頃大分御修業がつまれて現代を超越して楽しく御暮しなさうです。

◎井上千代氏 この休には加須へ御出になつたとか私も六日に同地に行つたになぜかお逢ひする事が出来なかつたのでせう。次の休には又御出で下さい。今度は是非御逢しませう。

◎松本まさ氏 年賀狀に依りまして御變りないことだけは承知してゐます。御近況はいかに。

◎小山雅子氏 いよいよ年が明けますね、随分早かつたと言ひたいが待つ身は長う御座いましたでせう。早速あちらへお越し下さい。

◎針谷よし氏 去る夏の講習には御子様つれての御出席で御座いました。木村先生もあの體操服きた姿は子どもがあると思へんわなど仰しやつて御ほめてした。洋一樣か御母様の顔を見ると御手を出してだつこしたがりですのは御可愛く御成りです。

◎高田みち氏 利根川向ふのためかとかく御無沙汰勝

て御噂さへも耳にしません。御子様の御様子でも御知らせ下さいな大きくなられたでせう。

◎遠井はる氏 歸省中はとんだ失禮しました。御對面の折は御秘しなされてか御口にもすべらせませんでしたしたが近く東京上級學校に御入學の上一層の御勉強なさると或る他方面の方から承りましたよ。

◎堀越ふみ氏 私歸省の度毎に「家の嫁はよく働いてくれる」と御両親様たちが大層な御よろこびださうですとの御噂を耳にします。又近く御母様に御なりとの北風も吹いて参りました。重ね／＼嬉しい事で御座います。

◎奥澤しち氏 とうに京城に御越しになつて家族はそろひて楽しく御暮しでせう。

◎目崎瑞子氏 巢鴨へ御轉居後御無事で御暮して御座いますか。木村先生の御宅へ上るとよく御噂が出ます。

◎額田のぶ氏 御校の黒澤先生が御出浦の折御まめに御働きの事は伺ひましたが御近況はわかりません。第二の故郷を大分御見限の様ですね。

◎會田きみ氏 其の後御病氣は如何ですか。

◎増田まつ氏 義務明けの後には御出浦下すつて田舎の

呑氣話でも又御聞かせ下さい。今度は御子様つれて御ゆつくりと。

◎萩原かつじ氏 御變りなく御勤めて御座います。

◎戸口みな氏 當校の平野様と時々御噂します。相變らず大河南の御寺住居に満足な日を御送りです。

◎向野原こと氏 この夏休みには針谷様と御一所に唱歌體操の講習に出られ學科の他に種々な事務まで御取になつて随分な御骨折の様で御座いました。

◎鈴木孝氏 敎生參觀の折は昔に變らぬ御體格で熱心に修身敎授を御やりてしたとか、前號で御伺ひした御答がほしう御座います。

◎新井タマ氏 夏頃は御體が悪くて永らく御休みしていらした様な御話でしたが御經過はいかがですか。

◎山中アイ氏 御無沙汰して居りますが御變りなく御過しますか。お家でも中々御忙しいでせう。

◎金子さぬ氏 御卒業後は一度も御目にかゝりませんか御健かに京都に於て畫筆に親しまれ居ることゝ存じます御歸省の途中には御立寄下すつて御高説の一部なり御もらし下さることを御待ちして居ります。

◎繪三澤榮氏 今度東京とやらへ御出での御噂ですが

事實ですか。中々大きな理想を御持ちの様ですがどの方面に生き様となさいますか。

◎種村しげ氏 やつぱり御研究におこたひなく其の日の其の日をせわしく御暮してせうが暇を見て御近況を。

◎鈴木巳代氏 都の風にお染りて一層御美しうなられた事でせう。章代ちゃんも近頃は桃太郎さんなどの遊戯をなさる様になつたとか、御母様たちの御よろこびはどんなで御座います。

◎中原きよ氏 調宮の日あたりよい御家に御無事に御暮しです。英典様もうお四つ中々の御利口者で何もかもよくあわかりです。お母様のお歸りがあそいとばあやさんと御迎ひに出なさいます「坊やあしたは日曜よ」と御母様が仰しやるとそれはよろこびになります。こうして日曜には英典様の御守で御座います。

新井も變りなくと申すと無事結構の様ですが毎日同じ事を繰返して過ぎるだけ一向に結構な事もありません。時には不平もあり不満もありますがやつぱり昔のまゝの呑氣者で楽しくとまでは行きませんが體だけはいつも丈夫で過して居ます。

皆様もう義務も間近くすみますね。長い長いと案じ

たのも夢の間で全く月日のたつのは唯早いと云ふより外はなく今となつてはあまりに早かつた過去が恨しう御座います。顧みると同じ學びの園から同じ目的を持つて分れた三十六の級友も教職にあるものは二十九となつてしまひまして。追々心さびしくなる様ですがこの後も出來得る限り縣下教育の爲否國家教育の爲に盡さうてはありませんか。來四月頃何ぞの會でもありましたなら御互に都合して出席し五年の昔にたち返つて大に話させう。終りに時々本部に御消息を御知らせ下さる事を御願ひします。

### 第十回卒業生消息

月日の小車は、流るゝ水よりも早しとはよく人の口にする所なれど、實に。實に。我等の新卒業生と云はれしも、はや四年の昔。オールドの仲間入も、そろそろと致し居り候。今度當歳友會にて女教師會創立し、明日は其の第一回總會有之候へど、其の女教師中古き方より三四人目にあたり居り候。古いかな妾。いかに肉體は古くとも心は文明のおかげによくひらけ行くな

れば、たのもしけれど、しからざるを如何にせん。世の荒波にもまれ、かどの取れたる妾にはあらで、ひねくれにひねくれ、正しく立たするも難き者とは相成り候。今度の消息も御手紙にて御依頼有之候へど、少々病床にありし様にて、御手紙差し上げて、皆様の御様子かまほしくは候ひしが、其のいとまも無之候てかへすがへすも口惜しく候へ。さりながら聞き及びし方々の御様子つたなき筆にまかせ申さんか。

第一に御聞かせ申したきは、こぞの夏、叔父上様（松本先生）に御會ひ申せし事にて候。早く來らるゝ事を耳に致し候ものなら皆様にも御知らせ致せしを。前日に知りたるが残念にて候ひき。其の時集まりし同級生は、龍前さんと根本さんと私の三人なりき。寄宿舎にとまれる方々と相談の上、しぶ茶を差し上げ、ハワイ、亞米利加のめづらしき御話承はり申し候。先生には、さぞ變られし事と思ひ居り候所、意外にも昔のまゝにていつものながらの御話ぶり、妾等在校時代に立ちかへりし心地致し候ひき。妾等同級生の御住所もめいめい御さゝ取り御記帖なし下され候。

去る正月にはわざわざ途中下車までなし下されて

たづね下されし。◎石川様 厚く御禮申し上げ候。世は物質のみたふとばるゝに、昔の友を忘らて御たづね下されし君よ。うれしさ言の葉にもいひつくしがたし。中には家のそばを通らるゝに立ちよりもせぬ友ある中に、君は。君は、君は。其の時の御話によれば。◎山中様 には御病氣との事に候ひしが、其の後は如何に御座候や今年の寒さは又格別に有之候へば何卒御身御大切に、一日も早く御恢復あらん事を。◎相良様 御め出度き御後のひだちあしきとの御事、其後の御様子は如何に御座候や。早くおなほりなされ、學校の事に育兒の事に、いそしまれん事を。◎福島様 あ御免下され徳島様には、遠き御空にやはり、斯の道のために御つくし居らるゝとの御事、風のたよりにて承知仕り候へど、近き御様子御さゝ申し度候。◎秋山様 さぞさぞ御寒ささびしく御座候はん。先日御息様御病氣との御事、さだめし御心痛の御事にて候はん。其の後は如何にし候や。◎龍前様 先日は御手紙難有御禮申上げ候。いつも變らぬ御げんきなる御文。文見たるに思ふは、かの消燈後の娛樂室の一件にて候。一件の一人の。◎岡部様 は近ごろとんと御様子さかねど

やつぱり哲學むいたる事御研究にて候か。◎吉田様  
まことにまつたる三月も眼前に到着致し候。君の心中御  
察し申上げ候。早く〇〇の日を聞かまほしく存じ居り  
候。◎馬場様 には、此の度御目出度かりしとか、御  
祝申上候。又此の三月にて御やめとやら其の後はいつ  
こにあいてなされ候か。◎吉岡様 昨日は、實に實に  
意外にて候ひき。きくなれぬ御聲にふりむけば、開札  
口(浦和)に貴女の御顔。色々ときいもし御話も致した  
くて呼びとめ申し候へど、言葉の出でざる事にぞをし  
かりし。やはり吉岡様は吉岡様に候ひき。◎篠崎様  
も御すこやかに御勉強との御事。◎高田様 にはたび  
／＼當地に御母上様と御一所に御出なさるゝ事に候へ  
ど、一度も御より下されねど、みぐるしきあばらやに  
てもしふ茶一ぱい位は差し上げければ、ぜひ／＼あ  
たちよりを。

林様否々小林様おたより無之候へど、新ホームの御  
様子ちとおもらし下され度候。◎大貫も御様子御知ら  
せ下されてもいかりはいたさず候。◎根本様 とは毎  
週毎には必ず御合ひ申し候。同學年受持の事なれば、  
何かにつけて御相談申し居り候。他の御方々には何の

たよりも無之候へど、御變り無御座候や。梅花ほころ  
び黄鳥でさへも、み山より音づれば、皆様も御文なり  
と梅花にあらぬごんざに御つかはし下され度候。先は  
亂筆にて御免下され度候。(三月一日夜記す。ごんざ蟲)

## 第十一回卒業生消息

いつもの通り級消息を書きますに就て、先づ十一號  
の雜誌をとり出してよみました。そしてそれ以後の御  
變りと存ぜられる方々の御上より筆をとりはじめます  
◎目出度い御變りごとの第一として中村先生の御消  
息より申上げます。すでに御通知申上ました通り、舊  
臘十二月十日が御成婚の御日、御當日の御模様もさ  
そとしのびまつらるゝ、晴の日の御みうつしる、去る  
日御伺ひいたしました折に拜見いたしましたして、この光  
榮をば、皆様にお分ちいたしたくしみじみと存じまし  
た。御良人の御都合上、田端邊に御移轉の由、先頃承  
りました。わきてお寒いこの年の冬を、とくに朝と夕  
の刻との御通ひはなかなかと存ぜられます。昨十月に  
中西先生の遠く越路へ御轉任、つづいて中村先生のこ

の度の御轉任、たより少くなつた様の感じは他の皆様  
より在浦の者のいと痛切で御座います。それもいま  
までを特別な境遇に居りましたからこそ、今になつて  
味ふものゝ、大方の皆様には三年以前に於てより強く  
お感じていらつしやいましたのでせう。

五月の女教師會頃には、お話の半であられた八須様  
の御慶事は、八月休み中に御目出度く御成立で、柚木  
様と御改姓遊ばされ、今は蕨町にお住ひて、笹目村へ  
御通勤で御さいます。往復途次の村の子供等は、雨の  
日風の日にかはらず、きつと／＼路に出て八須様の  
送り迎へをして居る由でございます。お優しい彼の君  
にさもありなん。と思はるゝ御様子。又してもお人柄  
をしのばせられます。御家庭にこの御内助のほどもい  
かに御うるはしうゐらせらるゝかと御察し申上ます近  
くお母様にならるゝとか、お噂で御座います。

次は最近、岡田様よりの御たよりと、高橋様の御上  
に御慶事があらせられました。と。御良人なる御方は  
第二松山小學校長であられます。謹んで幾久しき千代  
の壽を祝し上げます。萩原様には夙くに、太田様には  
この程、御婚約御成立の御由。石原の中島様にも、御

同様の御噂ありと承りましたが、其の後いかゞて御座  
いますか。まだ／＼かうした御目度い御變りあらせら  
るゝ方が澤山ありと存じます。迂闊で居ります私の  
耳へ、どうぞおきかせをいただきたく存じます。

中西先生の御上につきましては、しばしば御たより  
申しあげました通りで御座います。あちらの御様子を  
お知らせの一節に「當地人情極めて素朴にして、中學  
生輩と雖もなか／＼に禮儀正しく……又生活上種々な  
る點に便宜よろしく……」と御座いました。先生の教  
育上の固い御信念を御發揮遊ばさるゝに好適地とあ  
ろこび申して居りました。ところが前號に御誕生を祝  
しました伊都子様が十二月一日に御死去なされたとの  
かなしいお知らせをいただいてうち驚いたので御座い  
ました。先生奥様をとおはじめとして、皆様の御愁傷は  
どんなであつたで御座いましたでせう。でも、お悔み  
申上げました折の御返書中に「自分も子供を失ふた友  
に對し、又生徒兒童の父兄等に對して、眞の同情の足  
りなかつたことを今更覺知いたしました」と。不幸は  
善知識であるとの意を仰せてございました。いかなる  
場合にも教育者との動かぬ立場よりながめられてお出

での先生の御態度に深くも感じ入つた次第でございます。

この度も級友のかなしき消息をかゝねばならぬことを深くかなしみます。彼のお人柄の御容姿の御成績のいづれもお勝れてお出でられた鎌田美枝子様は、のぞみ多い將來をよそに、うらみ深く去夏他界の人数に入られてしまつたのでございました。日頃御強壯の御たちとは見參らせては居りませんでした。卒業の其の際には、榮えある四ヶ年皆勤賞を得られ立派なる御抱負をになはせられて教育會に御のぞみになられました。其の君、僅に一年足らずして病に臥され、其の後しばしば経過のよろしく、これならばと樂觀すべき御容態も示されたとき、ましたに、とうとう結實の秋にもあはれず、無常や無慘。美し花を八月中に散らせてしまつたのでした。御病中の徒然にあかきなされた御文。二枚切手など貼られて送り來ましたもの、よも遺品となつたと知らずながらも大切に文箱に收めてをさました。こんな若い氣分の燃えてゐた彼の人をといひたはしさに、噫々。と長歎息しては泣かれます。

力落して親身の姉妹を失ふたそれよりも、と目には涙一杯にしては語られます。釜井塚、臺藤も一時御病氣の由を承りました。臺様は間もなく御出勤に、金井塚様にはいかゞていらつしやいますか、矢張りやはや御勤務であらせられます。學校のあつとめ、お家の諸事、ましてや赤ちゃんのお世話などで御無理がここにたへになるのではないでせうか。赤ちゃんのおありの今こそ貴女のおからだは何より大切に御座います。お氣をつけ遊ばしませ。

其他の方々にとくにお變り事もさへはべりません。ただ御自身には昨日と今日、今日と明日と、それよりも朝と夕、刻々の氣分の變化にはかくまで夥しいものかと、お感じていらつしやいませんか。

東京では柳澤さんと桑田さんが故々として御勉強、間もなく四年に御昇級、月の桂手折らるゝもあと一年後、もうらやましうも又、ノラクラ過しつゝある自分をふりかへつてはあはづかしうも存じます。北埼玉では増田様は良教育者良妻としてあたらき、賢母としての御資格はいかゞ御座います。近きあたりの御消息が御座いませんで。宮崎様には三つの御責務を立

派に御遂行なされつゝいらつしやいます。瀬山様の御元氣な御活動ぶり、五十幡様の御綿密なるあしごとぶり、豊田様の何時も御愉快にみてる御様子、在校時代とかはりなくいよいよ御長所を兒等の上に御活用と存じ上げます。質朴なる範を垂れての野中様のあつとめぶり、御慕しう存じます。福田様、夏休みには存分三崎で御避暑、もうらやましき限り、其後御家人の御病氣はいかゞ。お看とりの御苦勞を察し申上ります。あまり一人で暢氣した罰とまあ御觀念遊ばしませ。夏やすみといへば、秩父の中村様、諸様、彼の時の御好意厚く御禮申上ります。おかげ様で多年の慣れの地をふみ、三峯の登山を愉快の思ひ出のページに存する事ができました。折もあらば再舉を企てやうとしたのしんで居ります。市川様、藤野様、岡本様、關口様のあ住ひも山の景にお近いので御さいます。秩父にみた山の景を背景として御元氣な四人をのび申します。近きあたりの御消息、あもらし下さることをあまち申して居ります。入間のあ二人の御上にもお變りあらせられませぬか。榎本様。暮の短い時間のおめもじ、ほんとにあなつかしう存じました。せめてあと十分の時をか

してくれましたら、とうらめしう汽車のうごきを見送つて居りました。筑井様との新年のカルタ會、一回の勝負はいつあつた。私が入つて六つの目になりました。でも矢張り大した變りはなかつたらうと、お手紙拜見いたした折、一人苦笑を禁じ得ませんでした。

近い藤の小笠原様、川口の柳澤様、神根の鈴木様何れもお變りなく、たび／＼日曜には御出浦でいらつしやいます。近くも内田さんばかりはな／＼にお出かけなく、其代りあたよりはたび／＼いたします。

あゝも超然と客觀できるものか知らず、思はれた三年生時代の八重さんより、此頃のあたよりををほしてみる貴女にどんなにかなつかしみ多く覺えます。あたよりの度毎に、人にもかうした氣分の漂ひがあるかと味方を得た様に私の心はな／＼さめられます。「白鳥はかなしからずや空の青海の青にも染さず漂ふ。」と。

白鳥の不安と悲哀とを感ぜずもの生はあ互ひのぞむところであつても終生得られぬものゝ様に思はれます。浦和でも志村様飯島様はお變りなく、加藤様は、彦と仰せらるゝ坊様のお母様となられ、今こそ純なる母様の愛をしみじみとお味はひていらつしやいます。

はづむ話も御多用の御身なのでいつも中途でたつてしまひがちでございます。最後に私の近況を申上ます。この程母の來浦をやうやう願ひおぼせて七年に近い寮生活を去りまして、今は人のお身の上と羨やんだ境遇が私にもひらかれました。今では母の愛の翼の下につきかり雛鳥になりすまして居ります、家は元浦和病院近所の森かげ。まろうどあらば心からおもてなしいたします。御出浦のせつは、どうぞ静かなる家をおにぎはせ下さるやうあとまりがげの御豫定にてあたねいだきたくまちあげて居ります。をはりに皆様の御身のお心の御健康を祈りあげます。又級の催しにつきまして何時も御信用の上すべてをお任せ下さいましたことをこの紙面をかりて一言御禮申上ます。(草戸の手)

第十二回 卒業生消息

寮の中院にハクレンの音がふくらむ頃、希望に満ちた胸をおさへながら、うら悲しい氣分で感謝の歌を唱ひましたのもはや二年の昔となりました。この雑誌の出る頃は三年目に足を踏み入れることになります。

さう思ふと互にくずくもしてゐられません。働けるだけ働かせよう。又例によつて、皆様の御消息を申し上げます。

(九六)

○關根久様 何時御逢ひしても御元氣な御方休暇の遺傳と教育は如何、中々御熱心な生徒さんでしたね、御熱心と云へばもう御好きな道は随分と御上達なされたでせう。お臈に霞む春の宵に御得意のおしらべさかまほしう……○森川花子様 去る休暇には失禮いたしました。この御寒さに御變りもございせんか？ ちと御出かけ下さいませ御待ちして居ります。○近藤幸枝様 御出浦の節は失禮ひさ様と御揃ひてどんなに嬉しかつたでせう。同級生が集るのは本當に楽しいものですね喜多院の櫻の咲く頃にはこちらから遠征いたしますうか？ ○久住ひさ様 機の音響く古谷の里に何時も奇麗なスラ／＼とした筆を走らせてゐらつしやいます。随分と學校が御忙がしい御様子、でもこれからは日はのびる暖くはなる、花は咲く、蝶は舞ふ、さうなると一里の御通勤が御羨ましくなります。○吉野かく様 裁縫イコール吉野さんこれは何誰も不賛成はないでせう在學時代から御好きなこの道を富岡校で御ふる

ひの事と存じますたまには御近況御もらし下さいませ  
○曙津のお様 金子の里にお姉妹と睦しく楽しい御生  
活近頃はすつかり呑氣になられたとかおつしやつてゐ  
らつしやいます相變らず御熱心におつこめです。○堀  
さく江様 比企郡の首府松山の小學校に相變らず御ふ  
るひ遊ばしてゐらつしやいますたまには浦和の風にあ  
たらなひと御身體の毒ですよ。○岡安みよ様 其後御  
容態は如何ですか餘り御寒いので如何かと御案じ申し  
て居ります一日も早く御全快なされます様祈つて居り  
ます。○吉岡すゝ様 其後は御互に御無沙汰ばかりお  
變りもございませんか？ 何時かの○○澤山御買ひ込  
みてしたか？ ちと御貸し下さいませ。○加藤ろく様  
久しく御病氣で……御全快遊ばしたと思へばその上  
の上と御心配ごとのみ本當に御氣の毒でなんと申し上  
げてよいかわかりません何卒御からだを御大切になす  
つて下さいませ。○水谷ふみ様 此頃御慶事のおはし  
ましたとか洩れ聞きましたか誠に目出度い限りで。  
○今井てい様 夏の講習には君が體操にもふるひの様  
子を拜見致しました相變らず御元氣でうらやましい事  
です。○長井なか様 慈愛深き御兩親の御許から奈良

小學校へ楽しく御通勤です學校が至つても宜しいとの事何よりでございます。○水越はる様 今年の夏休の講習には大里の方々大部分御出席なされました水越様もそのお一人でした先日の消息に「次の夏休には皆様して講習を開かうてはありませんか」何かと思つたら現代式晝寢の方法とは驚きました皆様御賛成は如何？○飯野はな様 先日は遠路はるばる御出浦なされ我級のためにいろいろ御相談下され有難うございました。蔭様で先日の事も皆様御賛成下さいましたので成立さうです。○松永ひで様 如何遊ばされましたか卒業後一回の御目もじも致しません別に御變りない事と存じますたまには御出浦下されませクラスの子三人待つて居ります。○江田さく様 いつも此の道に御熱心な。お方ひそかに君の活動振を拜して感じ入る次第です。○橋本さく様 夏の講習には御熱心出浦なされましたが中途病魔に襲はれまして半途お歸りになられました其後詳はしき御消息を伺ひませんでしたが昨今の御様子は如何ですか一月も學校を缺勤なされたとか、ひそかに案じて居ります。○久保つね様 相變らず御健在で秩父の里にこの道の爲にも盡してす此頃山中の御生

活にもおなれの由、君の日頃の眞面目な御生活が忍ばれます。○田島とし様 久しくお弱かつた由先日のお息にもう御全快との事安心致しました此の休暇には伊香保に御旅行なされましたか御楽しさ如何ばかりでしたてせうお洩らし下さいませ。○田部井むめ様 此頃久しく御めもじ叶はず君獨特の御様子も拜見出来ませんでしたまにはあひたう御座いますよ今度こそ御出浦なされませ珍談でもございましたら御しらせを。○榎本すい様 眞面目な學校で御熱心に御研究の事と存じます。うららかなる春の日利根の邊や如何。○秋山晴様 この頃お琴の音如何で御座いますか絶えて御消息も御座いませんが御健かならんと存ぜられます。○山口多喜様 幸多き日を御過しの事とはるかの地よりおよろこび申して居りますと御出かけ遊ばせや。○林のぶ様 相變らず御多忙です、御すこやかで御座いますね。今度は御一人て静かなところにお住ひ一層御研究がお出来なさる事と存じます。御健勝を切に祈つてゐます。○福田けい様 さえだした御かんばせ思ひ出してゐます。おッパリこの頃も講習に御出られてもそこへに御歸宅ですが。○遠藤せき様 今年のこの

きびしい御寒さ御障りはなきかと三人寄るとかたり合つて居ります。暖かになりましたら御出かけ遊ばせ。○加藤せき様 絶えて御たよりも御座いますねが御健かにて御研究の事と思ひます。○平田妙様 花もはちらふ美しい若奥様御良人様とつれだつて野の道あゆませらるゝ時は村人がいつまでもくく鉄おいてとは豊春の風のたより。マダム振舞したやと六ツの目があつるゝ御門邊噂さに勝る御美しさ驚き入りました。御渡満は何時で御座いますせう、御可愛らしい和子様も遠からず……妙様の御幸福を祈ります。御上京の折には是非御立寄り下さいませ。まつ人多きこの地に。○吉田てい様 大分お振ひ遊ばして御出のよし先頃は展覽會にて賞を得させられたとかあめでたうございます。益々御振ひ遊ばされんことを。○澁谷不二様 あまり理想が高いですとはこの世話やきが、御丈夫で御座いますか。○氏家静代様 遠い遠い海のあなたを三つの心が常に常に案じてゐます、御病氣御全快とかあめてたう御座いましたこの後も尙御大切に遊ばしませ。御すきの折は御消息おまち申して居ります。どうかしてもう一度楽しい會合をと三つの心は常に

願ふて居ります。三つの口は常に話して居ります。けれどももう一同の會合をまつよりも互の間にひかれた細い糸をいや強く張るにつとめ自分自分の仕事に精出して、いつも「心身ともに健かなり」と傳へ合ふを樂しみとせねばなりません。伊藤先生には御不快に入らせられ小高先生は昨年九月この地をなさり遊ばし御同様心細い次第でございます。兩先生の御心に添ふ爲に私たちはすこやかに元氣に働させよう。働させよう。伊藤先生の御全快小高先生の御幸福皆々様の御健勝を神かけて祈ります。三人は無事に働いてゐます。  
(河野瀧澤齊藤)

## 第十三回卒業生消息

松島よし氏 私もこの頃は太分田舎風になりました元よりたんと氣取つた方でもないから尙更野暮くさくなりました。御めもじしても笑つてはいけませんよ。とは先頃よりの御たより。いつもながら至極健にて御務の由。

坂本たか氏 度々御たより有難う御座います。いつ

もながらの魔力ある才筆恐れ入りました。扱て運動道具に要はないと云ふ様なあやさしい君も今は從順なる子供にひかれて大分體操御研究新知識を育英に注がれつゝある由。

濱野たき氏 御務の學校にベーパー風琴一つにて流石の音楽家も御悲觀の御様子御同情致します。それに此の頃女子補習教育のため日曜と雖も午前九時より午後五時まで裁縫御教授との事御骨折の程御察し致します。

村田たま氏 ちと御出浦遊ばせ甘い御菓子も澤山ありますよ。

高島千代氏 如何遊ばされし、さつぱりと御便り下さらぬは御變りありてか御案じ申して居ります。

大澤花氏 御優さしい御風姿にて生徒を導かるゝ御様子拜見致し度う御座います。

山口榮子氏 近頃は太宮の御親類に御出でとのことスタイルよきなやかなる君の尙更に細りになつたとか。如何遊ばされしか。御案じ致して居ります御近い事故時折は御出浦下さいませ。磯部信氏 この頃は本校の方へ御うつりてすつてね相變らず學生時代の理想

論御實行ですか。たまには御きかせ遊ばせ。松野のぶ氏 御元氣にて御つとめ遊ばさるゝ由、島根はつ氏 御出浦の節は留守に致しまして誠に失禮しました幾重にも御わび致します。例の御氣取りの御様子御目にかゝりたる御座います。中島照氏 豊富なる智囊をもたゝるゝ君には益々御發展の御事と御察し致します。御すゝの節はちと御近況なりと、おもしろしを。田實幸枝氏 今度北葛の旭校に御轉任になりました。時々御出浦下さいます御優しの君が御話はいつもながらゆかしく伺ひます。君の御許に養はるゝ兒童こそ幸福者と存じます。峯岸さん氏 極めて御健かに御過しの様です。さぞかし最後の勝利を得んがために、目前の苦痛もありてせうね。細井せい氏 近頃は尋三御受持の由、快活なる君もあのあばれ馬統御になかゝ御骨折の御様子、江原千代氏 三度の御出浦誠に嬉しく存じました。御弟子様を失はれしこと御心の程深く御察し致します。足立易氏 相變らず御元氣にて御務め遊ばさるゝ由。中澤らゝ氏 熱心に色々の研究なされておいてとす。近頃は學校近所に自炊ですつて王合は如何ですか。河田さだ氏 すかさず御研究の由。茂木かつ氏

御出浦の節は留守に致しまして失禮しました。御家から御通ひですか。道程二里では随分御苦勞様ですね。加藤系氏 いともまめやかに御務の由。大島千代氏 大分御熱心との評判です。益々御振ひ下さいませ。鈴木茂子氏 御自炊でも感心に御馳走なども出来るとの事御目出度う。去る二月十一日御出浦の際の三人(田所、鈴木、齋藤)の過去一年間の種々なる話、又君の木村様御墓參の時の御様子等承りしこと到底忘れません。平間友氏 大分社會學研究とやら、ちと人生觀をおさかせ下さい。臺茂氏 御噂によりますと大變御氣取りにて御通勤の由スタイルが拜見致し度う御座います。松本系代氏 近々御目出度があるさうな君が他日に於てお振ひなさるゝ御手腕さこそと御察し申して居ります。田所歌氏 度々御出浦になります。一年前の歌さんも今の歌さんも少しも變りません。盛に音楽を研究してお出でます。夏期休暇にも東京まで講習に御出掛でした、すました講習生皆様の寫眞も拜見しました。それはさうと、もう試験も間近です。ね御體御大事に勉強遊ばせ。それに今は本庄町の親類に御出で、毎日上膳据膳にて御暮しですつて、この物價騰貴には、ちと

御遠慮なさいませ。川島ます氏 益々御熱心との由、うんと御ふるひ下さい。山口まん氏 御體の御太り工合は今如何ですが。去年の八月の御休みには三人とかで富士登山なさいましたつて、如何でしたか。御様子御聞かせ下さいませ。山下この氏 大分御元氣の由、時々附屬で馬場先生と君の御うはさを致して居ります

頭をなでながら「あい、大きくなつたね、姉ちゃんもこれで安心したよ」と遂に二月六日歸らぬ旅路につかれました。聞くにつけ見るにつけ先だつものは涙ばかりあゝなき友の靈よ永遠に安かれ。

「だまつてばかり居ては損です」この頃は如何、御近況御もらし下さいませ。及川たつ氏 何事につけても御面倒よき君訓練に管理にさぞかし御成功の事と御察し致します。本橋うめ氏 この頃の自然に對する御感想や如何に。木村義氏 御病氣との由は一學期の終頃から聞いて居りましたが間近く全快遊ばされしものと嬉しく存じて居りました。處が君には又もや御床につかれ父、母君の手に手を盡されし甲斐もなく病勢益々つのらせられ運命を半生の歴史に止めて逝かれまし

思へば早いものもう卒業してから一年立ちます、三十日ばかりで、新卒業生ではなくなりますね、とり殘された私もまあ意氣地ないながら命だけはとりとめてやつて居ますから御安心下さいませ。種々書きたいのですが御様子のはつきりしません其の上に足らぬ私の事故面白くは書けず、又落ちたのも御座います。うが何とぞ悪しからず。終りに望んで皆様の御健康を祈ります。同級通信も發信が揃いました。二月から廻し始めました、御感想を充分に御書き下さいませ先づはとりとめなき事をながゝと失禮致しました。

## 一部第一回卒業生消息

思へば夢の様です。君は病床にありながら非常に學校の事を御心配なされ、一時も早く全治して歸りたいと申されしとか、又年賀状等も、いくらか來てもなほつてから出すからと一枚も代筆させなかつたとか又逝かるゝまもない日、弟子様を枕邊に呼び、

同級の皆様また春が参りました時候のせいではございませんが陽氣にお暮しのお母様方より。◎黒須いち子様(細田さんの事)「貴女のやうな獨り者には左程

でもないでせうけれど暮つてそりや忙がしいものよ」口は大恐縮でも實際でせうね平常でさへも御良人の御世話やら保さんのお相手やら忙がしいそがしいの連發らしいんですもの泥んや歳末に於てをやなんてせうほんとに其の奥様振りと母様振りが拜見したい。◎島田得子様 高崎市八島町八十四からの御年始状は頗る簡單で其の後の御様子はとんと分りませんけれど喜一さんは嘸御成人なすつたこと存じますもう兄様になりはしないのでせうかちとホームの御様子御洩し下さいな。◎加賀野千代子様 御便りによればお變りなくお務めに家政の整理にお忙がしいとのことだす俊子さんはもう御自分の枕抱へてネンネンヨウなんて云つていらつしやるんですつて一月頃は何でも今ではもうあんよができてお母様の後を追つていらつしやいます。◎田所よし子様(根岸) 桶川町の御家庭から川田谷村へ御通ひなるさうです御子様は女の御子御名は何とおつしやいますの？ ◎杉山福子様 逢たい話したいの思は募つても許して呉れぬ互ひの境遇只折々下さるお手紙も涙で書いて涙で讀むものばかり懊々として樂しまない杉山さんを何とも慰めしたらいでせう

人一倍御幸福で然る可き此の方の近頃の御悲歎を思ふと私は益々世の中が不可解になるばかりです皆さん慰めて上げて下さいませ。◎富久長小衣子様 いつぞやは嬉しい一日でしたのねあんまり不意なんてすもの尙更其嬉びは大でしたボカ〜と暖かい窓に倚つてしみりと過去の思ひ出や懐しい友を偲びましたつ何時に變らぬ良教師の小衣子様教をうける兒童の幸はそもどんなに大きいものでせう。◎白川榮様 冬の汽車通ひはなか〜辛いものですね近頃はも琴も随分御上達でせう。◎伊藤不二子様 聞くも懐しい雪の信濃今年是一段と深かつたやうでございますのね不二子様たまには御便りを誌上へ御寄せ下さいませ。◎古橋登代子様 夕飯も済んだ冬の日は云へ暮れて一時も経つた頃伺ふと今歸へつたばかりとそりや御忙がしい様なので御氣の毒になる程です毎日裁縫の課外があるのですつて一番元氣な此の方も師といふ重い責を負はれてから早指折れば片方の數何となく淋しい方におなりの様に思ひなしか。◎左藤美代子様 川越をお退きになつて昨年十一月から東京四谷第一小學校へ御務めださうでございます御住ひは上野御徒歩町とか電車で五十

分程かゝりますつてね美代子様私御返事待つて居ましたけれど期間が参りました爲失禮ながら風が持て來た御噂だけ何卒花の本場の御様子を皆さんにお聞かせ下さいね。◎掛原てる子様 昨年浦和へ參觀にいらつしやいましたつてねお變りなく御務めの由。◎松本糸子様 掛原様と御同様御熱心に御務めの由。何故か此の御二人はさつと一々心にうつります掛原様と言へば松本様松本様と云へば掛原様丁度島田様と加賀様の様にけれど此の御二人よりはより深く。◎落合美代子様 引き続き日暮里に美代子様御無沙汰御許し下さい。◎町田つね子様 女教師會の御御目にかゝりました變らぬ元氣な懐しい町田さん此の方が遠いのに度々御出かけ下さるのは近くてもお出のない皆さんのよいお模範です。◎高柳ふさ子様 矢張り女教師會の時御目にかゝれました引き続き八つ保に御自炊ですか。◎高橋秀子様 お家にいらつしやいます秀子様お正月には有難うございました私こそいつまでも姉妹と思召してねあの教生時代の思ひ出の語らん限りはね思へばあの熊ヶ谷鷺尾も新學期からは四年生見違へる程大きなうつて居りますよ。◎設樂常子様 いつもお便下さいませ

合つて語り度をお辭にいや筆癖に落つる所は過去の思ひ出からして昔しを忘れぬ純な心に行くべき道を只一條にと勵めまじ合ふてゐるのでございます、近頃は頭のお具合は少しはよろしい方ですか。◎中島緒留様 一月からお姉様のああとをうけて高等の方へ轉任なさいましたそれで大變お忙がしいやうです何がさて一日の教材研究も容易ぢやございますまいものでもねお正月にも設樂さんが「緒留さんがそりや面白い御年始状下さつてよ」とそつとお仰つた程元氣ですから同類項のおかまは大いに心を安んじて居る次第でございます◎同じ様に燻つてゐるものでおなべさんがかう云つて下さいました「あかまもあなべもお勝手の薄暗い隅が一番いゝんぢやないんでせうか明るい所それが何でせう廣い世界それが何んでせう見なくもいゝ物が明るい所では見えるぢやありませんか聞かなくもいゝ事が廣い世界からは聞えて來るではありませんかねあかまさん私は此の頃泌々と狭い薄暗いお勝手の隅を懐しいと思はずにはゐられませんか出來るものなら永久にちゝつとしてここを離れたくはありません(中略)華やかな世間を知らず燻ふり通しに燻つて居ても容赦なく月日の

立つのが恨めしくてたまらない振分髪——小學生——  
出浦——寄宿舎生活——新卒業生とかうした思ひ出から遠ざかり行くのをどうして淋しく遺瀨なく思はずに居られませうあ、私はやつぱりお勝手の隅に引き込みませうそして薄暗い自分の周囲を楽しい世界として過去も未来も思はなかつたら穏やかな心で過すことが出来るのでせうもの泣くも笑ふも五十年同じものなら笑ひませうね面白可笑しく笑ひませう」ともとよりおかまに何の異論がありませう馴れた勝手の馴れた暗そこであなべおかまの自分を盡しませう、よい御飯をこがきぬやうに不味い味増もうまい汁に、さらばお懐しい同級の皆様随分と違者に。(中島石田)

## 二部第二回卒業生業消息

廻文によつて伺ひ得た御様子廻文の順に記してみませう。

○矢内ジツト様 お近くではあるし講習の時などお出でになりますので、度々お目にかゝります。御名聲もあからだも、共に益々お高くなるつしやるやうにお見

受いたして居ります。○加藤よね子様 去年の四月鴻巣から青川小學校へ御轉任、お家からお通ひでした。「日毎々々變る武蔵野のフィールドを我物顔に眺めて苦樂共に味ひながら過してをります。」と近頃お目出度お話と伺ひましたがいづれ。

○岩林(小泉)リイ様 坊ちやまお生れの由よそながらあめてたうございました。○中西さま様「皆様は月日のたつのが早いと仰云いますが、この頃の私はあそく思はれます。月曜から土曜まで僅か五六日の待ち遠しい事」その理由は土曜日に鳩谷から浦和のお母様の許へ乳をのみにゐらつしやる爲なのですつて、赤さんです。

○長瀬とよ様 安行小學校にお振ひてゐらつしやいます。いづぞや參觀においての節はとりまぎれて失禮いたしました。どうぞこの次はゆるく宿りがけておいで下さいまし。○天野貞様「相變らず小さい私は近頃でもやつぱり小さい。毎日八十人の一年生に困らせられてゐます……中略日のある時分から蚊帳をつつて逃げ込んでゐます。机も持ちこんで、時にはご飯もこの中で、まあ物臭いとお笑ひ下さいますな。淋しうはこ

さいますけれど、一人ぎりの自炊生活の氣樂さは自分でも笑ひ出すやうなことを度々やつてゐます。山柴に水清い故郷の父母の計をこひつゝも夏休みには東京で鼻の治療をいたしますとは八月頃の君の御様子。その後如何ですかお大事になさいませ。

○宇野はな様 私の稱した卵の花様。夕暗にぼんやり浮き出たと、いふよりは初夏の若々しい光に白く輝くと云ひたい此の君。御病氣でとうからお退きになつてゐられる由、御養生なすつて元の元氣な卵の花様になつて下さい。○折原とう様 夏休みには唱歌體操の講習に御出席。中々活潑にやつてゐるででした。一寸横から拜見した時は折原様、否折原先生といふ事が私にはわかりませんでした。あまり大人にあらなすつて。「折原先生はこの學校へきた時には子供らしかつたが、近頃は大人先生らしくなつた」と噂する村人の話を聞きなされたとか。誰の目も違はぬものよ、と思ひました。○島崎さん様 肉色表紙に白テップをさゆつと結んだあのノートを片手に、萬年筆の柄で髪のはつれをかき上げながら歌思ふといふのが此の君の御生活とばかりあさつしたして居りましたに、姉様がぶりて桑

つみ大分お顔の色も黒くなられたとか、實に意外に感じました。只今は石原校に出勤。○小野島や様 いづぞやお逢ひした折「私は芳川の美しい自然によつて生きてゐられるのだ」とお仰いましたたがその美しい自然を書いた小野様の文を左に。

「春は青麥に交る菜畑に甘たるい風が吹いてヒラ／＼と黄色い蝶が飛びかひます。田の面にはれんげ草が敷かれます。望も咲きます。蒲公英も開きます。土筆も出ます。芹なづな、嫁菜、はこべら、ほとけのざ、春の野邊とはこんなものよと云ひ顔でございます。

麥刈つて田植もすむと夏は暑うございます。お江戸に續く長い土手には砥の粉のやうなほこりがたちます。古利根川を上つて来る舟の白帆も黄ばんで見えます。行水に汗を流して耕地に出れば何百町の稲葉の上を吹さくる風は涼しうございます。

魂のやうにふはり／＼と螢が飛びます。幾百十とその數限りも知れませんが。家へ歸つて蚊帳をつつた時何時の間にとまつてゐたか螢が一匹フハリと袂をはなれて、寝苦しい夜を慰めてくれます。家の前に霞原がございます。朝窓をあけますと、きつと真白い蝶がまひ

出ます。三羽の時もございます、五羽の時も六羽の時も  
ましてございます。土手の下にひろく溜つた水に花  
じんさいが咲いてゐます。朝咲いてお晝頃にはしほむ  
のです。黄色いきれいな花が朝日に笑ひ時、私は唯わ  
けもなく喜びます。○角倉ひて様 去年の五月お嬢様  
がお生れの由お目出たうございます。もう可愛いさか  
りてございませう。○水谷さど様「私は相變らず九い  
顔をしてチンチクリンてございます。どうも子供らし  
くて困るのでこれから一生懸命先生らしくなる研究を  
しようと思つてゐます」○小松原松様 私は無事で益  
々發展いたしてをりますから御安心下さい。○田谷た  
か様 二部の聖人と綽名のあつたこの君。濃厚なる先  
生として一村の感化に骨を折つてゐるのことに存じ  
ます。この道の爲御自愛を祈ります。○吉野富美様  
御病氣で東京へ御療治に行つておいてだつたさうです  
が如何でございます。御案じ申してをります。  
○瀧澤光様 相變らず御元氣で去年の四月から鴻巣校  
にお勤めの由、尋六をお受持で中々の御研究をなされ  
てゐるとのお噂を伺ひましたお振ひ遊ばせ。  
○田中たか様。

一しほどうなだれてけり 秋海棠  
秋雨や故山を出て幾 春秋  
お父君を亡はれて、天にも地にも母一人子一人。その  
母上と遠く離れて住み給ふお心の内あさつし申します。  
廻文にこの方から研究問題が二つ提出されてありまし  
た。皆さんどしどし發表なすつて、私共におきかせ下  
さいませんか。題は一、尋六高一、二の女兒に對する  
抱負。二、女の職業を持つことの可否です。○荒居美智  
様 相變らず熱心に御勉強の御様子でございます。○  
松井やす子様 相變らずニコニコと川越におつとめの  
事と存じます。○菅原登美様 胃病良薬のラジールと  
オブラードを親友に牛乳を母として暮してゐるでたと  
か、そんな親友とは一日も早く絶交して御丈夫なか  
らだになりなさるやうかけながら祈つて居ります。○  
榎本みつ様「毎日二里ばかりの所を通つて居ります。  
半分は汽車で半分は歩いて。途中には家はいくちもあ  
りません。畠と雜木林ばかり。すいき、あみなへし、  
われもこうなど一面に咲いて居ります。歸りなど送つ  
てきてくれた子守や子供と一所に草の上に坐つて蟲や  
花などを取つて遊ぶことがあります。花の中に坐つた

此の君のお姿が目には浮びます。花か人か。人か花かと  
いふ美しさでございませう。○佐藤サク様 去年の四  
月高階に御轉任。お家から一里の道を汽車で御通勤の  
由御病氣でゐられたさうですがお大切に。  
○長谷川つる様 鶴瀬に御自炊でしたが去年からお家  
からお通ひださう。○山口りつ様「勝呂へ轉任いたし  
まして毎日楽しく暮してをります。朝な夕な十五町程  
の道を通つてをりますがコンパッが短いせいか二十分  
以上もかゝります。始めは自炊といふ事が實に面倒で、  
おそくなつた時などは、大すぎなせんとおだんごで  
お夕飯を間に合せたこともありました。  
しろの實の小さき音して雨の如露つるも悲し春の夕  
ぐれ。  
のどけさや静流れゆく水の面に赤く黄色く花のうつ  
れる。  
一人居ても訪ひてぬ我宿をさやかに照す月のかげ  
哉。  
夏の日は早くれそめてひようたんの花のみ白き七夕  
のゆふ。  
この歌によつて、たのしい御生活の御有様が伺ひ知

られます。幸多くおはせ。○瀬山トリ様 御良人と共  
に米國へお渡たりなすつて、活動してゐるでござうで  
す。  
○終りに私ですが相變らず諸先生の許に甘へて居りま  
す御安心下さいませ。夏休み前に大氣焔を吐いてあき  
ながら、とうとう富士登山はてさずしまひました。(病  
氣のため)今年こそはと思つて居りますが、こんどは  
あまり氣焔をあげず、あきませう皆様の御出浦をお待  
ち申してをります。(こま)

美しい月! 同級の皆さまの上にも同じやうにかが  
やいて居るのかと思へばなつかしう御座います。  
卒業以前お互に泣いてさわいだこの北葛の郡へ放り  
出された可哀さうな子等三人の上にも月は平等の光を  
與へてくれます。  
すめば都とやら私達にもどうやら此處が楽しい第二  
の故郷と云へるまでになりました、北葛飾は好い處で  
した。清い利根の流れに美しい思出を作つて居らるゝ  
宮下百惠様は御幸福でゐらつしやいます、相變らずの

御元氣で然しテニスはあまりなさぬとか先日御手紙で拜見致しました『目ざまし時計の音をボンヤリとさいてから三十分は床の中……今日の仕事のブログラムや過ぎ去つた日の思出を胸にして、さびしい食事をすますと用もないので學校へ出かけますが大抵の日は外の先生はゐらずしやいません早いのて、一日の授業は夢のやうにとりとめもなく過して仕舞ひます。歸宅はいつも四時半か五時、寒い北風にさらされながら青い美しい富士様を眺めて。』

向ふの岸へ赤い灯がチラ／＼と繪の様にともされて白い舟が二つ三つ泳つた様な利根の水の上をすべつて行きますと私はたまたまなくなつて堤の上へかけ上りまづそして寒いのにいつまでもいつまでも立つて眺める事も御座いますやつぱり思出に捉はれて。』とは最近の宮下様からの手紙の一切。

その宮下さんの御らんされる美しい富士山を私も眺めます明けて昨年の三月一日皆さまと共に參觀しました杉戸の學校、寒い運動場、破れた校舎、尻をはしよつて上手に元氣に體操する兒童、此等はすべて皆様の腦中深く印象されて居る事柄で御座いませう、そ

れから折箱づめの御菓子を御馳走になつた事も忘れ下さいませう。

破れた校舎は立派に改築せられました、御安心下さい、この新木の香ゆかしい校舎で一里とはなれてゐない田宮の學校に御出なされる飯高龜尾様と御一緒に日曜日には講習も受けます、飯高様の村から見れば私の町も都なのて毎日曜日には自炊遊す飯高様はこの都へ食糧の買出しに御出なされます。

淋しい御寺へ(私のゐる)例の調子高い聲で高野さんと呼びながら御出下されるのは大抵十時頃です。

二人は私の學校へ行つて三時頃までピンポンをしたりオルガンをはいたりして遊びますそれから飯高様は今日の上都の主眼たるべき買物を歸途の八百屋でなさいますと私達は寒い長い道をたどります歌ひつ語りつ、一人は送る人、一人は送られる人、そして丁度道の半まで行つた時私は元の道へ歸りますふりかへりつゝ二人は次第に遠ざかる……御天道様は赤い影を古利根の流にうつして沈みます町ではバツと電氣が光る。

死人の他には訪れるものでもないこの東福寺の一室にも靜かに夜の幕があらますと死を告ぐるやうな入あ

ひの鐘がゴーンと響きます。

そして又私は来るべき週の準備にとりがかります。愉快な週は迎へられます、冷い水で掃除もすれば寒い運動場で體操も致します、而してますます元氣旺盛で御座います。

私達三人は割合に幸福で御座いましたいつも仲よく暮して居ります、宮下様とは支部が違ひますので御目にかゝる事は御座いせんが御互に時々訪れ合ひます。そしてこの隅の方にゐる三人も常に皆様の御健康と御幸福とを祈つて居ります。

## 講習科第一回修了生消息

小坂コハギ様 大宮町のお宅から學校まで三十町位ある大和田校ではさ／＼した働き振をなさるとか御通勤の御途中は腕時計光らしてあります。◎松本じやう様 また郷里春岡校で随分活動なされ擔任の兒童はまるで自分の子供の様な感じがなさるとか夫も熱心の結果ですお家にはお年の寄つたお母様と只二人。◎井上かね様(舊鈴木氏) 井上氏と結婚なされてから三年

位経ませうか。まだお子さんはありません片柳校でい

つもしとやかの御教授をなさるゝ由。◎金井なみ様(舊石井氏) 御良人様は赤羽驛におつとめ昨年四月可愛坊ちやまお生みてす目下御休職中坊様の御養育に餘念ない御様子。◎田畑千代様 學校を去られて以來さらに御出浦がありませんでしたが近頃は度々お出掛です

一昨年お父上君がなくなりてした。◎加藤重様 幸手小學校より郷里の隣村新郷村へ毎朝鳩が谷間から飛び出たやうな元氣で一里餘りの道をお通ひなさる由近

状を是非つて願ひしましたに「ほんとに平凡で何事もなく暮して居る丈と申上る外御回答にくるしひ次第ですつておかくしなさるな。◎小山清様 隣村野田校へ御通勤然し一里餘もありますので一通りのお骨折てはありません學校では眞面目の教授をなさるとかて兒童が慈母の如く思つて居るさうです。◎小沼させ様(舊北澤様) 三年許り前御親類の方と結婚なされ御良人がシンガポールの臺灣銀行へお勤めなので其處へ一年餘

滞在其の中に信子さんといふ可愛らしいお嬢様をあげられました其の後上海香港と海外に居住なされ只今は香港臺灣銀行支店の舍宅にお住ひの由。◎小谷野アサ

様 昨年三月戸田校をお引になられました金井様とは水魚の交を結ばれました御慶事があるやうに承りましたが其後如何なされましたか。◎吉田はす様 あなたの村は柴山枝郷とは何か歴史的意味のありさうな名です。ね昔の御様子今でも思はれますよ。◎中島緒留様 今度は姉様の奉職して居りました久喜の高等小學校へ御轉任高等ではお世話は餘程少ないでせう夫れで思ふやうに御教授が出来てお楽しみでせう。◎富久長小夜様 殊には御熱心に修養と經驗とをつまれまして母校の方々が御大勢おい出て昔の思出を互に語り合ひ乍ら日々お楽しみでせう。◎石塚よし様(舊服部氏) 先年御結婚も目出度最早お母様におなりの由御よろこび申上ます。◎栗原たね様(舊蜂須氏) 一つの間に御改姓でしたか存じませんで失禮致しました之も平素の御無沙汰の爲です。許し下さい小川は大きな學校です。から母校の方も大勢で時には話に花の咲くこともございませう其の節はお便り下さい。◎島田よみ様(舊渡邊氏) 三年許り前にお母様におなりです目下柳瀬校にお勤め内外多事の御事とお察し致します清子さまも連れて御出浦遊ばせ。◎田中キン様 御卒業以來郷里共和校で

熱心にお勤めの由随分お子さんが出来てせう。◎戸塚みや様 お父様と御一處御自分はいつもあのふつくらしたお顔で熱心に兒童御教養の由。◎杉山ふく様 騎西へ奉職なされてから餘りお出掛になりません御閑暇の時はお便り下さい。◎横塚りん様 御兩親様の御膝下から村の學校へおつとめ御自分はすわり込で十七歳になる従順なお妹さんを使うと使つてゐるつしやる由。◎大山みね様 朝鮮においでです。くはしい住所は存じませんがどういふ御方にお嫁ぎなされたかも分りませんが牧野様へは時折お便りなさるさうです。◎萩野様(舊高井二三氏) 昨年女教師會の折如何にも奥様然としておいででしたが果して先頃東京某汽船會社にお勤めの方と結婚なされました二三様は先頃御退職なされ東京は下谷においででしたが御良人様が目下南洋方面を航海中なので御實家へおかへりの由承りました。◎齋藤千代様(舊角田氏) お二人のお母さまとか然し先日(女教師會)の折おみかけ申しましたけれど少しもお變りになられませんか。◎松本千代様 只一人お父様を残して四里ばかりはなれた山の中の學校で小學時代の友達(裁縫の先生)と仲よく自炊生活です

つてねお父様おさびしいでせうに浦和のお父様が(松村先生) 昨年の暮地質講習の時計らず金澤校の前を通られお立寄しやうと思つたが日暮方であつたので失禮したとかへられてからの話。◎中山キン様 坊様お四つにおなりの由可愛いお母様とお世話にお骨折てせう。◎長谷川つね様 秩父町のお姉様のお宅から毎日二十餘町のところを武甲下しに吹きさらされながら御通勤おかへりはいつも六時頃袴をとるや否やお姉様のお子さんのお馬になつたりおこたの中て唱歌などお教へになるのです。つね子様のこゝ顔が目前に浮びます。◎横田さう様 御近狀長谷川様から伺ひました奏任待遇の校長を上に戴いて大いに振つて居られる由又裁縫の先生と自炊生活時折は朝寝坊なされるので校長の奥様に御心配おかけなさるとか。◎町田ぜん様 先頃御慶事があつたか浦和のお父様へ東京發信のお便りがあつたので早速返事をお出しになられたが戻つて來たさうです其の後如何なさいました。◎牧野よし様 昨年一月養子をおむかへになられました新婚旅行は夏期休暇を利用房總地方から湘南方面へお出かけしてした御良人は目下千葉鐵道聯隊へおつとめ中遠く

はなれて入つしやるので思ふやうにおかへりになれないのです。つて一昨年學校の間近にお家を新築なされ楽しい月日をお母様とお過しの由「こんな呑氣な生活がいつまで續けられますかしら」先日下されたお手紙中にこの語を見ました時は實際うらやましく思ひました。◎阪本郁子様 粕壁小學校においで、すお變りありません。かちと御出浦なさいませ。◎根岸よし様 藤本様様田中たけ様小川久子様の御様子は少しも分りませんが御存じのお方はお知らせ下さい最後に皆様お花の開く頃よく母校で出かけました奥野を御存じてせうあの公園の側の學校に森田は四年ばかり居ります。近頃は汽車で通つて居ります。◎さて卒業後滿五ヶ年になります。が平素打絶え御無沙汰致して居ります。から皆様方の御消息少しも分りませ。誠に困りました然しあの御親切なお父様の宅に近いものです。から無理にお願ひしてたいへん執筆して戴きました私書きました部分で間違つたのがあります。せうが惡からず。猶三月で滿五ヶ年になります。から來年度是非一度會合して皆様とつもる話をいたしたく存じて居ります。お父様も少しもお變りなく御勤で皆様の御いてを待

ちです。

◎井上かね様 舊鈴木様のこと片桐小學校へ御つとめですいつぞやは大宮校へ子供をつれて御出とか御變りないさうです。◎小坂コバギ様 大和田校にあつとめ其の後家事科の御研究はいかがです。◎松本じよう様 家では御母様と二人きりで御淋しう御出でたが學校へ行つては子供と一所になつて面白く暮らさうです。◎島田よみ様 舊渡邊様所澤小學校にあつとめてした退職なされ間もなく喜代子様の御母様となられまして只今瀬柳小學校へあつとめてです。◎藤本恩様 一時退職なされましたから只今は唐子小學校へあつとめてす冬休に思ひ掛なく御逢ひしましたがよほど御太りの様に見受けました。◎服部よし様 石塚様となられ八代第二小學校に御良人と御一所にあつとめてです。◎吉田はま様 この方も大部御太りになつたとは女師附に研究會のあつた時御逢ひした人の御話です。◎坂本郁子様 粕壁小學校にあつとめてです。御變りも

御座いませんか。◎齋藤千代様 文雄さんちる子さんお二人の御母様です。中々御忙しい様ですけれど學校が近いのて餘程よろしう御座います。◎田中キン様 共和小學校についで御つとめてです。◎田中タケ様 御嫁ぎになつたさうですが其の後の様子が判りません。◎松本チヨ様 お母様がなくなりましたたとかほんとうにお氣毒で御座います。◎横田そう様 吉田校にあつとめ非常に振つて御出でださうです。◎蜂須タネ様 御結婚なすつたさうです。が詳しい御様子は存じません。新姓はいかにちと御知らせ下さいな。◎戸塚ミヤ様 先年は良婿をお迎ひになつて楽しく御暮らさうです。◎町田様 この夏休み後退職なさいましたその後のいがなさいました。◎高井一二三様 町田様と同じ頃退職なさいましてどこやらへ御嫁ぎのよし承りました。◎中山キン様 御子様さぞ大きく御なりでせうちと御様子御知らせ下さいな。◎大山みね様 一昨年岡様と御結婚なさいまして只今朝鮮とやらに御住ひださうです。◎蛭間あさ様 先年退職なされ齒科醫の方に嫁ぎになりました夏の休暇に赤いてがらかけての新與様

振を人喜停車場で拜見したとある方が申されました。東京の御様子ちと御知らせ下さいませ。

◎小川久子様 先年退職なされ只今は主人様と川越町に御住ひです。◎小谷野アサ様 やはり退職なさいました其の後のいか御暮らします。いつぞや盛装して石井様の御宅へ御出で御座いました。◎石井なみ様 お母様となられて郡役所の近所に御住ひです。お子様の御守して吞氣そな御様子を時々拜見しますとある方から伺ひました。◎森田まも様 御變りなく御つとめてせうか更に御噂を耳にしません。◎小山すが様 相變らず元氣にあつとめの由うかひました。◎牧野よし様 御良婿を迎へられこの夏休には御揃で北條とかへ御旅行なすつたさうです。あの牧野様がと申し上げると御怒りかも知れませんがすつかり奥様となりすましていらつしたとか汽車の窓から一寸のぞいた方が申されました。◎新井阿和様 松山へ御轉任後まもなく御退職なさいましたが其の後のいかなさいました。◎加藤重様 いつも元氣で御つとめてす唱歌の御研究にお忙しう御座います。◎根岸よし様 退職なさいまして御良人と川越にお住ひとか承りました

小川様などと御逢ひする様な事は御座いませんか。◎北澤さき様 御様子がさつぱりわかりませんが近頃御子様が大きくおなりでせうね。

◎田畑千代様 御變りなく御つとめてせう。◎長谷川常様 姉様のお家から横瀬の學校へあつとめ夏の講習に出席御熱心に御研究をなされたさうです。日頃の御勤振も忍ばれます。冬休み不動詣での歸り道には中々の滑稽が御座いましたね。御こりなく又御出て下さい。

皆様と御別してから早五年にもなります。其後はあまり級の人の消息もわからず會報にもないのはお互に物足りなく思つて居た所或る上級の方の盡力によりまして思ひがけなくも消息の一端をこゝに記すことが出来たかどうか此の後とても出来得るだけ級の親密を計つて御交際しやうではありませんか。(隣子)

## 講習科第二回修了生消息

皆様暫くて御座いましたお互に遠く別れて居りますと知らず／＼垣が厚くなつて参りますどうぞ／＼お暇

の節には一寸なりとも御消息を御漏らし下さいませ此の度も皆様のを書きたいので御座いますがおわかりにならぬ方も居りました誠に残念に存じます。

關様 やつぱり昔の關さんでした去年の八月卒業後始めての御出浦でしかも體操の講習にお出かけでした松本くん様 北足立郡宮原小學校に毎日一里餘の道をお通ひです門の先が汽車道で一年中毎日の様に何萬人かの人々に參觀されて居るのですつて。

彦久保様 熱心な君はまた何かの目的を立てられて此の夏には物化の講習へお出かけになりました秩父の白川とて埼玉の北海道にお勤めでもお花にお琴とはじやれてますねおつとこんなわる口を……御免遊ばせ。

菊澤様 いつかのお約束は？ 羨みますよそう申しますと自分もあります先づ己の身を考へてから人をしてしなね。

浦和様 今年も受持は五六ですかいつかのお話に漸く自分の思ふ通りになつて等と言はれてました。

中村様 趣味に生きよてふ言葉に詩的な生活をして居られます君がお便りはいつも詩や歌で限られてあります此の頃は學校は如何ですか交際術位六ヶ敷いも

のはありませんね。

橋本様 川越南にあふるひ随分御研究でせうお父母様の御膝下からお通ひで何より御座いますお正月にはお誘ひを有難う遂失禮してしまいました、中村さんもしらつしやいましたして楽しかつたでせうね此方の話もたまりましたから又いらつしやい。

柴道様 といへばすぐ御元氣な御様子をお出しますす今も安行へ御通ひですか御様子をお聞かせ下さい。

井藤様 先日は失禮致しましたね子供大勢つれてこみ合ふ中を氷川神社まで行くにはたいへんだつたでせうあれから私は町田さんと小島さんに別れて一人で歸りました。

本野様 岩槻にお勤め髪形の形等たいへん變つてました。

國府様 在校當時からハイカラだつた君は本當に美しくお見受け致しました支會等にはオリブの袴に靴で東京の女學生の様なんですつてわる口はよしませうね。

星野様 昨春御卒業なされてお母様の御實家から鳩ヶ谷校にお勤めですどこまでも眞面目な君の學校での

御活動振はさぞかしと存じます。

吉田せん様 此處にも熱心な方が一人皆さん御紹介致しませうか——せんさんのお勉強振は實におそれ入りました木村先生も非常にお喜びでしたどうぞ御身御大事にして御勵み下さい。

内田様 いつかは御轉任とかの御事どちらでしたかしらやさしい熱心な先生だとして村での評判との事誠に嬉しう思はれます。

松原様 群馬の東校でなくて埼玉の丹莊校といへば體操では縣下第一との事結構ですね服で體操をなさるんですつていつぞやお目もじの節は御熱心の跡は顔にまで表れて黒かつた君は白くなるでなく赤く變つてましたこれは失禮通常も元祿袖でなく筒袖なんですつて中條様 落ち附いた態度で教壇での御指導が目の前に見える様です此の頃も何ぞ御研究ですか時には御發表なすつても悪いとは思ひませんよ御出浦の節は御知らせ下さいな。

松本よし様 今も遠く離れた馬宮で一人で御自炊どんなに淋しい事でせうでも四月にはお妹様御卒業でお姉様の御樂しみはどんなで御座いませう。

金子様 さらにお便りも御座いませんさる人の噂に

近頃お目出度い事のおはしましたとかやがて愛らしきやゝ様のお母様とならせらる事でせう御近況お聞かせしては如何。

小峰様 夏には失禮しましたよく遊びましたわね本當に子供で困ります我儘ばかり申してやつぱり同級生でなければ出来ない事ですね入間郡加治村に御自炊唯一の友はお茶なんですつて淋しくてもお茶さへあれば……よほどお茶と仲よしと見えますね。

野口様 此の頃はじきりと習字のお稽古です夏の中も講習の放課後は木村先生のお宅へ通ひ卒業記念の百六十法もとうにお上げになりました大願を抱いての御勉強お楽しみでせう。

増田様 貴女一度もお出かけなさらないでせうねそうてせう私を北埼玉の方まで引かうとしても動きませんよ貴女が浦和へ出るのが順ですものホホ、毎日快活な増田式の教授法をお練りてせうお手柄話でも聞かせして下さい。

小鹿野様 あの金時計に金鎖金指輪は貴女のからだ一ぱいを照しつけてますよお氣を附け遊ばせ。

長谷川様川酒屋へ三里豆腐屋へ二里たまに魚屋が來ると思へば鹽鮭に乾物があままりとの話本當に不便な所の様です。浦和と志木と大宮との間ですもの。おこげの修業は昔の事。手なみにはおそれ入る次第。勝手に馬鈴薯がごろ／＼してました。つけそうてしたあれは七月でしたもの。表を通る人々は必ず頭を下げて行き。す先生は得意氣に挨拶して居ります。一日中よく語り續けましたわね。

小島様町田様祭の時は思ひがけなく井藤さんと橋本さんにお會ひしましたのね。あれから一人は淋しう御座いました。皆様いつも羨やましい。二人それに分校舎で二人きりなんです。つて二人の樂しさ加減は話になりません。

吉田はる様 會報前號で第一番のお催促今度こそは書きましたよ。讀んで御批評下さい。罪も汚もない可愛らしい里の子をお導き遊ばして平和な日を送りとの御事何よりの幸福と存じます。

かく申す私は刺戟に追はれつゝ、毎日を送つて居ります。此の頃刺戟位よい薬はないと思つて居ります。受入がなければ當然舊くなる理科講習會等には遠慮なくどしどし

どし出て新知識の輸入につとめ様ではありませんか。義務満了も何日でもありませんけれど。誰方の三十年計畫は出來得る所まで實行したいものです。すまじは御無用御様子きつと御知らせ下さい。最後に皆様の御健康と御發展を祈ります。(よし子)

### 講習科第三回修了生消息

野崎しづ様 別にお變りもなう。羽生てふ無味平凡な土地に一年相手にくらしてゐますとのお便りでした。龍澤ひろ様 今年一月彌藤吾とやらへ御轉任なされ職員四人のみすぼらしい寺の學校にて新佛の時などそりやあふ淋しいんださうてゐいます。本堂が職員室兼教室でひろ様は訓導兼小使だとか、何事も無情な運命の神のいたづらだと大さうこぼしていらつしやいます。でもあの御氣象で時節の又來ん時を太いに振つておやり遊ばす覺悟でいらつしやいます。私陰ながら向連を祈つて居ります。

福岡あい子様 昨年七月でしたか早稻田校へお轉任なされ學務委員のお方の宅へ御下宿、學校内は他目に

も羨やましき圓滿なる學校役員學務委員のお方など物

やはらかにうち解けられいとも幸多き御身なる由。

相變らず襟巻手袋もなされず小半里の途を川風に吹かれつゝ至極御元氣にて御務め遊ばさるゝとや。

入谷いね様 兒玉町の小學校にクラスの川部さんと變りもなう御勤なさるさうてゐいます。

田中もと様 學生時代と別に御變りもなくハギ／＼とそしてニコヤカに御務め遊ばしてゐらつしやるさうです。

川部もと様 以前は金屋の小學校だつたと存じます。が今は入谷さんと御一所に兒玉町にしかも御住まで。他目にも新世帯のライフがあたのしさうだとか御目出度い事と存じます。

相田まさ子様 あの時分が一番よかつたわ、なんて大そう學校時代をなつかしんでそれでも御熱心に膝折第一に御務め遊ばしていらつしやいます。

以上七名のお方の近況も甚だまとまりませず一ヶ月も後れて了つて申譯の云ひ様もいませせん。昨日廿四日に歸幸致しましたので早速書きましたが役に立たないかと存じます。どうぞ御許し下さいませ伏して御わ

び申し上げます。

失禮ですが餘紙を頂いて出鱈目を職務上には不平滿々受持は持ち上り尋三女、五男女の唱歌高一の裁縫家事、手工一週三十二時間學校一番の時間數、あらぶれた校舎十七人の職員には處せまき職員室、其處の一隅に小さな自分を見出した時、つく／＼自己のみすぼらしいのにいやになつてしまひます。私と云ふ者はどこまでも、教師としては威げんがなさすぎ落付きがなさすぎます。常識が淺すぎ修養が足りません、とは皆自覺してゐる事なのですがそれをどうする事も出來ないんですから。全く自身で愛想がつきます。

霜月の十五日から私は一年以上時々はおへその宿返り等演じながら愉快にくらした共同ライフをやめて他處の離を借りました。始めはずいぶん淋しかつたらしく今思ふと三四日と云ふもの學校から歸へるのがいやで歸へつて來ると何でも泣いてゐたやうでした。

大屋の奥様は一人者で毎朝逝ける人に捧げる爲めてせう讀經の聲が廣い邸内にとぎれ／＼ひびき渡ります。こうしたしつとりとした云ひしれぬ空氣の家を此の頃私は大好きになりました。けれど實に云ひしれぬ淋

しみの多い生活です。其の淋しい中に私は眞の楽しみを見出しました。それは實に讀書の楽しみて決してつまらぬ小説雜誌ではありません、主に古文學のものを讀んだ大い土曜から月曜にかけては歸宿して叔父母を慰めます家へ三週間も歸へらないと大變なのです、遂先學期の末にも町教育會と日直とがついて歸へれなかつた事があつたのです、家へ通知をしないのも悪かつたのですが直に月曜の朝書面を前略す「土曜から月曜終日お前の歸へりを皆して待つてたけれど遂にお前の姿は見えなかつた三週間も家へ歸へらぬとはどうしたのか校長先生には毎週の歸宅は御承知の筈もし校内にそれを何とか云ふ人でも居らるゝのか、そんなら叔父君も直ぐこちらへ轉任すると云つてゐます、こんなにもお前が來ない處を見ると聊品行上にも疑ひをはさむかもしれません」後略す等と私も驚いて放課の鐘の鳴り方もそしと車を飛ばして歸へり叔父母の君の笑みまず顔拜して翌朝直に歸幸したりなどしました。けれど此の頃は少しさつとなつて自分の自由な仕事に氣まぐれに手出しでもしてゐるんではあるまいし疑つても何と云つてもかまはないつもりです。

自炊も一人では可成り費用が係ります九月からは上給俸になり手當が一圓づゝあるので財政は豊でよいわけてすがうか／＼すると炭屋へ借りが出來たり家へおねだりしなくてはならない様になつたりします。先月の廿四日から今日の廿四日まで丁度一ヶ月間病氣で缺席してしまつた、先生へ失禮なハガキを差上げてから又悪くなつたのでした、そして叔父と叔母と三人で病氣しました運が悪くて今は叔母だけがまだ快くなくて私が居ないと家が困るのですがしかたなく出勤しましたこんな事を書いたのを先生は誰にもお見せになりはしないてせうね、さつとお見せなさらないて下さいませ私も數年廿歳になりました、ほんとうは十八歳と九ヶ月なのです、私は自分でも感じますが少し派出ですからやゝもすると評判がたちたが困つて居ります、それとても私が好んでこうするのもないんですけれど自分では身につけるもの一つ買つた事はありません皆叔父母の選り好みなのです、けれど私は品行等の方では一つとして疑はる様な事はしてありませんそれは、この先生方、私を解して居て下さる方は皆御存じてすまじい／＼申上げたい事もあり

ますけれど、折があつたら伺つて又お話しいたしませう、さぞ御迷わく／＼いませうが他にづける人もない私の心をお察し下さつて御覽下さいませ、先生もさぞ御忙はしい事でいませう、いまして／＼でよう／＼いませうからあすきになりましてあら玉章下さいませ亂れ／＼し文のあや筆の運も御許し下さいませ。御體を御大切に下さつて下さいませ。

二月廿六日夜

敏子 より

中村先生 御許

### 講習科第四回修了者消息

○飯塚直子様 母校なる芝小學校に御奉職遊ばされ二部教授をなされとの事、さぞ御忙がしい事と御察し致します。冬季講習の際にお遇ひ致しましたが、生徒時代と少しも御變りなきやう見受けられ一入なつかしう感じました。○飯田たけ子様 慈恩寺と聞きますと何となく陰氣な學校のやうな感じが致しますが、名に似合はぬ學校との事、非常に體育を重んぜられ毎月運動會をなさるそうです。體操服召しての君の御教授

振り拜見致したうございます。○田口さく子様 横會根小學校に職を奉ぜられ、相變らず御心のまゝなる生活なさるゝ由、風のたよりにほの承りまじた。○武井さく子様 一里ほどもある篠原小學校に毎朝提灯を持つてお通ひです。眞面目な學校でなか／＼御用の多い上に、君には二部教授をなさつてゐてなので、教授さへゆる／＼とつくる暇はないとこぼして居られました。折角御自愛遊ばされ益々斯道の爲に御奮闘遊ばされんことを……。○大野花子様 高麗に御奉職遊ばされその名の如く高く麗はしき景色の中に、可愛い尋一の兒童の指導に努められて居ります。優しき母君よ幾十の子等の爲に益々御研究遊ばされん事を希望致します。○大江よし子様 いつも父母君の膝下をはなれ給はず、あまりお乳を召し上りますと齒がかけますよ。益々唱歌科の御研究との事感服の外ありません。○齋藤花子様 故郷遠くはなれて御自炊遊ばされる御身、あまり煩悶なさつて御體を損はせ給ふな。○小林よし子様 御卒業後早々教鞭物の作製等に御盡力遊ばされ、殊に家事科に御熱心との誰やらのほめ言は、愛する兒童の爲に益々御盡力遊ばせ。○三上よし子様

るとうはる。——(終り)——

父母君の下にて樂しき月日を送らるゝ御身、何と幸多  
き御境遇でございませう。あまり健やかに渡らせられ  
ぬ御身何卒御大切に。○篠原純子様 母校に奉職遊ば  
され、篠原先生々々々と袖にすがりつく子供と御一  
處に活潑に運動をなされる御様子はよその見る目も、  
うらやましいやうでございませう。何卒御身御大切に益  
々御研究を重ねられんことを切に——希望致します。  
○椎名みき子様 一二年の後二學級をお持ちになつて  
尙裁縫をお受持との事、随分お骨折でございませう。  
自分の現在に比較して充分御察し致します。○平井ふ  
ぢ子様 三ヶ島小學校に御奉職、相變らず御元氣にて  
勤められ、暇ある時は月や花を友として樂しき日を送  
らるゝ由に承ります。有名な狭山茶の産地、芳ばしき  
緑茶の香に酔ふて居らるゝ事でございませう。○須賀  
梅子様「我がクラスにて改姓したるは向山梅子の君を  
以て嚆矢とす」とは誰やらの文面。早く姪の顔が見た  
いと姉妹二十六人はまちわびて居ります。○鈴木加代  
子様 大和田第二小學校の宿直室で御自炊遊ばさるゝ  
との事、忠實な弟君をお持ちになるのが何よりの幸福  
でございませう。とき／＼はお米や、味噌を運んで下さ



非賣品

大正七年三月十七日印刷

大正七年三月十九日發行

埼玉縣女子師範學校内  
編輯兼發行者 埼玉縣女子師範學校校友會

右代表者 田 北・欣 哉

埼玉縣浦和町百五番地

印刷人 星 野 市 太 郎

埼玉縣浦和町三九六番地

印刷所 星 野 活 版 所

埼玉縣浦和町三九六番地

何事  
手  
稿

埼玉県立浦和図書館



32097592